

壬生
劍客伝

幕末の風雲児、
高杉晋作が挑む

— 壬生 劍客伝 —

幕末の風雲児、高杉晋作が挑む

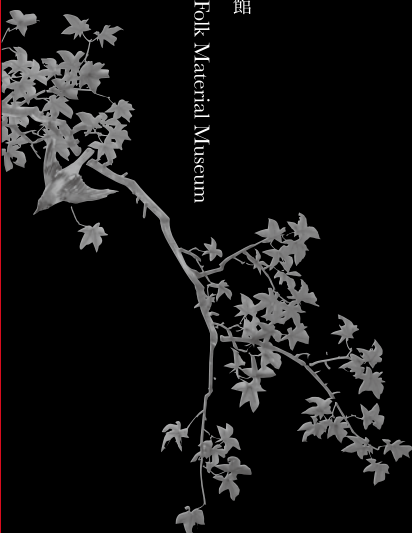
2010年
2月6日 土
3月14日 日
6 February — 14 March

壬生 剣客伝

幕末の風雲児、
高杉晋作が挑む

壬生町立歴史民俗資料館
主催 壬生町 壬生町立歴史民俗資料館

Mibu-Machi / Mibu-Machi Historical Folk Material Museum
Organized by
Mibu-Machi Historical Folk Material Museum



謝辞

展覧会の開催に当たり、左記の皆様をはじめ多くの方々から多大なるご協力を賜りました。
 貴重な資料を貸与され、またご教示くださいました方々に、心より感謝の意を表します。（五十音順・敬称略）

一坂 太郎	太平山神社
植田 俊夫	久喜市教育委員会
柴田 宜久	久喜市公文書館
	古河歴史博物館
池田 勝幸	埼玉県立文書館
伊原 慎太郎	財団法人江川文庫
江川 洋	史跡足利学校事務所
大鳥 居徳男	生涯学習課のみなさん常楽寺
大貫 登	栃木県立文書館
大橋 悦子	蕨山郷土史料館
小谷 超	萩博物館
尾花 利夫	氷見市教育委員会
工藤 雄一郎	氷見市立博物館
國生 泰俊	水見市立博物館
糸川 美智子	山口県文書館
鯉沼 守男	
小林 一成	
小林 幸枝	
佐藤 信洋	
田村 治	
月井 剛	
戸賀崎 正道	
中村 和夫	
永用 俊彦	
野中 繁登	
野原 豊	
花香 友理子	
松本 邁	
水井 貞夫	
山縣 博司	
吉田 真夫	
渡邊 進	
渡 政和	

あいさつ

皆さんは「剣客」と聞いて、どのような人物像を連想されるでしょうか。群がる敵をたった一人で薙ぎ倒す、凄腕の持主―といった、時代劇におけるヒーローのイメージが、やはり強いと思います。しかし、剣客の剣客たる所以は、それだけではありません。剣客は剣の遣い手であると同時に、剣術の「創造者」と「伝承者」、二つの側面を構えています。剣客たちは、学んだ流派の技法を伝承すると同時に、さまざまな創意工夫を加えることで、新たな流派を創始しました。

壬生は「神道無念流剣術」の流祖福井兵右衛門嘉平の出身地で剣術が盛んな藩であり、また時の藩主が武芸を奨励したことにより、数多の剣客を輩出したところでもあります。さらに藩士教育を目的に開設された藩学（学習館）の『校則』に「文武共に出精、成徳達材」とあるように、文武両道の考えのもと、武芸も単に技術としてではなく武士としての心身鍛練の方法として考えられてきました。武芸は、学問の理念や知識と不可分の、武士として必須のたしなみでした。その影響下、弘化四年（一八四七）劍聖齋藤弥九郎は、自らが主宰した江戸三大道場の一つ神道無念流（練兵館道場）の四天王といわれた野原正一郎を、弥九郎長男新太郎の約三年にわたる諸国修行に同行させています。また、文久二年（一八六二）長州藩毛利元徳の命により〈勇士組〉が編成されるに当たっても、弥九郎門下から正一郎と那須唯一が選ばれています。

そして万延元年（一八六〇）、風雲児高杉晋作が『試撃行』の途中、壬生を訪れ手合わせをしたのも、弥九郎門下であり聖徳太子流の達人であった松本五郎兵衛でした。なお、後に蕨山代官江川英龍の高弟となつた友平榮も、天保十二年（二八四二）弥九郎門下の高弟として、水戸〈弘道館〉の開館式で剣術を指南しています。

一方、藩士の神道無念流・聖徳太子流に対して、助谷村の農民糸川政之助は総社村の神新影一円流三代目野中布高より免許を得て、近隣の村々から数多の門人を集め育成に務めていました。この時の藩主は鳥居忠挙（在職一八二六―一八五七）です。忠挙の治世中は内憂外患に備えるため文武両道が目標として掲げられ、彼本人も武芸に関心が深く、安政年間に桂小五郎を江戸藩邸に呼び出し剣技を見定めています。このように藩主は平素から国家有事に対して備える姿勢を持っていました。

この度の企画展では、松本五郎兵衛、野原正一郎、糸川政之助たち剣客を歴史のワンシーンを彩ったヒーローとしてみるのではなく、それぞれの剣客たちが果たしてきた役割を明らかにし、その歴史的背景を探ります。

最後に、本展の開催に当たりまして、多大なご尽力を賜りました財団法人江川文庫様、氷見市教育委員会様、萩博物館様をはじめ、快く資料等をご提供くださいました博物館、文書館、御子孫の皆様に対し、厚くお礼申し上げます。

平成二十二年二月

主催者

高杉晋作と壬生	05
一坂太郎	
第一章「神道無念流剣術」の流祖 福井兵右衛門嘉平	09
一、流祖 福井兵右衛門嘉平と壬生	10
二、継承 戸賀崎熊太郎から岡田十松〈撃剣館道場〉	12
三、隆盛 江戸三天道場 斎藤弥九郎〈練兵館〉	16
第二章 壬生藩の剣客列伝	23
一、壬生藩学習館の教育	24
二、野原正一郎―斎藤弥九郎〈練兵館道場〉の四天王	29
三、那須唯一―長州藩〈勇士組〉で勇名を轟かせた斎藤弥九郎門人	39
四、松本五郎兵衛―斎藤弥九郎〈練兵館道場〉の高弟	44
五、友平榮―斎藤弥九郎の高弟から、江川英龍の高弟へ	49
第三章 農民出身の剣客「神新影一円流」の遣い手 糸川政之助	57
一、一円流の伝承者 野中高と遣い手 糸川政之助	58
第四章 高杉晋作『試撃行』の旅―壬生篇	65
一、高杉晋作『試撃行』の旅	66
二、「柳生新陰流」高杉晋作 vs 「聖徳太子流」松本五郎兵衛	72
下野における剣術の展開と壬生の剣術	78
植田俊夫	
万延元年・高杉晋作 野州路の旅	82
柴田宜久	
神道無念流剣術の系譜	87
壬生の武芸年表	88
解説	90
主要参考文献	93
出品目録	94

高杉晋作と壬生

一坂太郎（萩市特別学芸員）

一、黒船騒動を体験

幕末の長州藩士高杉晋作（一八三九―六七）は、ある事情から上方に出奔したが長州萩（現在の山口県萩市）に連れ戻された。そして元治元年（一八六四）三月二十九日より約三カ月間、城下の野山獄に投ぜられる。

獄中で晋作は書を読み、詩を作り過ぐす。晋作の獄中日記『投獄文記』（『高杉晋作史料』二巻、平成十四年。以後『史料』と略す）には、その間の心情が綴られている。うち六月一日の条には、少年のころの思い出として次のように述べている。「某少にして無頼撃剣を好み、一箇の武人たらんと期す。年甫て十九、先師二十一回猛士に謁す、始めて読書行道の理を聞く」

安政四年（一八五七）秋ころ、十九歳の晋作は「二十一回猛士」こと吉田松陰（寅次郎）に入門した。当時松陰はアメリカ密航に失敗し、故郷萩で幽囚の身のまま松下村塾を主宰し近隣の子弟たちを教育していた。

松陰に出会う以前の晋作は、「武人」として身を立てようと考えていたと言う。しかし時世に無関心だったわけではない。日本の将来を案じ、危機感を抱いていたからこそ「武人」の道を進もうとしたのだ。

晋作は十六歳の安政元年（一八五四）二月、父小忠太（のち丹治）に従い江戸に赴いた。くしくも同年一月、江戸湾にアメリカのペリー提督率いる黒船艦隊が再来し、開国するよう求めていた。これに対し幕府は確答を与えない、「ぶらかし策」で乗り切ろうとする。だが数回の交渉を経たすえ、ペリーの強引な態度に屈した幕府は三月三日、日米和親条約に調印し、開国への第一歩を踏み出した。

ヨーロッパで起こった産業革命の波が、アジア諸国に押し寄せて来ていた。外圧により日本の将来が決められてゆくことに、心ある人々は危機感を募らせる。やがて攘夷を唱える、政治運動が盛んになってゆく。

この江戸行きについては、晋作自筆と見られる「履歴草稿」の中に記述があり（『史料』三巻）、また、山口県文書館毛利家文庫の藩政史料中にも、江戸行きを許可する沙汰書（嘉永六年へ一八五三十二月十四日付）の控えが存在する（拙著『松陰と晋作の志』平成十七年）。「履歴草稿」によると江戸で晋作は「読書教場中にて修行、一日武学拾粹を読んで兵法に感じ、右本を自ら写し取って苦読せし」と述べる。『武学拾粹』とは高遠藩士星野常富（葛山）の著した軍事学書だ。最初のペリー来航半年後、嘉永六年十二月に刊行された。この一事からも、晋作が時代の流れに敏感に反応していた様子がうかがえる。晋作が、いつまで江戸に滞在したか正確なところは定かではない。翌年、祖父の命により帰国したらしいことは「履歴草稿」からうかがえる。そして藩校明倫館の大学部に入り、「武人」になるべく剣術稽古に熱中した。

二、外庄に抵抗するための剣術

ペリー来航当時、多くの人々は剣術により外国勢力を撃退出来ると考えている。なるほど、軍艦からの砲撃には敗れるだろうが、続いて上陸する外国兵相手に白兵戦を演じさせたら、刀槍の扱いに慣れた日本の武士の方が強いと信じた。水戸学の大家徳川斉昭や藤田東湖が説く攘夷の戦略も、その程度だ。それが机上の空論に過ぎぬことが分かるのは、後年に長州藩が関門海峡で実際に外国艦と干戈を交え、大敗を喫してからである。

だから幕末の剣術界には、活気がみなぎった。刀槍に対する信仰が、花を咲かせた最後の時代だ。諸国の若者たちは剣術修行のため、続々と江戸を目指す。なかでも評価が高かった三つの剣術道場の主は後世、講談師たちから「幕末の三剣士」と呼ばれた。技の千葉周作、力の斎藤弥九郎、位の桃井春蔵^{もものい}である。

斎藤弥九郎は越中の人。十五歳で江戸に出て来て岡田十松の門で剣を修行し、二十九歳の文政九年（一八二六）に飯田町組橋に神道無念流の剣術道場を開き、練兵館と称した。その後、練兵館は九段坂上の三番町（現在の靖国神社境内の一部）に移る。門弟は三千人と言われたが、特に長州藩との関係が強かった。長州藩士の桂小五郎（木戸孝允）や太田市之進（御堀耕助）が塾頭を務め、高杉晋作など、多くの長州藩士が出入りしていた。

三、へし折られたプライド

高杉晋作の剣の師は、長州藩士内藤作兵衛である。古武士のような人と伝えられ、明治九年（一八七六）三月、帯刀禁止令（廃刀令）が発せられても、刀を離そうとしなかった。同年「萩の乱」が起こったさいも帯刀し外出したため反乱軍と間違われ、十一月六日、鎮庄軍に射殺されている。享年六十二。内藤家は代々、藩校明倫館で柳生新陰流の剣術師範を務めていた。柳生宗厳の孫十兵衛尉から内藤又左衛門が伝授され、長州に持ち帰ったのだ。作兵衛は又左衛門から数えて七代目に当たる。

晋作は万延元年（一八六〇）四月、作兵衛から柳生新陰流剣術の免許皆伝を授けられた。つづいて航海術を修めるよう藩から命ぜられた晋作は、四月五日より実習船となった丙辰丸（木造帆船）に乗り込み、萩から下関へ出、瀬戸内海、太平洋を経て江戸へと向かう。江戸到着は六月はじめて、実に二カ月におよぶ長旅だった。ところが江戸に着いた晋作は、航海術の修行を断念すると言い出す。「疎にして狂」という自分の性格が、航海術に不向きと悟ったからだと言う。このまま江戸に残り文武修行に励もうとしたが、父からは帰国するよう催促される。

高杉家は戦国の昔から毛利家に仕える、譜代の臣だ。家格は大組（馬廻り・八組）で、代々藩主の側近を輩出した名門である。その長男として生まれ、跡継ぎとして育った晋作のプライドの高さは格別だった。それだけに晋作は、このまま萩に帰るわけにはゆかないと思ったのではないか。

そこで晋作は、かねてからの希望だった北関東から信濃、北陸を遊歴しながら、帰国することを考える。この旅を「試撃行^{しげきこう}」と名付けたとおり、各地の剣術家を訪ね試合をするのが目的のひとつだ。航海術の失敗で失われたプライドを、

得意の剣術で取り戻そうとしたのかもしれない。

「試撃行日譜」（『史料』二巻）によると八月二十八日、晋作は桂小五郎・久坂玄瑞ら親しい友人に見送られ、江戸を発つ。ところが土浦・笠間・宇都宮・日光など、行く先々で剣術の試合を申し込むも断られてしまう。晋作は斎藤弥九郎から「転書」（紹介状）を貰っていたのだが、効果はない。さすがに不審に思った晋作は、当時流行していた江戸から流れてくる浪人の道場荒らしと間違えられているのではと、考えたりする。

九月九日、鹿沼を発った晋作は、壬生という、鳥居家三万石の城下町を訪れた。そして剣術道場を開く松本五郎兵衛に手紙で、試合を申し込む。当時五十八歳の松本は斎藤弥九郎門下で、聖徳太子流の遣い手だった。

日が暮れ、松本の門弟が晋作の宿を訪ねて来る。そして明朝、肥前藩士某も来るから同時に試合をするとの約束をもらう。その夜、一緒に試合をすることになった肥前藩の田中竜之助が晋作を宿に訪ねて来た。話すうち、田中はかつて佐良雄蔵といい、萩の内藤作兵衛の下で修行していたことが分かって来る。晋作は少年のころ、田中に会っていた。その奇縁に手を打って喜ぶ。江戸を出て十日あまり。はじめて念願の試合が出来るのだ。前夜の日記は、ずいぶん興奮ぎみに綴られている。

では、翌朝からの壬生での試合はどうなったのか。実は、江戸出立から壬生到着まで詳細に綴られていた日記が突然途絶えてしまい、何も分らない。次の頁は白紙になっている。続いて信濃から北陸を巡った日記は、雑然と書かれたメモの中に、きわめて簡潔に、しかも途切れ途切れに記されているに過ぎない。

晋作の心境に何か大きな変化が起こったことは確かだろう。晋作は十二日まで壬生に滞在したが、日記にはただ「淹留^{えんりゅう}」と記されるだけで、何があったのかは一切分からない。

十数年前、壬生を訪れた私は五郎兵衛のご子孫から、この謎を解く鍵と思われる同家に伝わる話を聞いた。壬生で三泊した晋作は何度も五郎兵衛に立ち向かったが、ついに一本も取れなかったという。五郎兵衛から、さんざんに打ちのめされたらしい。権威ある柳生新陰流の剣が敗れたのだ。「武人」晋作のプライドは、またもやさんざんに打ちのめされてしまった。日記を書く氣力が失せたとしても、おかしくはない。

晋作が萩に帰ったのは十月下旬のことだ。十一月十九日付で晋作は、江戸にいる久坂に手紙を書いている（『史料』一卷）。その中で、壬生のことには触れていないが、「遊歴は学文実着に相成り、益を得ること少なからず」とし、「僕この節、三年戸を閉じ読書の志起こり候」と、素直な気持ちを知らせる。井の中の蛙が大海へ出、自分が何者なのかを知らされた有意義な旅であった。

それからの晋作は剣士として生きることなかった。時代は急激に進んでゆく。上海に渡航し、奇兵隊を結成し、長州征伐軍を撃退したりと活躍して、慶応三年（一八六七）四月十三日（命日は十四日）に病没した。享年二十九。同年、十二月、王政復古の大号令が発せられ、翌年九月には「明治」と改元されたから、まさに新時代直前に没したのであった。

壬生での空白の時間は、その短い人生にどのような影響を与えていたのだろうか。

凡例

- ・本図録は、壬生町立歴史民俗資料館第十九回企画展「壬生剣客伝」（平成二十二年二月六日―三月十四日）の展覧会図録である。
- ・図版には、資料番号、資料名、所蔵者、解説を付した。
- ・図版の資料番号と展示番号は一致する。
- ・図版には原資料写真を掲載したが、原資料が出品されていない資料については、資料の上に・を付した。
- ・写真は原則として所蔵者から提供を受けた。また写真掲載の許可を受けた方々は、巻末の写真提供者一覧にすべて掲げた。他は当館の撮影による。
- ・展示資料は会期中に一部展示替えを行う。
- ・本図録編集に当たり、一坂太郎氏・植田俊夫氏・柴田宜久氏に玉稿をいただいた。記して感謝申しあげる。

第一章

「神道無念流剣術」の流祖 福井兵右衛門嘉平

一、流祖 福井兵右衛門嘉平と壬生

神道無念流剣術の創始者、福井兵右衛門嘉平は、元禄十五年（一七〇二）下野国都賀郡藤葉村（現下都賀郡壬生町）に生まれ、幼名を川上善太夫と称した。当時下野国南部一帯に勢力をもっていた一円流を野中権内玄慶暉里（円学）に学び、のち諸国へ武者修行に出て信濃国戸隠山の飯綱大権現に参籠すること五十日、ついに剣の奥旨を悟り一円流を立てて神道無念流を称するようになった。そして、元文五年（一七四〇）、三十八歳

で四ッ谷に道場を開き、弟子をとるようになった。この四ッ谷の道場で有能な後継者、戸賀崎熊太郎に出会う。その後熊太郎の郷里である武蔵国埼玉郡清久村に隠居していたが、天明元年（一七八一）十二月二十八日、郷里下野国への旅中に客死した。八十三歳であった。なお、流祖生誕の地である藤葉村は、災害によって全村民が離村し壬生表町に移住したといわれ、現在は塚の上に建つ祠が残るだけである。



001

強而直理義或又曰或字
隨千戈隨千止則義也有
仁義盛也易曰闔戶謂之
坤闔戶謂之乾一闔一闢
謂之變往來者窮謂之通
見力謂之奮利而用謂之
法是故易有太極是生兩
儀故一圓象以木刀始為
未竟為陰陽為二級又或
二道者尚加兩儀如東西
輪為翼以文治天子為王
道以武治天子為霸通天
安靜則以仁義亂則以軍
旅天運地利人和行得之
而以為計策以中通治之
立天之道曰陰陽立地之
道曰氣與則立人之道曰
仁義無三才或備全然則
中太刀之秘術恰如得人

002-1

神五加五形九加九字十
字三字之實或而後乎夫
練修其道妙傳中之一體
無二无三神變顯露已洗
心退藏於密照而得于心
自能克己至其中道位至
極位者莫一大圓之象也
天也人也地也心也道也
神也自己得之依為後弟
紹之以為門徒之書 非
子弟吾千金莫傳之 說
一洗此許如件
享保七郎馬 龍提格仲夏吉
○太和堂頌永軒
牧野氏圖恭
野中権内侍

002-2

001 * 福翁生誕地・藤葉村の祠〈写真〉

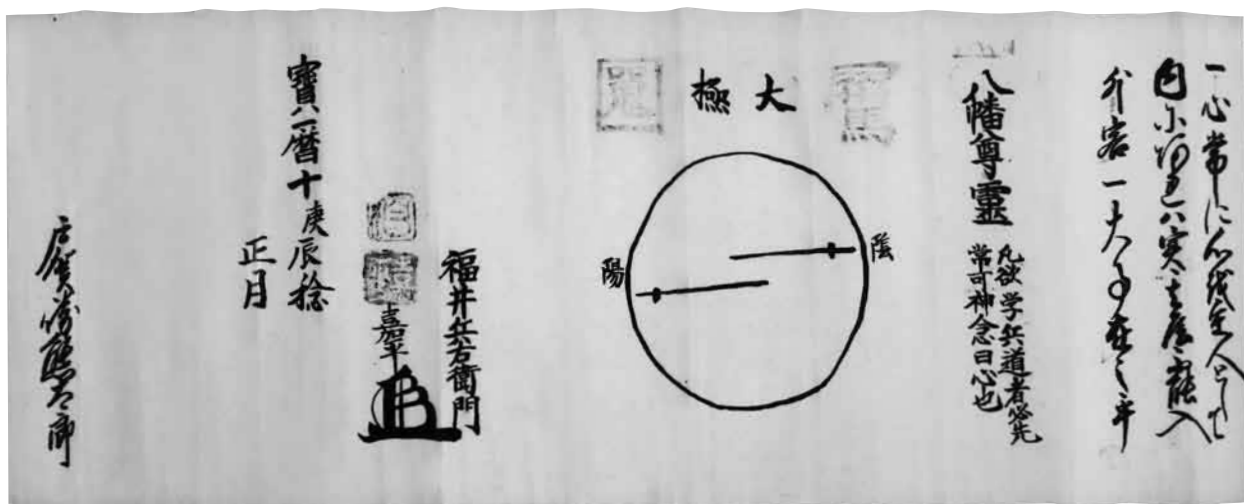
当館

都賀郡藤葉村（現壬生町壬生乙藤葉二）は、福井兵右衛門嘉平の生誕地である。藤葉村は災害によって一村を挙げて村民が離村し、壬生表町に移住したといわれる。跡に残っているのは郷社の神木株と、古墳の上に残る祠だけである。

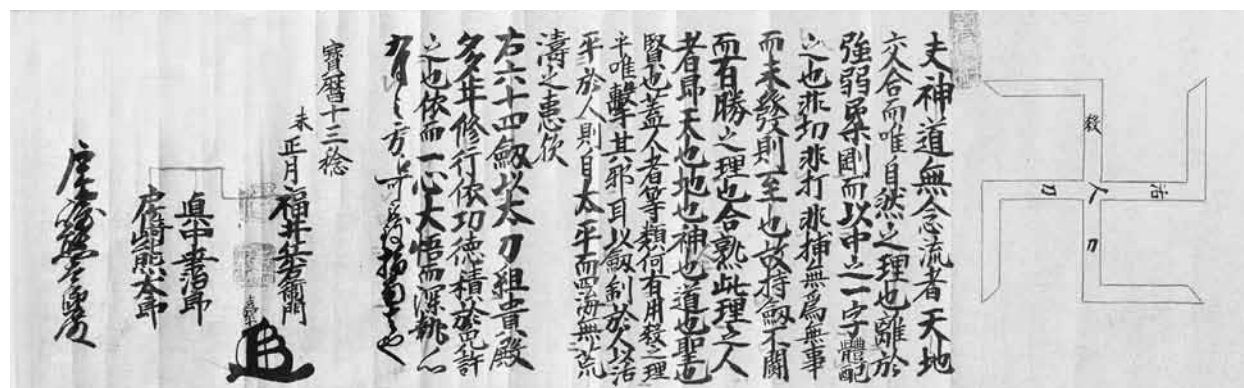
002 野中権内玄慶暉里 神新影一円流免許

個人蔵

野中権内玄慶暉里は貞享二年（一六八五）一円流の始祖、牧野円泰の嫡子として生まれる。号は円学。のち江戸に出て柳生新陰流を習い、諸国修行の末信州飯綱大権現で開眼した。この免許状は円泰より野中円学に与えたものであり、現存する同流最古の免許状である。なお、福井兵右衛門嘉平は、円学より一円流を学んだと言われている。



004



005



003

003 * 福翁府君神道碑〈写真〉

当館

戸賀崎熊太郎が師である福井兵右衛門嘉平の徳を讃えて建立したものである。嘉平の伝記や神道無念流の起源などが記されている。師について熊太郎は、「人となり篤実で常に忠孝の心を存し、生来他の嗜好がなく、幼いときから撃剣を好んでいた」と言及している（「戸賀崎氏練武遺跡」碑）。

004 戸賀崎熊太郎 神道無念流目録

個人蔵（久喜市公文書館）

流祖福井兵右衛門嘉平から宝暦十年（一七六〇）熊太郎にあてた免許目録である。熊太郎は、入門後僅か一年でこの目録を受けるまでになった。

005 戸賀崎熊太郎 神道無念流免許皆伝書

個人蔵（久喜市公文書館）

流祖福井兵右衛門嘉平から宝暦十三年（一七六三）熊太郎にあてた免許皆伝書である。

二、継承 戸賀崎熊太郎から岡田十松（撃剣館道場）

福井兵右衛門嘉平の後継者、戸賀崎熊太郎は延享元年（一七四四）武蔵国埼玉郡上清久に生まれた。宝暦九年（一七五九）剣術修行のため江戸に出て、神道無念流剣術を創始し教えていた福井兵右衛門嘉平に入門した。熊太郎の上達はめざましく、宝暦十三年には「免許皆伝」を受けた。その後諸国修行の旅に出て、安永七年（一七七八）江戸裏二番町に道場を開いた。門人の数三千人ともいわれ、その中から岡田十松などの剣客を輩出した。寛政七年（一七九五）に十八年間にわたる江戸での生活に終わりをづけ、道場を高弟である十松に託し、文化六年（一八〇九）六十六歳で生涯を閉じた。



006

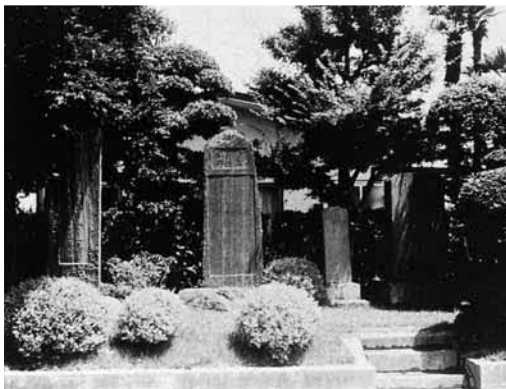
その後継者岡田十松は明和二年（一七六五）武蔵国埼玉郡砂山村に生まれた。安永九年（一七八〇）熊太郎の道場に入門すると非凡な才能を発揮し、寛政二年（一七九〇）には「免許皆伝」を受けている。寛政七年、師の熊太郎が郷里に帰ったあと、裏二番町の道場を受け継ぎ、その後神田猿樂町に移って「撃剣館」を主宰した。その門弟の中に、藤田東湖、渡辺華山、江川英龍、斎藤弥九郎、芹沢鴨などの剣客がいた。十松は道場を託されてから二十六年後の文政三年（一八二〇）、撃剣館で他界した。時に五十六歳。

006 戸賀崎熊太郎肖像画 個人蔵（久喜市公文書館）

神道無念流二代目。文化六年（一八〇九）五月十一日、六十六歳で剣一筋に生きた生涯を閉じる。法名は「神授院大空暉芳居士」という。

007 * 戸賀崎氏練武遺跡（写真） 当館

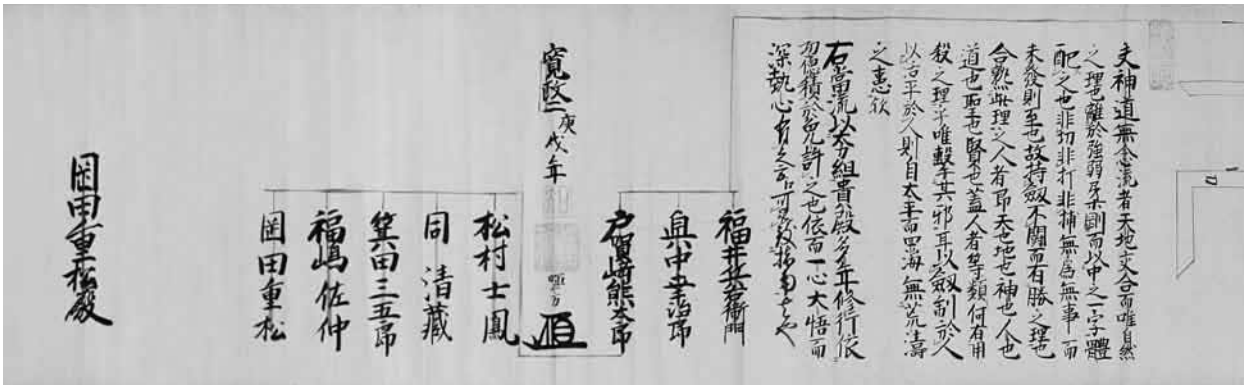
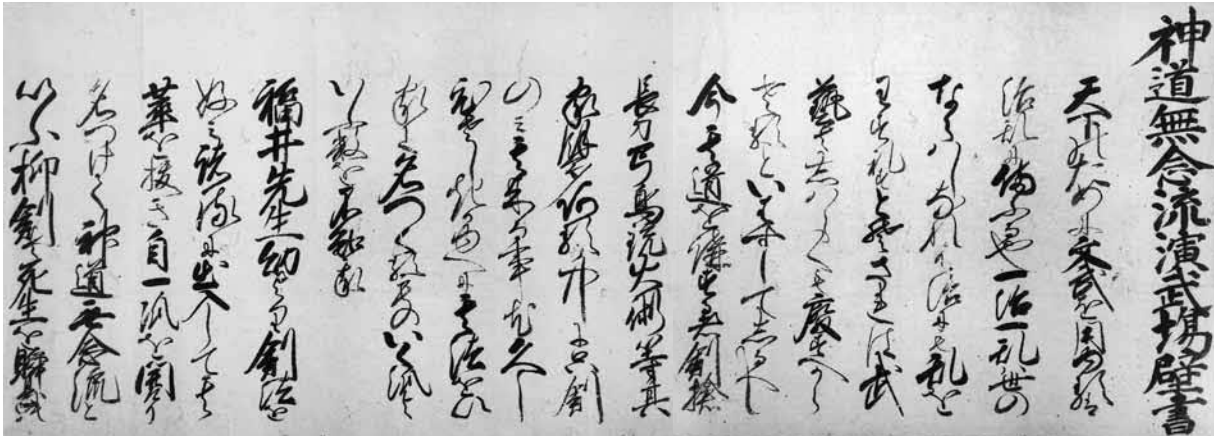
神道無念流は、下野国の福井兵右衛門嘉平がその流祖であるが、宝暦十三年（一七六三）、戸賀崎熊太郎が嘉平より免許皆伝を許され、その後は戸賀崎家が宗家となる。門弟三千人を数えるほど栄え、中でも岡田十松、斎藤弥九郎などの剣豪の出現により、天下にその名を広めた。道場の旧跡には「戸賀崎氏練武遺跡」、「戸賀崎先生碑」、「福翁府君神道之碑」、「知道軒戸賀崎先生衣幘之蔵」の碑が立ち並んでいる。



007

神道無念流演武場壁書

008



009

008 神道無念流演武場壁書 個人蔵（久喜市公文書館）

戸賀崎熊太郎は、神道無念流の起源や剣術を学ぶ者の修行態度から心の持ち方までを教え諭した「神道無念流演武場壁書」を道場訓として掲げ弟子たちの指導に当たった。

009 岡田十松 神道無念流免許状 埼玉県立文書館

戸賀崎熊太郎から寛政二年（一七九〇）十松にあてた免許皆伝書である。

三、隆盛 江戸三大道場 斎藤弥九郎〈練兵館〉

斎藤弥九郎は寛政十年（一七九八）越中国射水郡仏生寺村に生まれ、江戸に出て十八歳のとき岡田十松の「撃剣館」に入門した。弥九郎は剣術のかたわら漢学を赤井厳三、兵学を清水俊蔵、馬術を品川吾作、西洋砲術を江川英龍に学んだ。なお同門には藤田東湖、渡辺華山、芹沢鴨らがあり、特に弟弟子に当たる葦山代官江川英龍との交流は深かった。師岡田十松の急死により、撃剣館では十松の妻子を江戸屋敷に引き取り、弥九郎が師範代として経営を行うこととなった。弥九郎の努力によって「撃剣館」は活気をとりもど

し、弥九郎は文政九年（一八二六）英龍の援助を得て自らの道場をもち独立した。これが九段坂俎板橋の「練兵館」である。この後「練兵館」は天保九年（一八三八）の火事で類焼したが、再び英龍の助力を受けて麴町三番町（現靖国神社境内）に移転した。以後ますます発展し、千葉周作の玄武館、桃井春蔵の土学館とともに江戸三大道場のひとつに数えられ、桂小五郎、渡辺昇、高杉晋作、松本五郎兵衛、野原正一郎以下多くの人材を養成した。



014

014 斎藤弥九郎肖像画

水見市教育委員会

「篤信斎藤原善道六十二歳肖像」とある。弥九郎（善道・篤信斎）と江川英龍との交流は深く、のちに葦山代官所の御用人格に取り立てられ、青年たちに文武の道を教えるとともに、常に民衆の救済に心をを用いた。江戸湾防備の台場築造において実地測量、工事監督等に能吏ぶりを発揮した。また、新しい兵法を求めて洋式砲術の演習にも参加した。政治にも見識のあった弥九郎は、徳川斉昭（水戸藩主）や毛利元徳（長州藩主）らの厚遇を受け、時勢を論じたと言われる。明治四年（一八七二）、七十四歳の生涯を終えた。



015

015 * 神道無念流練兵館跡〈写真〉 当館

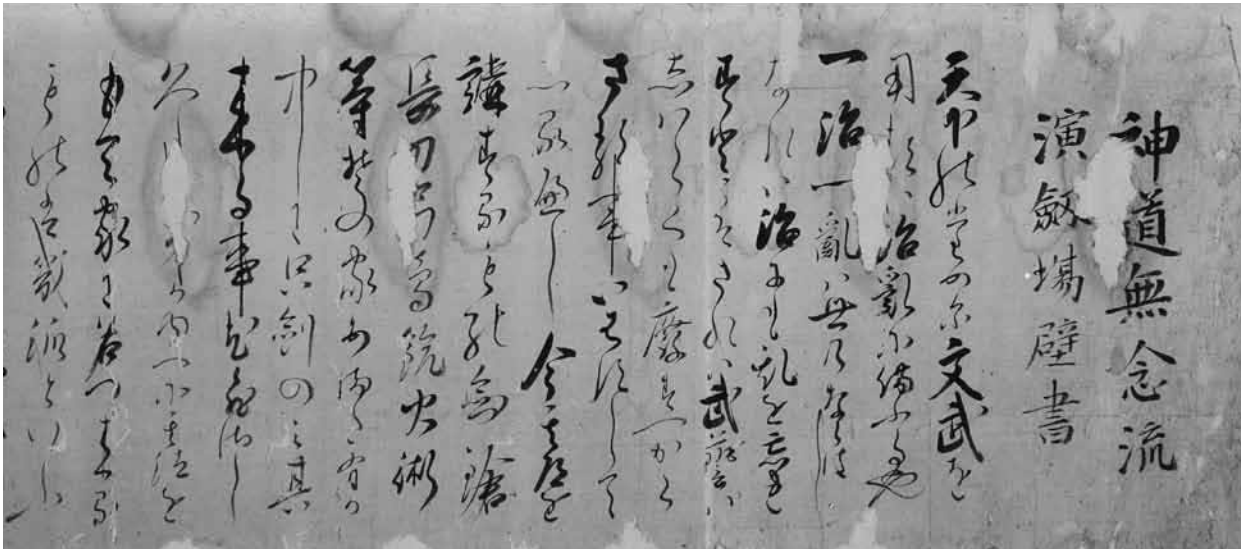
天保九年（一八三八）練兵館は隣家の火事で類焼し、のちに再建される。再建された場所は麴町三番町で、「江戸切絵図」を見ると、壬生藩島居丹波守忠孝の上屋敷の筋向いである。現在は靖国神社の境内になり、「神道無念流練兵館跡」と刻んだ石碑が建っている。

016 神道無念流演劍場壁書 水見市教育委員会

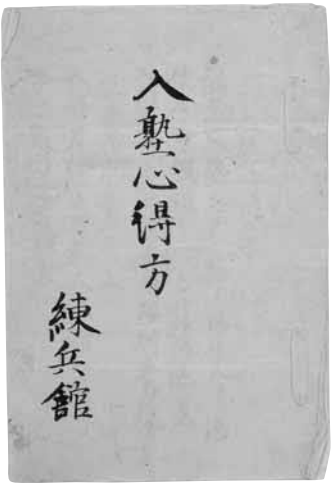
壁書は戸賀崎熊太郎が掲げたものを斎藤弥九郎が筆写し、練兵館道場に掲げ弟子たちの指導に当たったものである。

017 練兵館入塾心得方 水見市教育委員会

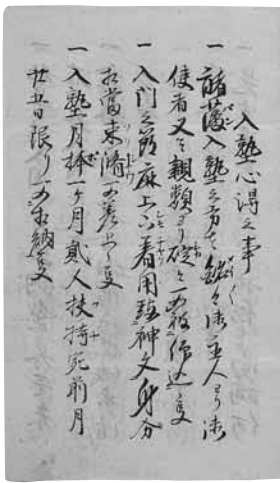
練兵館の塾頭より出された心得である。塾内に掲示された「塾中懸令」には、生活上の問題をふくめ、塾頭の指示にしたがうよう、平常の動作・言語にいたるまで厳しく規定されている。日課面では、毎朝六ツ時（午前六時）に起き五ツ時（午前八時）まで素読をし、ついで昼前に稽古し、昼後の出張稽古は夜五ツ時（午後八時）迄と規定している。



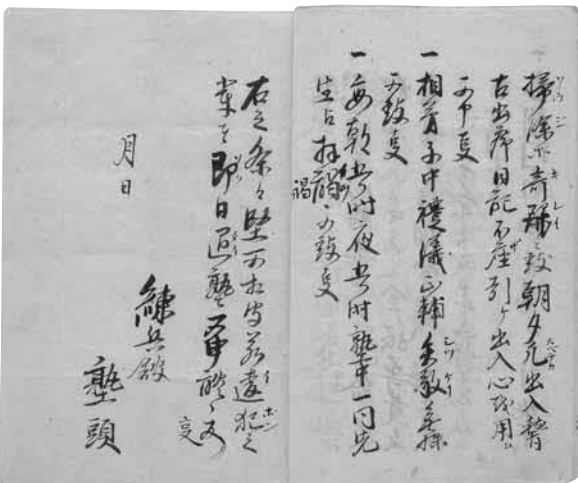
016



017-1



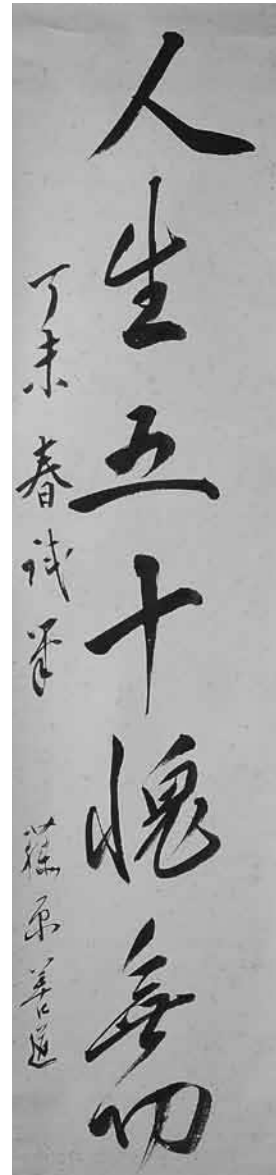
017-2



017-3



020



019



018



021



022

018 齋藤弥九郎書『一行書』
氷見市教育委員会

「崇孝行年七十二 篤信齋」とある。

019 齋藤弥九郎書『一行書』
個人蔵

「人生五十愧無功 藤原善道」とある。

020 伝齋藤弥九郎所用 短刀
氷見市立博物館

齋藤弥九郎が使ったといわれる短刀。銘忠行。

021 齋藤家所用 竹刀
氷見市教育委員会

022 齋藤家所用 木刀
氷見市教育委員会



023

023 大國士豊画 江川英龍肖像画

財団法人江川文庫

江川英龍の絵の師匠である大國士豊による肖像画。自画像に比べ若々しい表情が特徴である。英龍が神道無念流の岡田十松道場、撃剣館に入門したのは文化十五年（四月に改元して文政元年、一八一八）のことである。撃剣館は当時江戸有数の道場であり、多くの剣客を育てたことで知られる。英龍はここで、友として、また部下として、自分を支えてくれる齋藤弥九郎に出会う。兄弟子弥九郎の指導もあつて英龍の剣は上達し、二年後には免許皆伝を許される腕となる。のち、弥九郎は英龍の後ろ盾を得て練兵館道場を開く。

024 江川英龍画『甲州微行図』

財団法人江川文庫

江川英龍は、天保八年（一八三七）三月ごろ齋藤弥九郎とともに刀剣商人に扮して、甲斐・武蔵・相模を巡廻した。これは代官としての巡廻とちがい、直接かつ内密に実情を把握しようとしたものである。そして、難治県といわれる甲州も、その民情が悪いのではなく、支配代官とその属吏が悪い、との結論に達した。この「甲州微行」は各方面から壮拳とされたという。この図は英龍自身が刀剣商人に扮した自分と弥九郎を描いたもので、明治になって岡本黄石が詩を作り讃とした。



024

025 御用留

財団法人江川文庫

天保六年（一八三五）、江川英龍が世襲代官に襲くと、齋藤弥九郎は江戸詰書役見習いとして二人扶持を給され、名を岩嶋傳九郎と改めた。弥九郎は文政九年（一八二六）以来組板橋付近に練兵館道場を開いており、道場主宰者としては齋藤弥九郎、役所勤務には岩嶋傳九郎の名を用いたが、天保九年（一八三八）さらに齋藤左馬之助と改姓した（手附手代性名書付覚『御用留』）。

026 江川英龍 剣技寒稽古記録

財団法人江川文庫

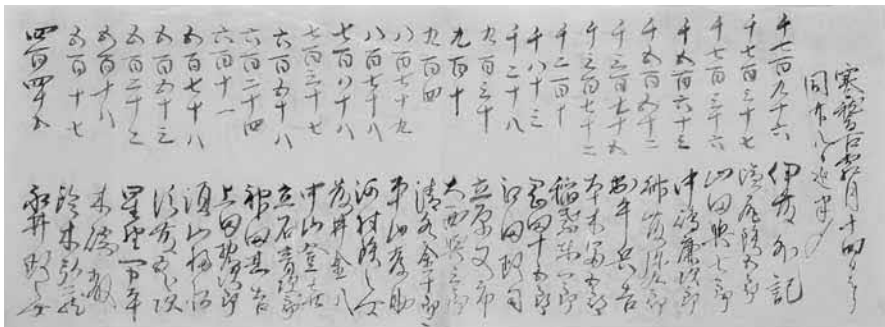
江川英龍の寒稽古の記録である。英龍は岡田十松に入門する以前から、家臣の剣客望月鶴助（弥九郎の先輩）について剣技練磨、目録以上の腕前を持っていたという。この記録によると、入門後の霜月十四日から二十八日までの十四日間に三万三百四十三試合も行っており、まさに驚異的な寒稽古である。同門の齋藤弥九郎とは千五百五十二試合、師岡田十松とは三百三十一試合をしている。



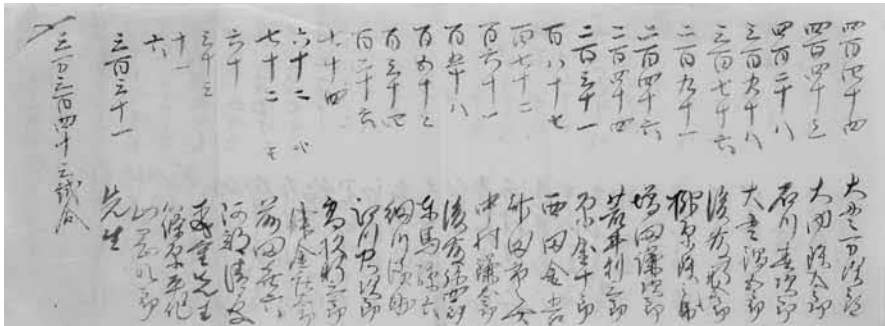
025-2



025-1



026-1



026-2

↑

第二章

壬生藩の剣客列伝



027



028

027 江川英龍画 練兵館旧蔵『雲竜之図』

氷見市教育委員会

斎藤弥九郎は江川英龍の援助のもとに独立し、これが九段下組板橋の練兵館である。こののち、練兵館は天保九年（一八三八）三月の火事で類焼するが、再建に当たっても英龍の精神的、物質的支援に負うところが多かった。再建された場所は現在の靖国神社境内、三番町の一角である。これは練兵館に遺された英龍（坦庵）の「雲龍之図」である。

028 江川英龍画 練兵館旧蔵『鷹之図』

氷見市教育委員会

練兵館に遺された江川英龍（坦庵）の「鷹之図」である。

一、壬生藩学習館の教育

壬生藩鳥居家によって正徳三年（一七二三）城内二の丸門外北側堀端に建てられた学習館は、兵書を中心に講義を行っていたが、修学生の増加にともない弘化三年（一八四六）に藩校の拡充改組が行われた。その際、江戸藩邸内にも藩学自成堂を設立し、学頭に儒者太田熊山（泰蔵）を招聘した。新学習館は従来のもものより格段に充実し、構内敷地六百四十五坪（約二千百八十二㎡）、建物百五十三坪、二階二十八坪、板蔵十八坪、文庫六坪という、三万石という藩の規模に応じたものであった。講堂は「コ」の字に配置

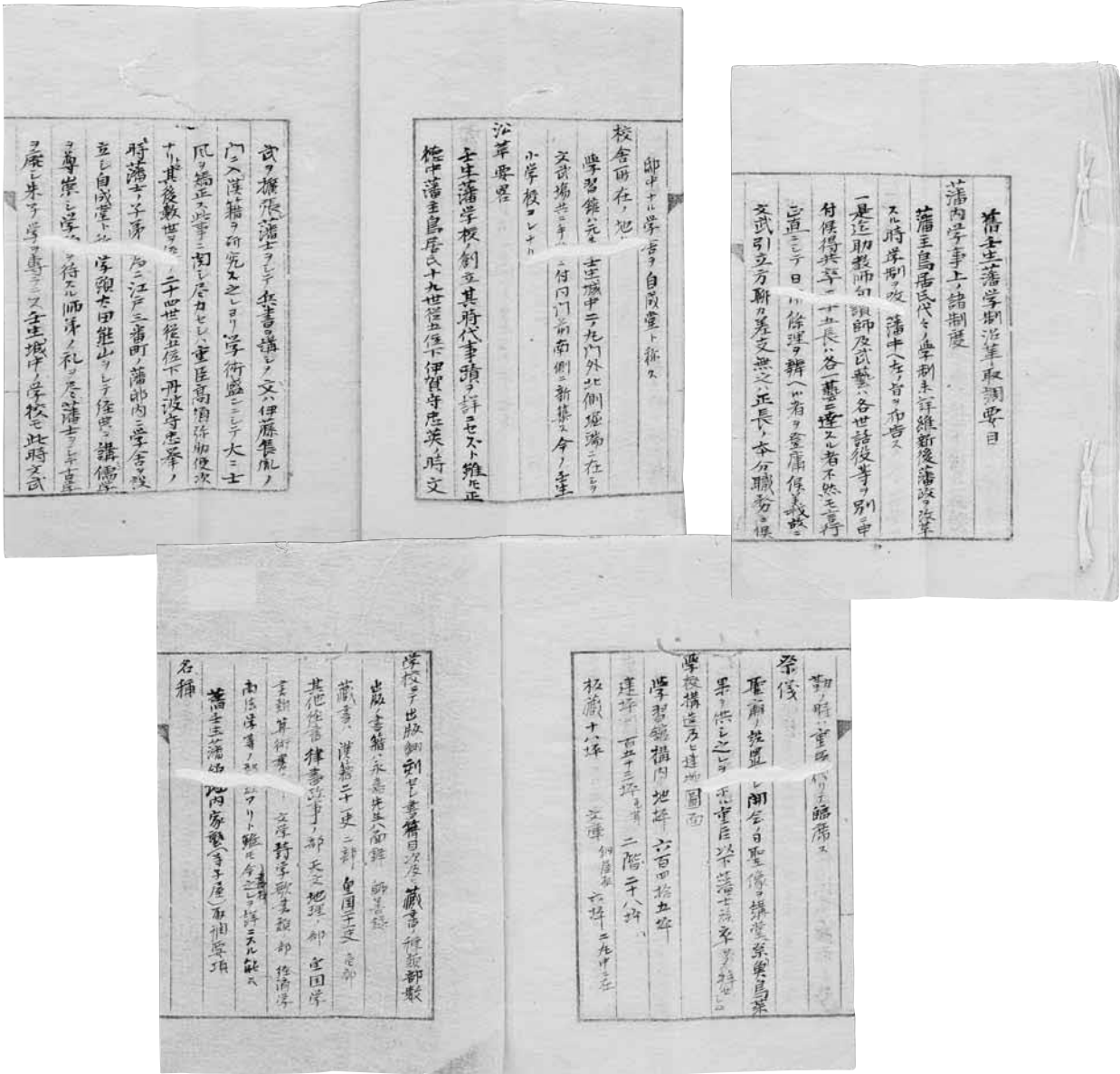
され、南側が学習館、北側が演武場であった。漢学（朱子学）は学習館中で授業を行い、兵学（長沼流・オランダ式）、馬術（大坪流）、鎗術（二旨流）、剣術（聖徳太子流・神道無念流）、砲術（オランダ式）、柔術（大雲流）は演武場及び練兵場で午前八時から正午まで行われた。『藩学綱領』には「学問ハ忠孝仁義身ヲ齊・・・（中略）・・・文武出精ヨリ国家ノ御大用ニ相立候様可致事」とあるように、藩主が校則に沿って文武の興隆につとめ、国の治乱共に奉公の覚悟が肝要であることを述べている。

029 鳥居忠挙肖像画
常楽寺法寶蔵

六代藩主。文化十二年（一八一五）四代藩主忠熹の四男として生まれ、のちに幕府要職の若年寄になった。藩財政の危機に際して財政再建を目的とした構造改革を実施し、また蘭学を含む学問の振興と人材登用をすすめた。とりわけ平素から国家有事に備える施策は特筆に価する。



029



030

030 旧壬生藩学制沿革取調要目
常楽寺法寶蔵

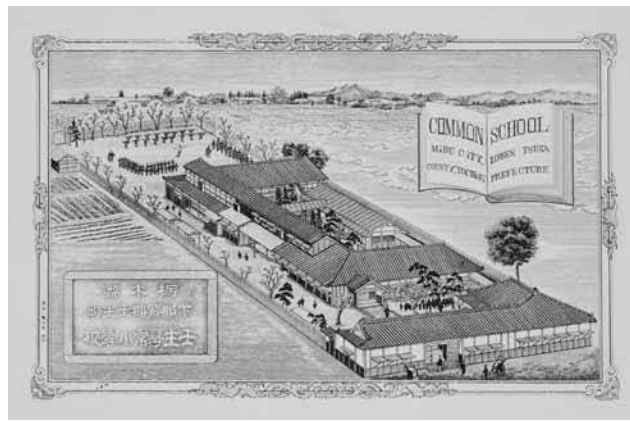
壬生藩学（学習館）については、「日本教育史資料（以後、「資料」）がその概要を知る唯一のまとまった史料である。明治二十三年（一八九〇）に文部省から発行された「資料」は、明治十六―二十二年に府県および旧藩主に調査を求め編纂されたものである。この中に収録されているものとはほぼ同じ内容の史料が、常楽寺所蔵の『旧壬生藩学制沿革取調要目』、『旧壬生藩立学校取調要項』、『旧壬生藩領地内家塾（寺子屋）取調要項』である。これらの題名は、「資料」の編纂にあたり明治十六年（一八八三）二月五日付、文部卿福岡孝弟代理大蔵卿松方正義名で府県宛に出された指示内容そのものである。このことから、『取調要目』は鳥居忠文が提出した調査の控えであることがわかり、「資料」の記す「旧藩主鳥居忠文取調」を裏付けるものである。



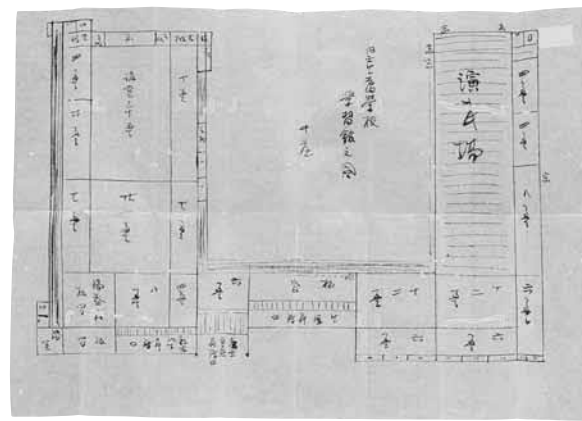
034



035



033



031



032

031 学習館平面図

常楽寺法寶蔵

『旧壬生藩学制沿革取調要目』の附図。「要目」によると学習館の規模等は、「構内地坪六百四十五坪、建坪百五十三坪（瓦葺）、二階二十八坪（瓦葺）。板蔵十八坪。文庫（銅屋根）六坪二丸中二在」とある。略図によると、南側が学問所、北側が演武場で両者をつなぐ渡り廊下の部分には「昇降口」があり、生徒用、教官用のほか、式台のある藩主・重臣用の昇降口もあった。二階は「寄宿所」と記されている。

032 学習館学規

常楽寺法寶蔵

教育改革に当たって六代藩主忠孝が定めた教育の大綱。創設より百三十三年後、弘化三年（一八四六）に学習館知事（館長）より「学規五章」が出され、創立当時の古学から朱子学への方針変換がなされたことがわかる。また、内容には「略」文弱に流れず、武暴に墜さるよう出精可致候事」と文武両道の必要を掲げている。

033 「壬生尋常小学校」（『大日本博覧図』）

個人蔵

栃木県之部の内。学習館については、平面図は残存するが、鳥瞰図は確認されていない。しかし、明治二十三年（一八九〇）に刊行された、『大日本博覧図』の内「壬生尋常小学校」は、当時の様子を知る上で参考になるだろう。平面図と博覧図を比較すると、中央の「コ」の字形に並ぶ建物の配置が同じであることがわかる。この「コ」の字形の場所が学習館である。維新後、学制頒布に際して、子爵鳥居忠文が学習館校舎を壬生町に寄附し、壬生尋常小学校にしている事実からもこのことが確認できる。

034 学習館出版書『師善録』

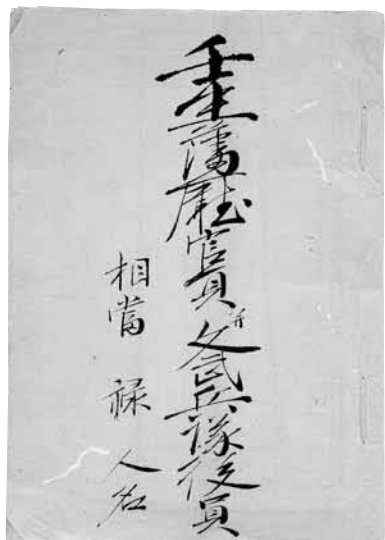
史跡足利学校事務所

太田熊山（泰蔵）著。日監精廬版。太田熊山は壬生藩儒者であり、江戸藩邸内の藩学自成堂の学頭である。天保九年（一八三八）、学習館出版書として『師善録』論語説全三巻が著された。本書は熊山が師の本間默斎を讀えて著したものである。

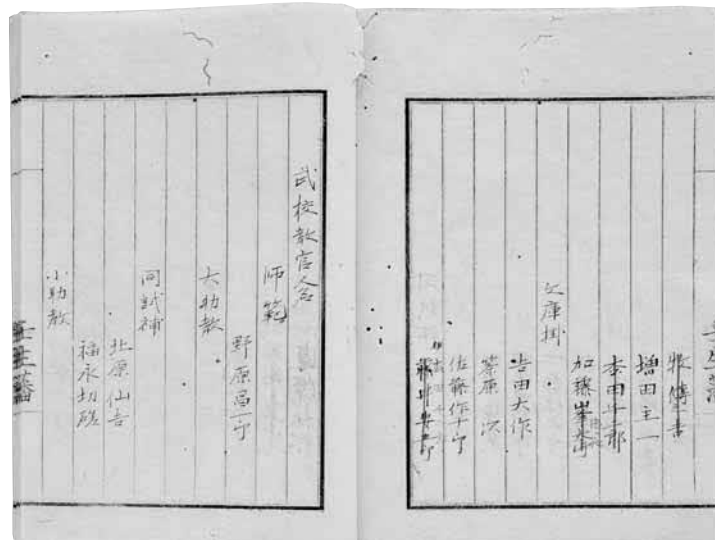
035 学習館出版書『永嘉先生八面鋒』

当館

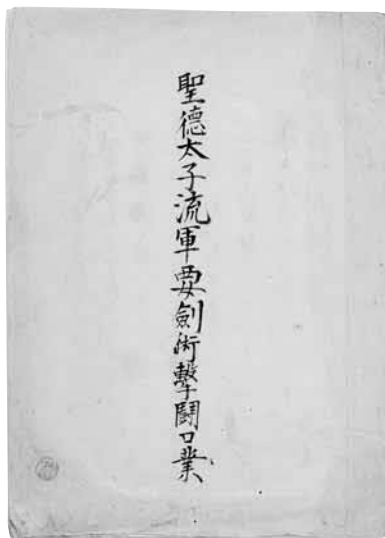
太田熊山（泰蔵）関。壬生自成堂蔵梓。「永嘉先生」というのは特定の個人を指すものではなく、永嘉学派からとった名称である。永嘉学派は中国浙江省の温州永嘉地方を中心に広がった学派で、実学を重んじたため功利学派とも呼ばれる。体制学派の朱子学に対して経世致用の学として用いられた。また「八面鋒」というのは、八方つまりすべての方向に対して「八面六臂」のごとく巧みに処理する鋭い論鋒の意である。本書は天保十四年（一八四三）学習館出版書として刊行。維新後にも再版されている。



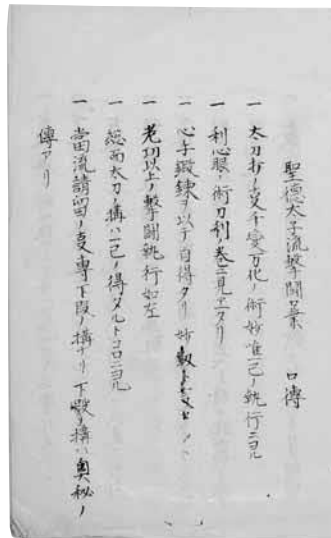
036-1



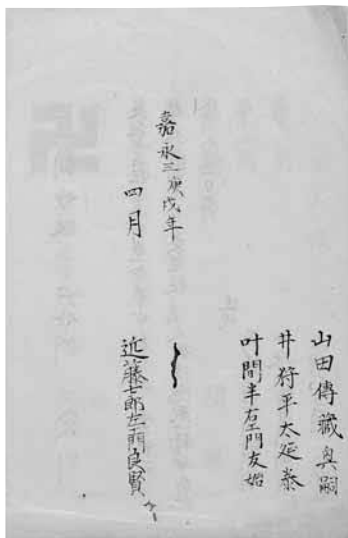
036-2



037-1



037-2



037-3



037-4

036 壬生藩庁官員並文武兵隊役員

常楽寺法寶藏

知藩事鳥居忠文が藩政改革に伴って編成した官員名簿。学校教官人名として、督学、大助教、同試補、文庫掛、武校教官人名に師範、大助教、同試補、小助教、同試補、書記が席順に従って挙げられ、武校教官師範に野原正一郎の名がある。

037 聖徳太子流軍要剣術撃闘口業（口伝）及び「老功」状

個人蔵

壬生藩剣術の流派、聖徳太子流剣術の元祖は、望月相模守定朝である。太子流とも称し、会津藩・仙台藩に広まった流派である。口伝は聖徳太子流の伝書を冊子にしたものであり、老功授与の際に伝授されたものと思われる。

二、野原正一郎——斎藤弥九郎〈練兵館道場〉の四天王

野原正一郎は、文政十一年（一八二八）壬生藩士野原正助の嫡子として壬生城下に生まれた。名は正道。十代で斎藤弥九郎の「練兵館」に入門すると非凡な才能を発揮し、弘化四年（一八四七）の二月、十九歳で「練兵館社中」の猛者三十八人の一人として「都下諸流試合」といわれる幕末最初の壮烈な道場対抗試合に参加した。また同年四月、斎藤弥九郎の長男新太郎が約三年にわたる諸国修行の旅に出ることになった際に、同行したのは正一郎、清水牧太、山田惣二郎、細田泰二郎ら「練兵館社中」の四天王であった。長州藩の史

書『忠正公伝』に「嘉永二年六月十五日江戸の剣客斎藤新太郎も、其の門人細田泰一郎、野原正一郎を伴いて来秋せり、……（略）……入萩後は馬来、内藤、北川、平岡、森重、来栖の諸稽古場を廻りて試合せしが、我剣士殆ど皆及ぶものなし」とあるように、長州藩の剣士たちも、誰一人として斎藤派無念流に勝つことができず、何れの道場も破られている。この時正一郎は、柳生新陰流内藤作兵衛門下の桂小五郎と試合をしたのである。新太郎一行は僅か三名であったが、練兵館の数ある門人のなかでも当代一流の遣い手であった。



038

▲ 観之助

▲ 五郎之助

▲ 新太郎

▲ 四郎之助

038 * 斎藤新太郎肖像（弥九郎の子どもたち）〈写真〉

氷見市教育委員会

斎藤新太郎（龍善）は弥九郎の長男として文政十一年（一八二八）に生まれる。安政三年（一八五六）弥九郎が篤信齋と号し隠居したことにより、二代目弥九郎を襲名する。弥九郎に剣術を学び、十九歳の時（弘化四年）、練兵館道場の四天王と共に北は松前藩（北海道）から南は大村藩（長崎）まで剣術の諸国修行に旅立つ。とりわけ長州藩行きについては『防長回天史』に、「江戸の剣客斎藤弥九郎の男新太郎の萩に來り、各師家を訪ひ撃剣の技を闘はずや、内藤、北川、馬北等の子弟一も彼に及ぶものなかりしかば、藩政府は暫く彼を滞留せしめて歓待し、もって明倫館及び諸家の子弟教導の事を委嘱せり」とその強さが記されている。のち長州藩に召される。



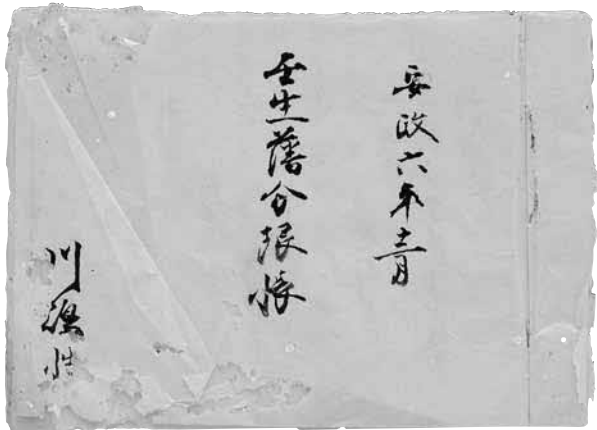
039

039 野原正一郎肖像
個人蔵

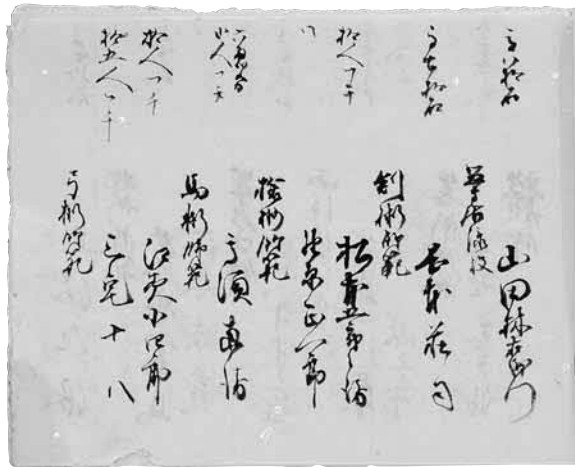
写真裏に「明治十九年三月某日上野広小路写真影店ニ於テ写ス年令六拾歳」とあり、最晩年の正一郎の姿である。正一郎は撮影から二年後の明治二十一年八月二日に六十二歳で逝去。戒名は「還真院勇岳正道居士」。正一郎の武勇伝は有名で、『近世剣客伝』（本山仲造著）に逸話が残っているので紹介しよう。「正一郎のごときも、江戸の横川道場で、高尾九介という者と他流試合を行ったとき、九介がなかなか負けを認めないので、むつとした正一郎は「これでもか」と大喝して、九介の脇腹へ突を入れたら、竹刀の先が稽古着を破って体中に喰い入り、九介の生命が危ぶまれる程の重傷だったが、名医を聘して専ら看護に尽した結果、漸く一命を取り止めた。この事件があつて、練兵館の稽古は荒いと評判が立ち、一時入門者が減った」と記している。

040 安政六年壬生藩分限帳
常楽寺法寶蔵

鳥居家伝来。「剣術師範拾人フチ 松本五郎兵衛 同野原正一郎」とある。

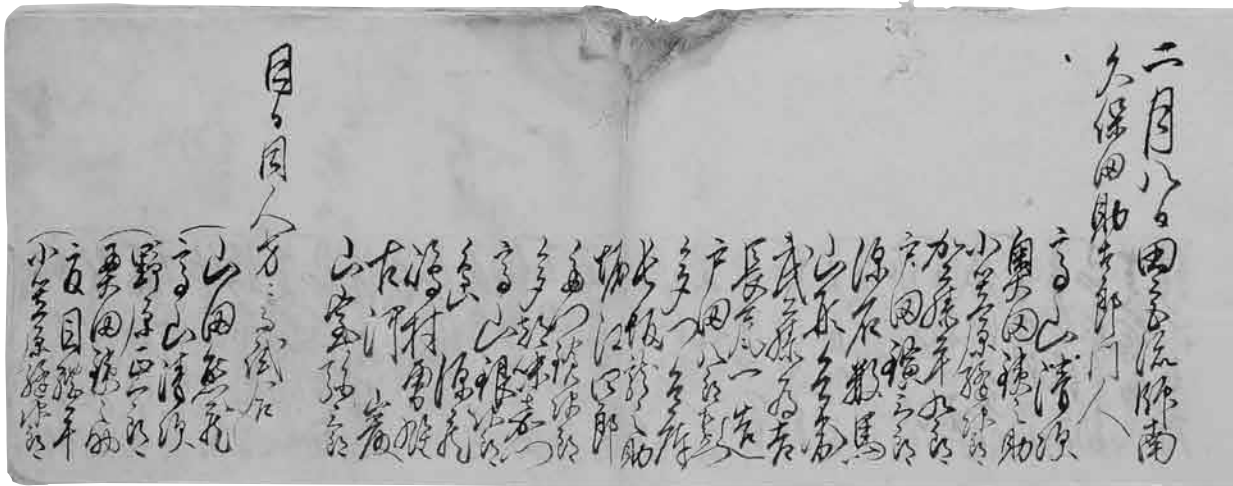


040-1

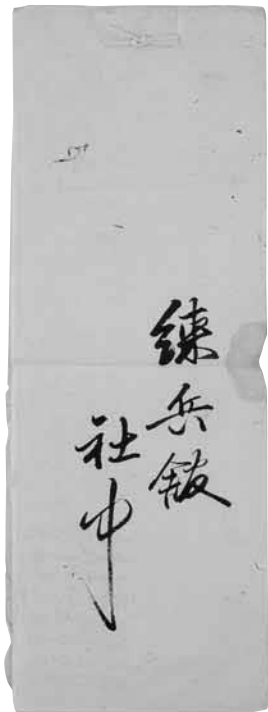


040-2

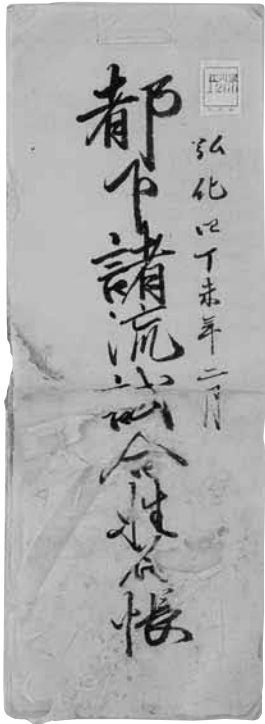
31 30



041-2



041-3

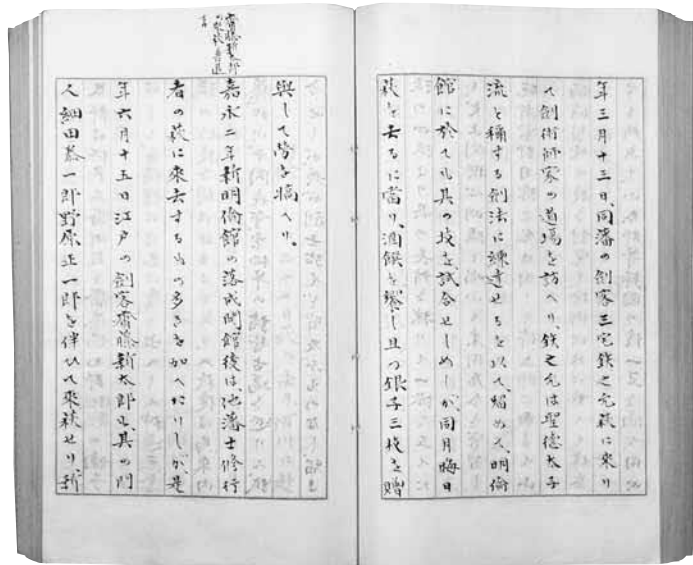


041-1

041 都下諸流試合姓名帳
財団法人江川文庫

江戸幕末期の剣術道場は隆盛を極め、江戸の三大道場として、「位は桃井、技は千葉、力は斎藤」とうたわれた。当時、各流派は負けた時の不名誉を恐れて、他流試合を行わなかった。葦山代官江川英龍はその現状を憂い、「練兵館」の主宰者である斎藤弥九郎に対して他流試合を行うことを提案した。弥九郎は、練兵館の荒稽古は有名で負ける心配は無いものの、遺恨による辻斬り、闇討ちの危険もあるとしてはじめ消極的であつたが、盟友英龍のたつての提案であつたため、各道場に呼びかけを行った。江川屋敷に集まつて協議をしたのは千葉・桃井・斎藤・男谷・団野・久保田・伊庭・岡田・大久保・近藤・横川の十一道場に過ぎなかったが、英龍は満足したという。弘化四年（二八四七）二月、久保田道場を皮切りに幕末最初の壮烈な対抗試合が開始された。これはその対戦名簿である。

（巻末解説参照）



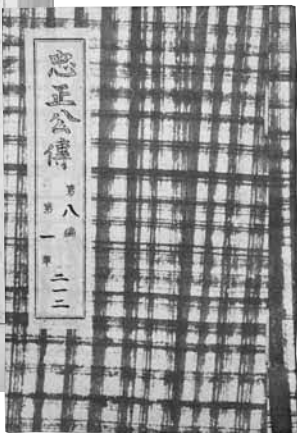
045-2



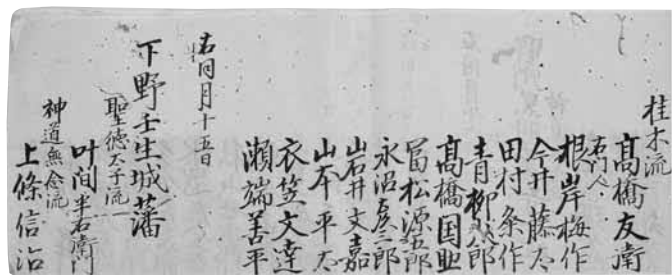
045-3



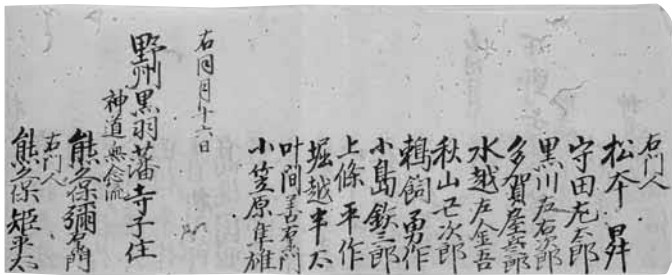
044



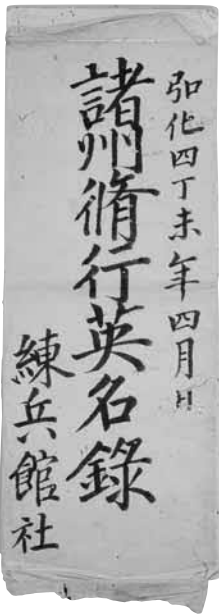
045-1



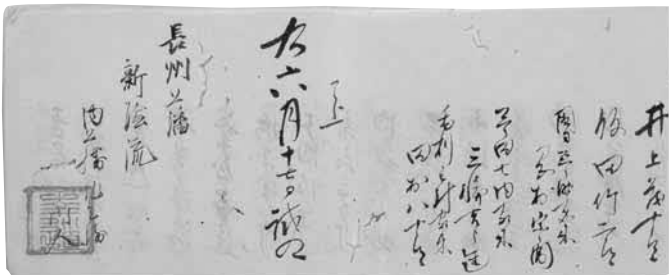
042-2



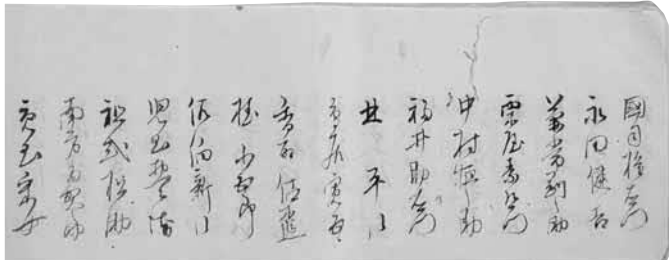
042-3



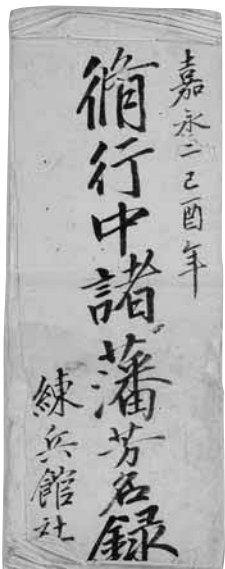
042-1



043-2



043-3



043-1

042 * 諸州修行英名録

043 修行中諸藩芳名録

氷見市教育委員会

斎藤新太郎の諸国修行については、『諸州修行英名録』と『修行中諸藩芳名録』の二冊の記録が残されている。『諸州修行英名録』には弘化四年（一八四七）四月から嘉永二年（一八四九）三月、『修行中諸藩芳名録』には嘉永二年四月から嘉永二年九月までの修行の足跡が収められている。その内容は、修行に赴いた藩名、試合相手の流派および姓名、時期からなり、江戸を起点として二つの期に区分することができる。

その第一次は、弘化四年四月から嘉永元年正月までで、関東および東北、蝦夷地の諸国を廻った。第二次は、嘉永元年七月から嘉永二年九月までで、その足跡は東海道沿いの諸国から京都、大坂、中国、四国、九州にまで及んでいる。これら訪れた諸国は、新潟・大坂・京都などの幕府領および六十七藩で、試合相手の道場数は各流派百三十余道場。新太郎に同行した門人は、野原正一郎・細田泰一郎・山田惣二郎・清水牧太の四人である。

（巻末解説参照）

▲ 桂小五郎

044 * 桂小五郎肖像〈写真〉

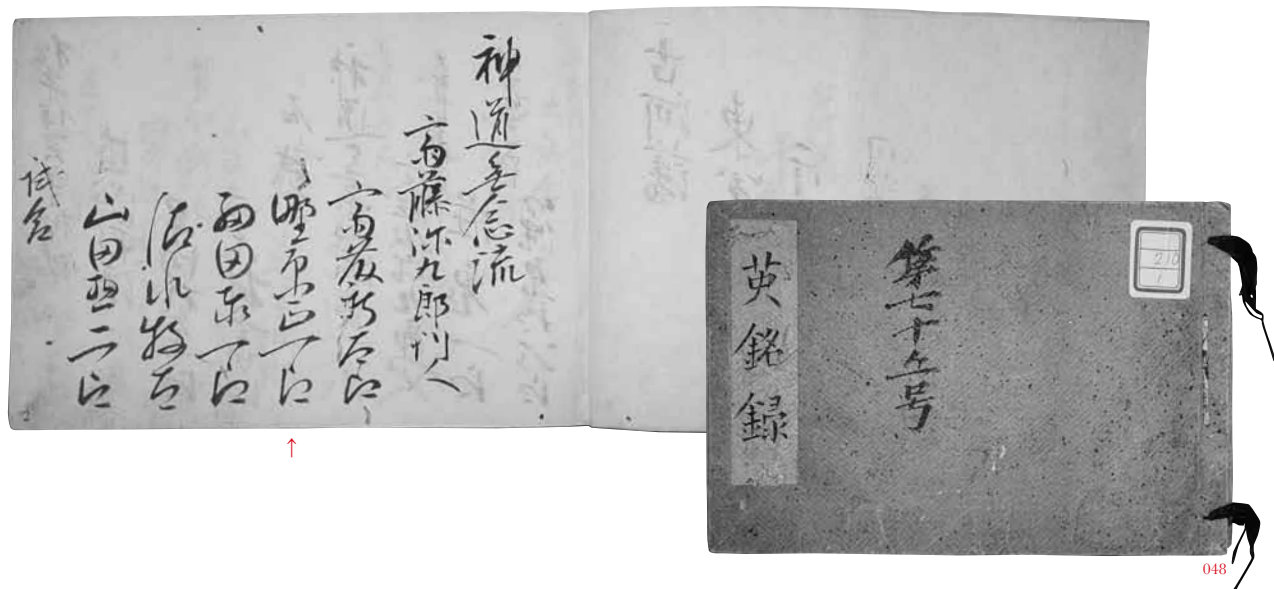
山口県立山口博物館

桂小五郎は、天保四年（一八三三）長州藩士の子として萩城下に生まれた。弘化四年（一八四七）四月から始まった斎藤新太郎の諸国修行は長州藩にも及んだ。嘉永二年（一八四九）六月十六日、萩に入った新太郎と門人細田泰一郎と野原正一郎は、同十九日柳生新陰流内藤作兵衛の門人と対戦することになる。この門下に桂小五郎がいた。その後長州藩はより実戦的な神道無念流の習得を方針とし、小五郎も練兵館に入門することになる。その後、長州藩の尊攘派を指導。八月十八日の政変後も京都で藩の孤立回避に努めたが、禁門の変後但馬出石に逃れた。慶応二年西郷隆盛らと薩長連合を密約。翌年、討幕出兵を策した。維新後は参議となり、長州閥・開明派の巨頭として活躍した。

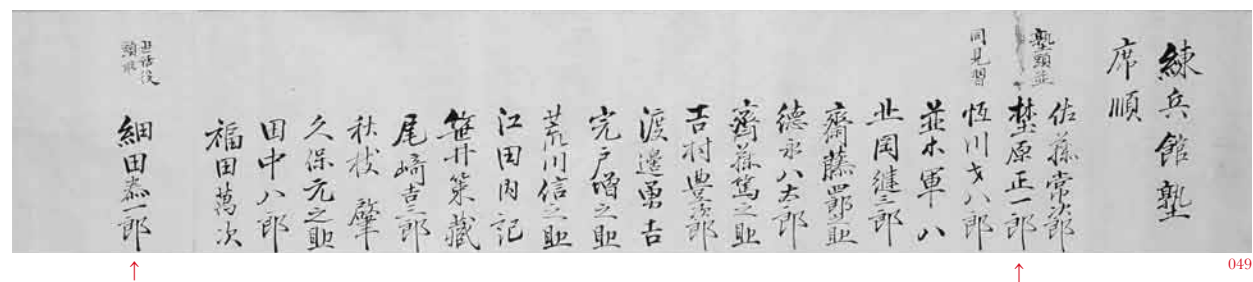
045 * 『忠正公伝』〈写真〉

山口県文書館

毛利文庫所蔵の内、『忠正（毛利敬親）公伝』「第八編、藩政整理時代、第一章、弘化、嘉永年間の教育、第三節、他藩の武芸師範の招聘」に記される内容である。「是年六月十五日江戸の剣客斎藤新太郎も、其の門人細田泰一郎、野原正一郎を伴ひて来萩せり、新太郎は江戸三番町なる斎藤弥九郎号篤信斎の嫡子にして、有備館には已に屢々出入して神道無念流の妙技を聞はせることあり、入萩は馬来、内藤、北川、平岡、重森、来栖の諸稽古場を廻りて試合せしが、我が剣士殆ど皆及ぶものなし」とある。



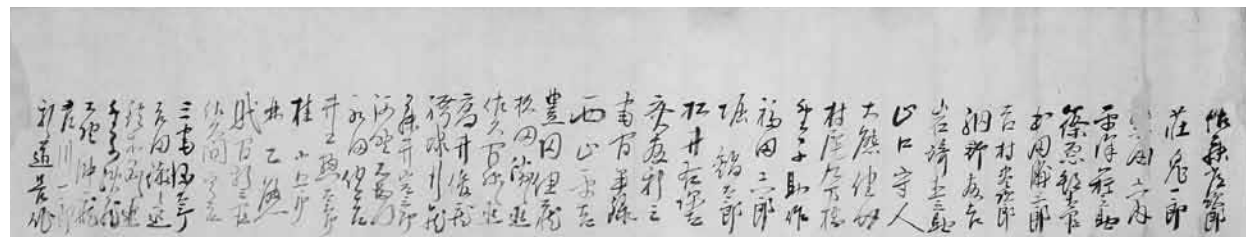
048



049



046



047

046 * 毛利敬親公及び元徳肖像画〔写真〕 山口県文書館

第十三代毛利敬親「左」、世子元徳「右」肖像。敬親の諡は忠正。村田清風を登用して藩政改革を推進。また藩学「明倫館」を設立し文武の興隆につとめた。特に武芸をもって士道を養成し、実戦の技能を身につけることを考え、ここに心技共に優れた斎藤（弥九郎）無念流を藩の流儀に採用し奨励した。また、世子の元徳も斎藤無念流に傾倒し、交流を深めて行く。

なお、敬親は藩論の主導権が尊攘派に握られるに及んで攘夷を実行、禁門の変により官位・称号を奪われたが、討幕の密勅を受けて官位を復し、隠居。

047 練兵館門人様 個人蔵

年代不詳。弘化四年（一八四七）から行われた斎藤新太郎と門下野原正一郎、細田泰一郎の諸国修行は、練兵館の名を全国に広めるためのデモンストレーションとなった。その結果、長州藩はより実戦的な斎藤派無念流の導入を計画し、早速、官費留学生として河野右衛門、永田健吉、財満新三郎、佐久間卯吉、林乙熊の五名と、私費留学生の桂小五郎と井上壮太郎の二人を練兵館に派遣した。この資料中には彼らの名前が確認できるので、嘉永五年（一八五二）頃の門人録と思われる。

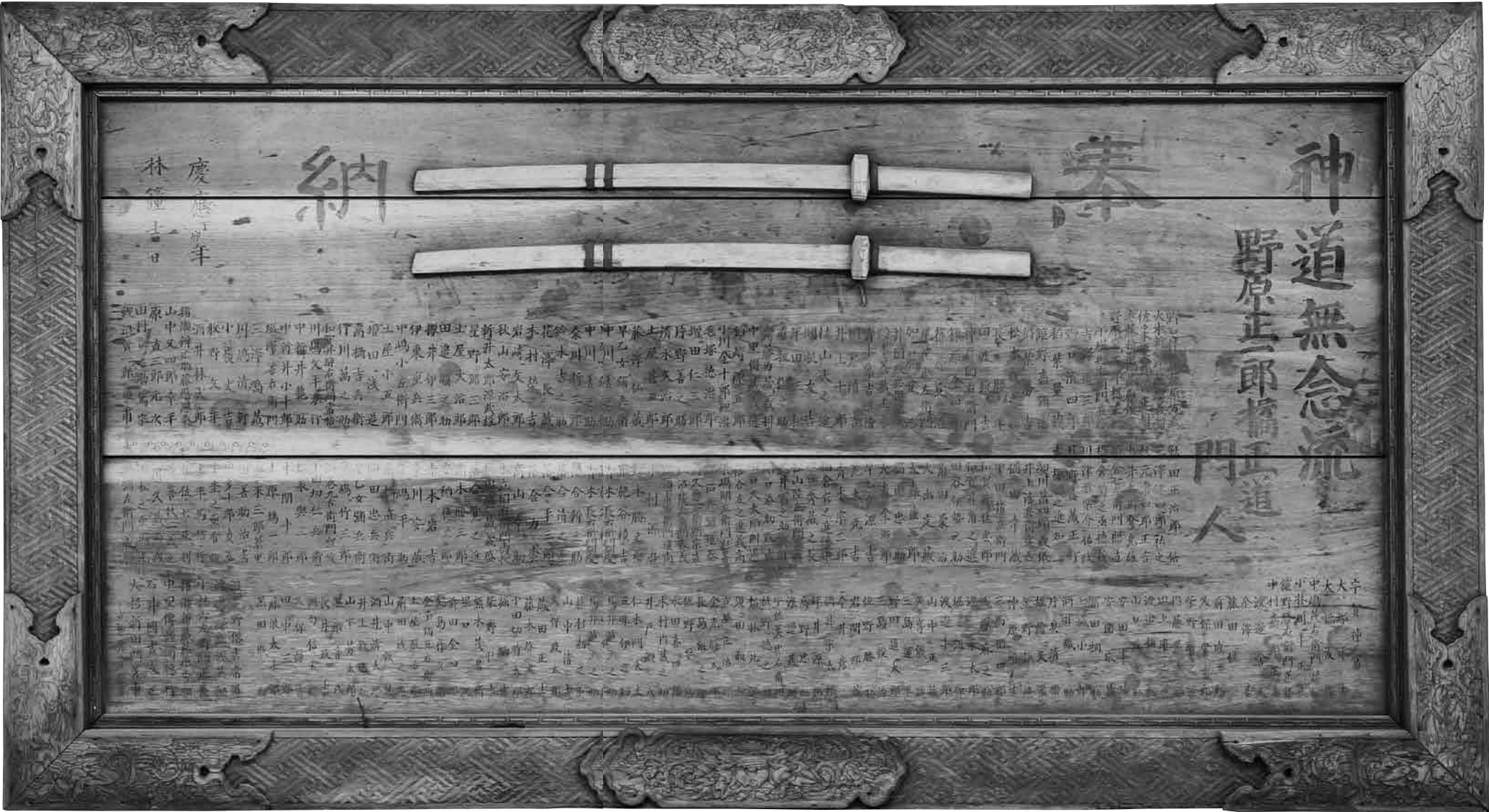
048 古河藩士千賀牧太英銘録 古河歴史博物館

「古河藩士東軍流剣術世話千賀牧太」の剣術修行の記録である。嘉永四年（一八五二）に牧太が斎藤弥九郎の「練兵館」門下と他流試合を行った。対戦相手は弥九郎の長男新太郎と「練兵館」四天王の野原正一郎・細田泰一郎・清水牧太・山田惣二郎である。

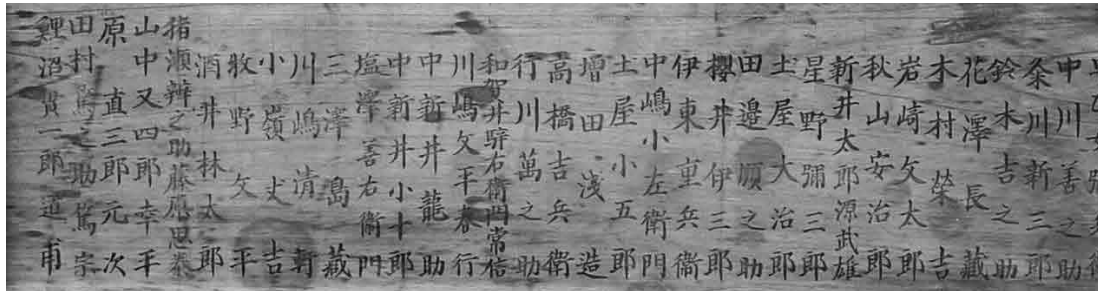
なお、古河藩は弘化四年（一八四七）に斎藤新太郎と「練兵館」四天王が最初に訪れた諸国修行の地である。その試合は「何も能、此方何れも不叶候由」（『鷹見泉石日記』四月四日付）とあり、藩中の剣士は誰一人として勝つことができなかったという。

049 練兵館塾席順 個人蔵

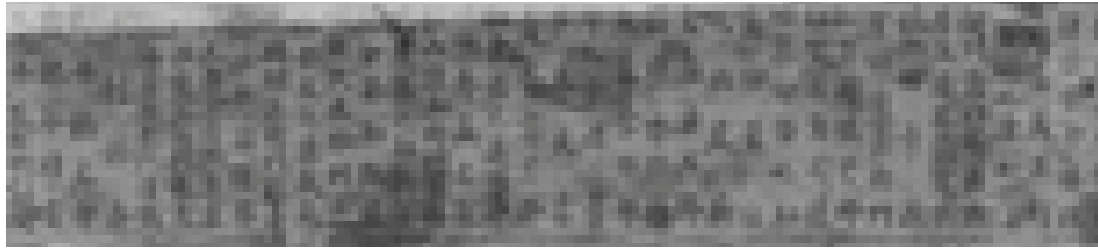
安政元年（一八五四）当時の席順と思われる。「練兵館塾席順塾頭並佐藤常次郎・野原正一郎、同見習恒川才八郎・並木軍八・吉村豊次郎、（略）世話役頭取細田泰一郎」等の名を連ねる。この内、塾頭並の野原正一郎と世話役頭取の細田泰一郎の二人は数ある門人のなかでも当代一流の遣い手であった。なお、佐藤常次郎は「練兵館社中」の猛者三十八人の一人として都下諸流試合に参加。吉村豊次郎は後に勇士組に参加した仏生寺弥助の本姓である。



050-1



050-2



050-3

050 神道無念流野原正一郎橋正道門人「奉納額」

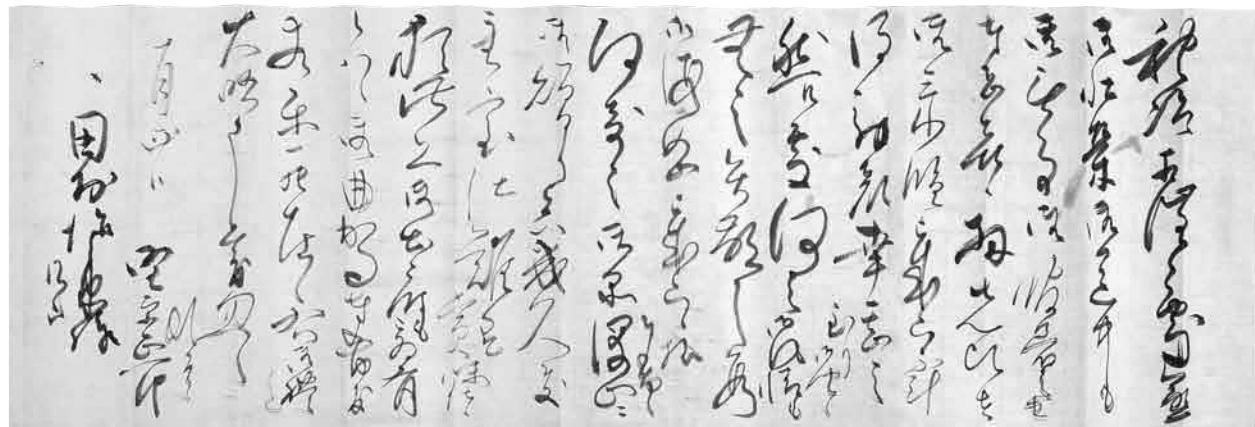
太平山神社

慶応三年（一八六七）六月、野原正一郎門下、二百三十三名が願主となって栃木市太平山神社に奉納した剣術の奉納額である。正面右側には師範である野原正一郎橋正道の名があり、その左側に門人二百三十三名とほか「大杉新田門弟」を連名で列記する。門人のなかには、稲葉村出身の鯉沼貫一郎・鯉沼兵弥道泰など鯉沼一族の名が見える。鯉沼兵弥は自由民権運動で名を馳せた九八郎の父であり、のち九八郎本人も正一郎に入門する。

（巻末解説参照）



051



052

051 鯉沼貫一郎 神道無念流免許 個人蔵

野原正一郎から明治五年（一八七二）鯉沼貫一郎にあてた免許皆伝書である。貫一郎は「野原正一郎門人奉納額」に名を見ることができる。

052 書簡（野原正一郎から田村治兵衛宛） 個人蔵（栃木県立文書館）

野原正一郎の書簡。大平富田に住む田村治兵衛に宛てて、進物のやり取りを記したものである。

三、那須唯一——長州藩〈勇士組〉で勇名を轟かせた斎藤弥九郎門人——

那須唯一は、天保十二年（一八四一）壬生城下に生まれた。正式名は多々良正武。壬生における活躍は記録がなく不詳。十代で斎藤弥九郎の「練兵館」に入門した。唯一が二十二歳の文久三年（一八六三）正月、長州藩毛利元徳より斎藤弥九郎のもとに、浪士で撃剣達者な者を召し抱えたい旨の依頼があった。弥九郎は人選を新太郎に一任し、門人から浪人の有志を募って京都へ派遣することになり、「勇士組」として十六名を選抜。唯一はその一人として壬生藩士の野原正一郎と参加した。他には柳沢藩士の北村北辰斎と後藤又兵衛、西大平藩士の仏生寺弥助、上山藩士の高部弥三雄、大洲藩士の須藤権之進、

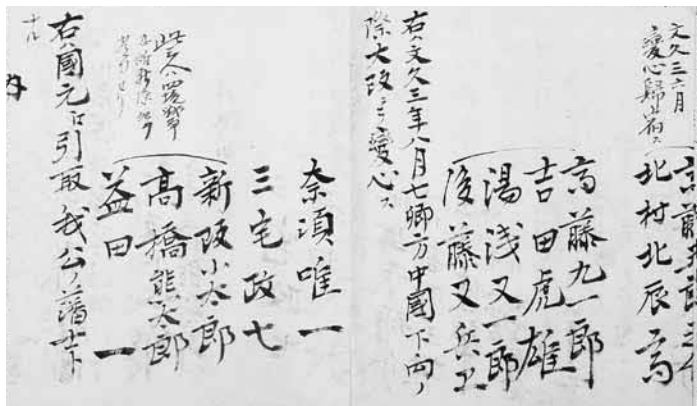
鳥取藩郷士の湯浅又一郎、弥九郎四男の斎藤五郎之助、久留米藩士の斎藤九一郎と吉田虎雄、幕人の新坂小太郎、那須郷寄合旗本の高橋熊太郎、筑前藩の益田一、出自不詳の三刀屋肇と三宅小備後が選ばれ、長州藩要人や急進派公卿の護衛を主に行った。「勇士組」は八月十八日の政変で勇名を轟かせたが、その後の政治情勢の変化等により脱落者が続出し、唯一はじめ五名だけが残った。唯一はのちに長州藩「力士隊」隊長として陣頭に立ち、幕軍と抗戦中の元治元年（一八六四）禁門の変において戦死した。時に二十四歳。明治三十六年（一九〇三）従五位が贈られた。



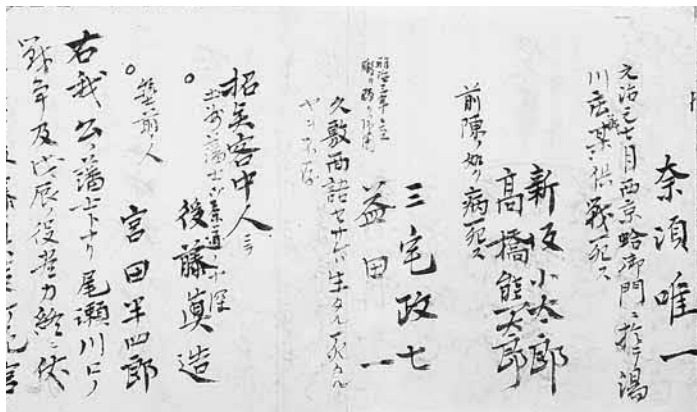
053

053 * 毛利元徳肖像（部分）〈写真〉 山口県立山口博物館

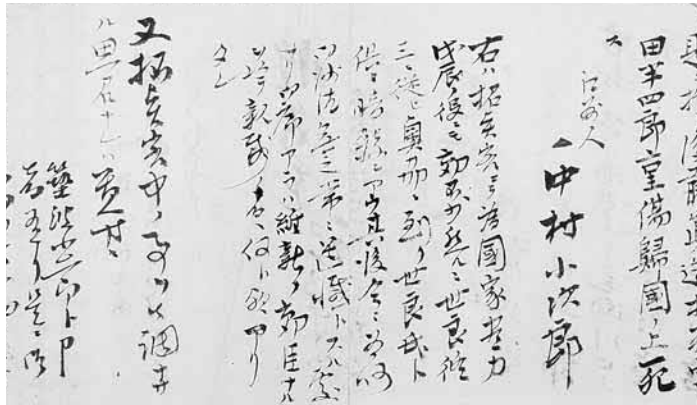
毛利元徳は天保十年（一八三九）長州支藩徳山藩主の十男として生まれ、嘉永四年（一八五二）長州藩主毛利敬親の養子となった。ついで安政元年（一八五四）、賀養子にして世子となり、従四位下、侍従、長門守に叙爵され定広と改名。文久元年（一八六一）左近衛権少将に叙せられ尊王攘夷運動を支持する。元徳は同三年正月、斎藤弥九郎のもとに、浪士で撃剣達者な者を召し抱えたい旨を依頼した。弥九郎はこの人選を新太郎に一任し、門人の中から浪人の有志を募って京都へ派遣することになった。



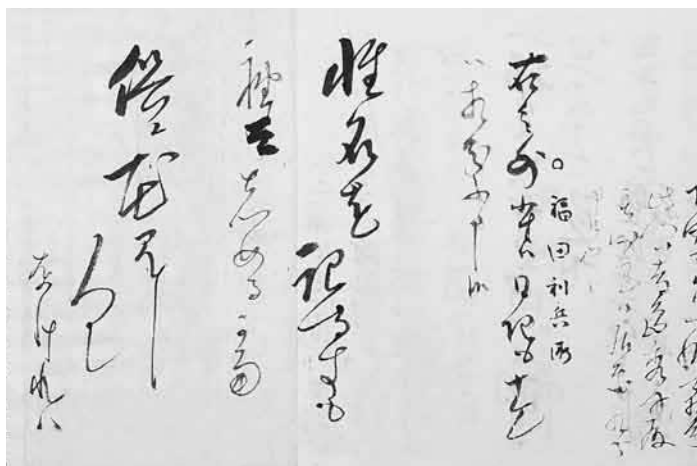
054-5



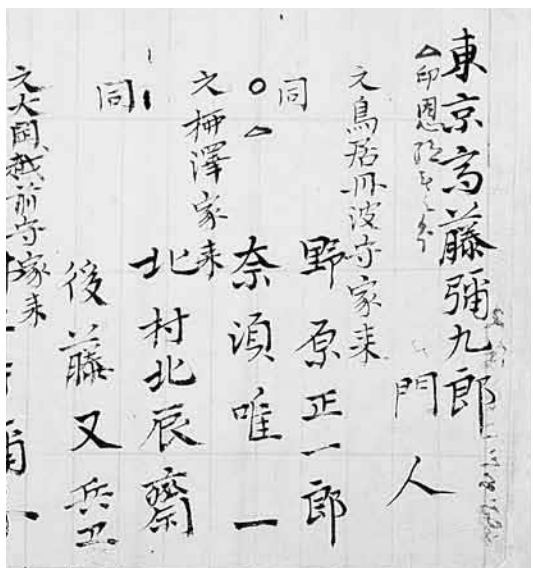
054-6



054-7



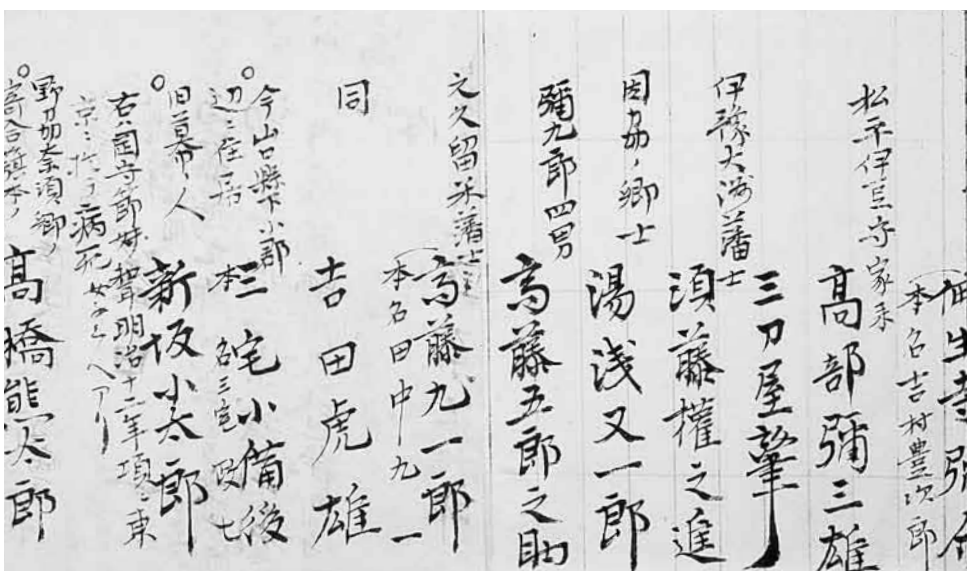
054-8



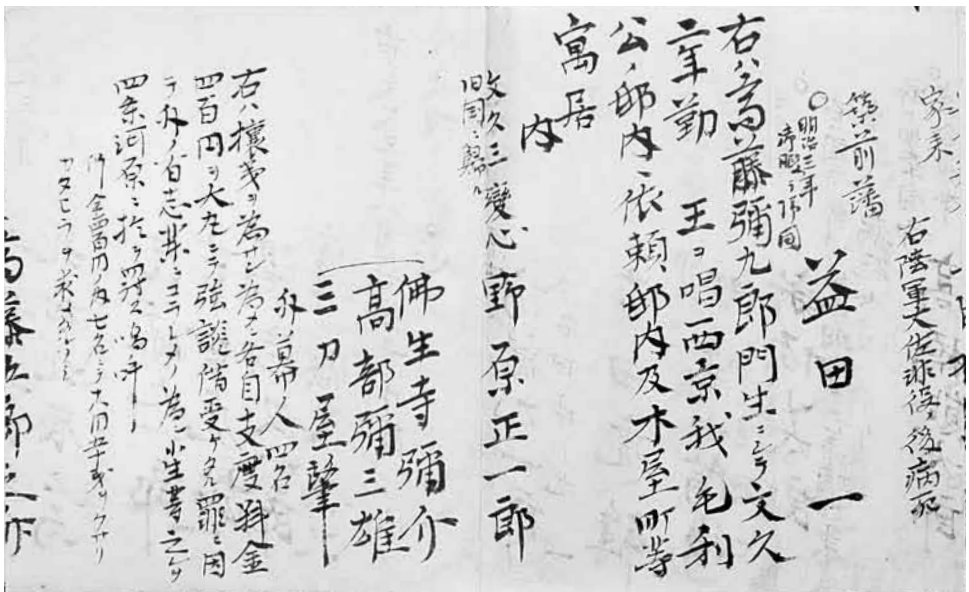
054-2



054-1



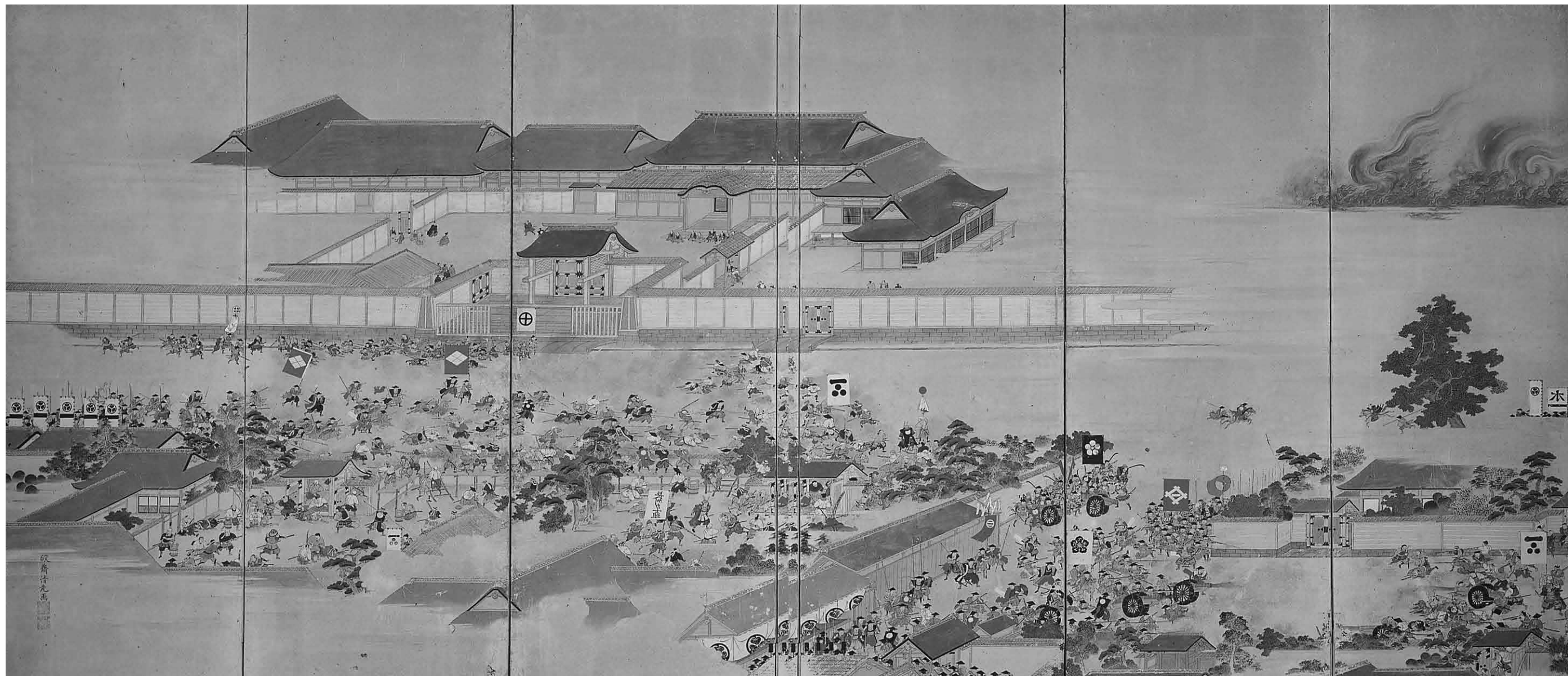
054-3



054-4

054 * 「劍客商藤彌九郎門人付立」〈写真〉
山口県文書館

「門人付立」は、斎藤新太郎が明治になって毛利家編輯掛の求めに応じて記したもの。ここに勇士組十六名についての報告がなされた。長州藩が勇士組を京都に送ったのは、長州藩要人や急進派公卿の護衛がその目的であつたと考えられる。しかし、勇士組を待ち受けていたのは、勤王という快い響きとはかけ離れた過酷な現実で、やがて脱落者が続発した。結果、野原正一郎は郷里の壬生に帰り、残ったのは那須（奈須）唯一を含めわずか五名であつた。



参考
* 蛤御門合戦図屏風

会津若松市役所

元治元年（一八六四）七月十九日の禁門の変で、御所周辺での会津兵士の奮戦ぶりを描く。なお、屏風第四扇に、長州藩力士隊（隊長 那須唯一）が活躍した場面を描く。
元治元年六月十五日、来島又兵衛は遊撃・力士の二隊を率いて長州から進軍した。三家老の福原越後、国司信濃、増田右衛門介も総勢千六百人にのぼった。攘夷の決行、三条実美ら公卿と藩主毛利父子の冤罪を唱え、日頃の薩賊会奸のうらみを晴らそうと士気を高揚させた。この戦いで、那須唯一は初め遊撃隊に入隊したが、のち力士隊長の重責を帯びた。奮戦の中、又兵衛が戦死すると、代わって唯一が陣頭に立ったが、その乱闘の中に同じく斃れた。その采配ぶりは見事だった。



055

055 * 那須唯一戦没碑〈写真〉

当館

「那須唯一 多々良正武神霊」（防府市護国神社境内）と刻む。遊力士隊長として勇名を轟かせた那須唯一の墳墓である。力士隊は角界の団結によって組織されたため角力隊と称した。のち那須唯一、益田一、新坂小太郎が統率することになり力士隊と呼ぶ。唯一は力士隊長として活躍したが、元治元年（一八六四）七月十九日禁門の変で戦死した。時に二十四歳。明治になってからその活躍に対して従五位が贈られた。

四、松本五郎兵衛 ― 斎藤弥九郎〈練兵館道場〉の高弟 ―

松本五郎兵衛は、文化二年（一八〇五）壬生藩士松本政憲の嫡子として壬生城下に生まれた。名は昇。二十二歳のときに叶間茂作に入門し聖徳太子流剣術を伝授される。天保元年（一八三〇）江戸に出て長沼流兵学を清水俊蔵（赤城）に学び、かたわら斎藤弥九郎に神道無念流を学ぶ。五郎兵衛の上達はめざましく、天保五年（一八三四）に長沼流兵学、翌六年には神道無念流の「免許皆伝」を受けている。なお長沼流兵学の清水門下には「練兵館」を主宰している斎藤弥九郎がいた。天保九年（一八三八）火災によって「練兵館」が類焼したため、初期「練兵館」の実態、および五郎兵衛と弥九郎の関係は不明である。しかし弥九郎から五郎兵衛宛ての書簡には尊敬の念

が表されているので、五郎兵衛もまた初期「練兵館」の高弟であったのであろう。帰藩した五郎兵衛は弘化四年（一八四七）聖徳太子流剣術師範となった。そして万延元年（一八六〇）の秋、幕末の風雲児高杉晋作が「試撃行」の途中壬生を訪れる。この時晋作は斎藤弥九郎の紹介状を持参し、五郎兵衛ならびにその門下と試合をした。元治元年（一八六四）に水戸天狗党が筑波山に挙兵した際には、幕府から追討の命をうけ壬生藩軍師として采配を振るう。この戦いに際して、五郎兵衛は「筑波嶺ノ峰踏ミ越ヘテ常陸ナル（常世ナル）御国ノ讎ノ尽クル時マデ」と詠み櫓を飛ばしたと言う。

056 斎藤弥九郎肖像画 讃「報国」
水見市教育委員会

「報国」の字と弥九郎肖像画。字は中山博道が書く。中山博道は近代の剣聖とうたわれ、主宰する有信館をはじめ、大日本武徳会等の師範として三万余の弟子を取り立て、「中山時代」を出現させた人物である。

057 松本五郎兵衛肖像
個人蔵

写真裏に「憾山松本先生之像 複写東京浅草公園地外舅黒川龍」と書く。五郎兵衛最晩年の肖像。菩提寺である常楽寺に五郎兵衛についての逸話が残る。「幕末に領内の宿場の遊郭に三人の無頼漢が押し入って、無理難題を持ち出して居座り、宿役人も処置に困っていたところ、五郎兵衛が来て難なく召し捕った」という話である。高杉晋作の壬生来訪の際、五郎兵衛と試合をして一勝もできなかったという話が頷ける。なお、この写真は経年変化により五郎兵衛の顔が判別できなくなっていたため、今回展示に当たりデジタル処理による復元を行った。

058 安政六年壬生藩分限帳
常楽寺法寶藏

鳥居家伝来。「剣術師範拾人フチ松本五郎兵衛同野原正一郎」とある。

059 松本五郎兵衛 長沼流兵法伝授書
個人蔵

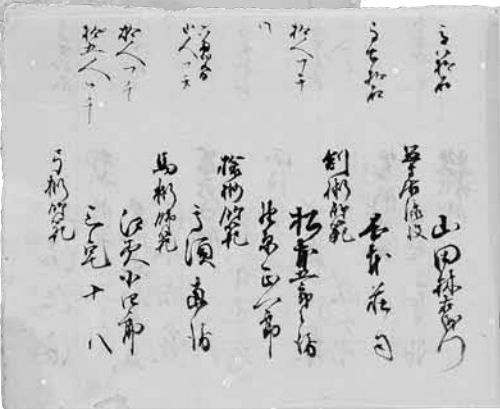
長沼流兵学は、寛文六年（一六六六）、長沼澹斎が『兵要録』を著して創始された学派である。当時の他流派よりも西洋兵学との共通性を有し、幕末に注目を浴びた。これはその流れを汲む兵学者の清水俊蔵（赤城）から天保五年（一八三四）五郎兵衛にあてた伝授書である。同門には斎藤弥九郎がいる。



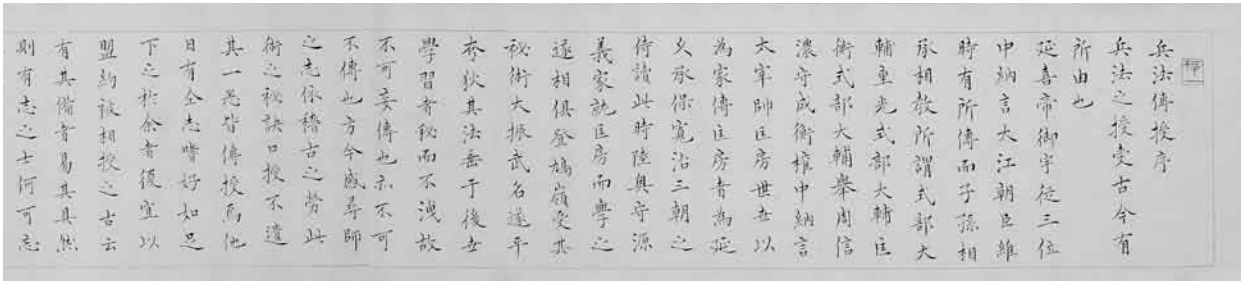
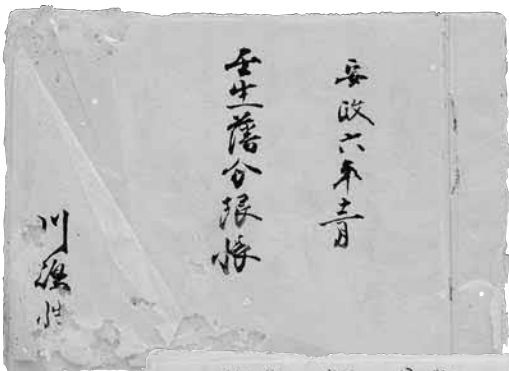
056



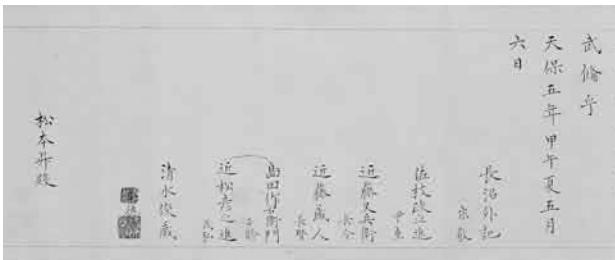
057



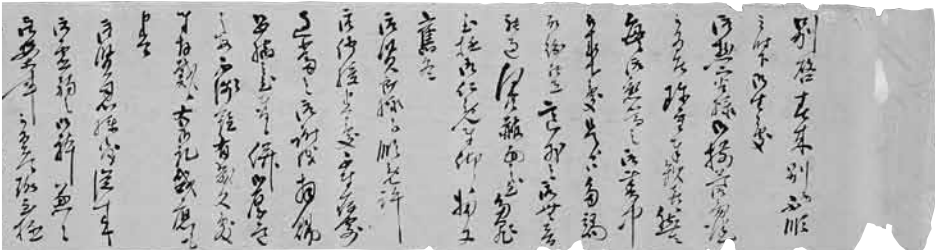
058



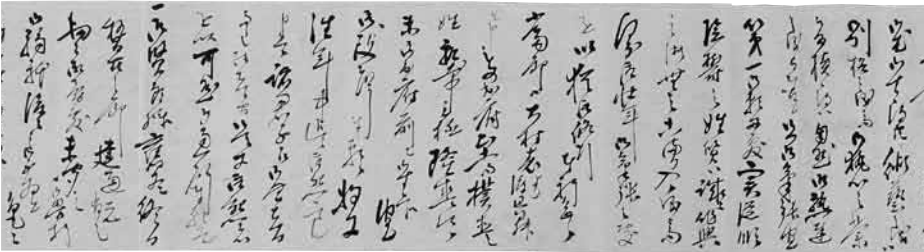
059-1



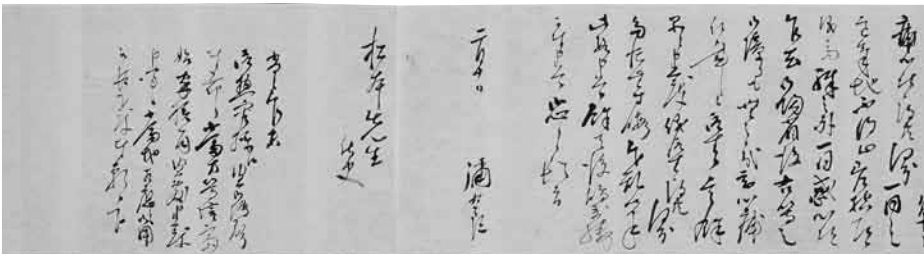
059-2



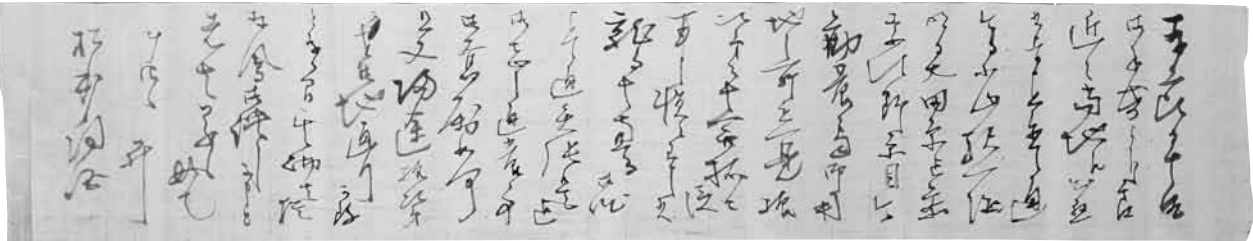
061-1



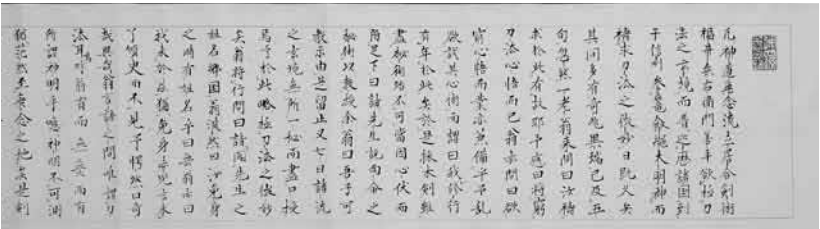
061-2



061-3



062



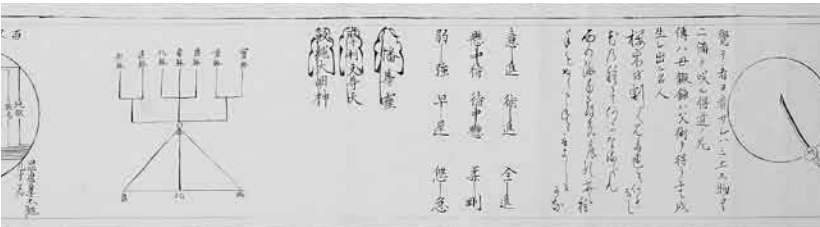
060-1



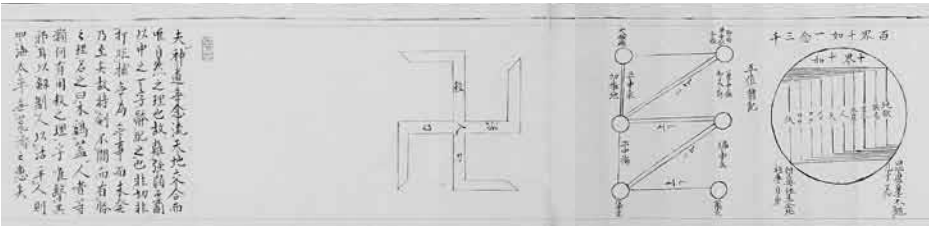
060-2



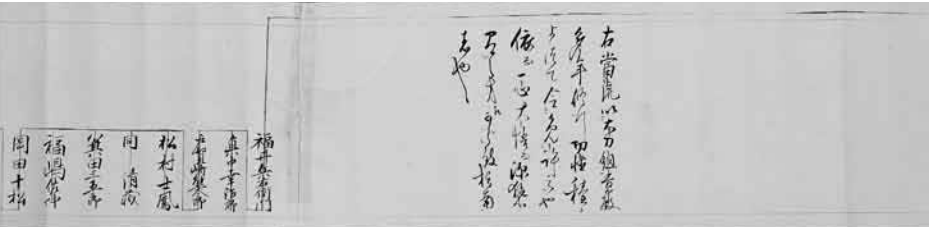
060-3



060-4



060-5



060-6



060-7

060

松本五郎兵衛 神道無念流免許
個人蔵

斎藤弥九郎から天保六年（一八三五）五郎兵衛にあてた免許状である。天保年間の初期「練兵館」の実態は不明であるが、五郎兵衛が高弟であることには間違いない。

061

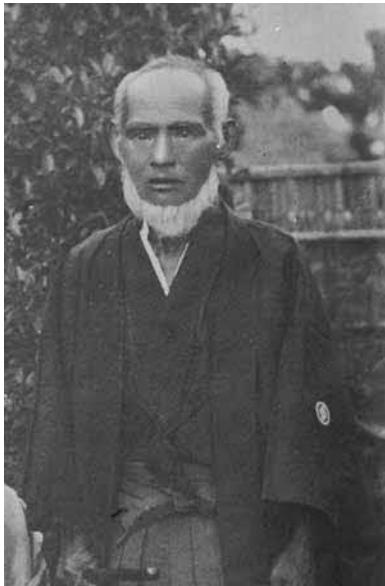
書簡（斎藤弥九郎から松本五郎兵衛宛）
個人蔵

二代目斎藤弥九郎（新太郎）から松本五郎兵衛に宛てた書簡。文中に初代弥九郎の隠居後の名である「篤信斎」があることから、送り主「弥九郎」が二代目であることがわかる。新たに江戸に出府してきた大村藩士渡辺昇について、その人となりを紹介する部分がある。

062

書簡（渡辺昇から松本家宛）
個人蔵

元大村藩士で、明治に入つて子爵となった渡辺昇から松本家に宛てたもの。那須野が原の開拓に参加するかどうかを決めるため大田原を訪れるので、帰途に壬生に寄りたいとの旨が記される。明治期に書かれたものと推測される。



063



065-1



065-4

063

松本尚之丞肖像

個人蔵

松本尚之丞（政人・尚一）は五郎兵衛の嫡男として壬生城下に生まれた。二代目斎藤弥九郎に入門し免許を受ける。

064

憾山先生墓碑銘（草稿）

個人蔵

「先生諱政名小字五郎兵衛姓ハ源松本氏憾山ト号ス野州壬生人」で始まる五郎兵衛墓碑の草稿である。この草稿から五郎兵衛の全貌がよみがえる。松本政人稿。

065

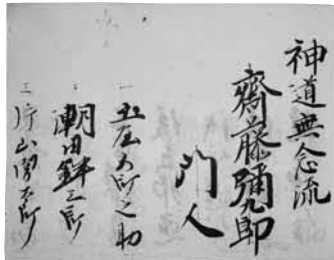
古河藩士千賀牧太英銘録

古河歴史博物館

安政六年（一八五九）「古河藩士 東軍流剣術世話 千賀牧太」の剣術修行の記録。斎藤弥九郎の「練兵館」門下と他流試合を行い、その一人として松本尚之丞（直之丞）と対戦している。



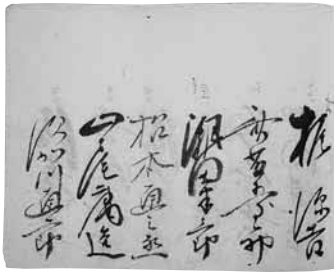
064



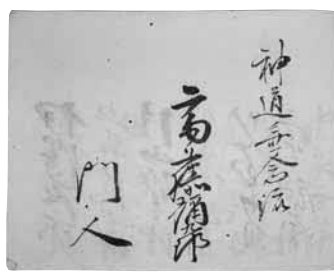
065-3



065-2



065-6



065-5

五、友平榮——斎藤弥九郎の高弟から、江川英龍の高弟へ——

友平榮は、文化十三年（一八一六）宇都宮藩士白井宗七の五男として宇都宮城下に生まれ、後に壬生藩士友平惣兵衛の養子となった。名は敏行。天保八年、二十二歳になった榮は御刀番となり十人扶持を給わり、斎藤弥九郎の練兵館に入門することになる。榮の上達はめざましく、天保十二年（一八四一）師弥九郎が水戸弘道館の仮開館式に招かれた際、弥九郎の弟である三九郎のほか門下中の高弟細田泰一郎、百合元昇三、外山小作とともに選ばれ同行している。式典当日は模範試合を行い、その後六十日滞留して諸流試合等を行い、暇乞いに当たり徳川斉昭から賞詞賜物を下賜された。同年、

江戸徳丸原で高島秋帆が西洋流砲術演習を実施すると、江川英龍、斎藤弥九郎・三九郎が参加し、翌十三年幕府が英龍に西洋流砲術師範を許可すると、弥九郎・新太郎が入門。十四年には榮も入門し、英龍と師弟関係を結ぶことになる。その後、榮は四千余りといわれる門人の中で頭角を現し、星野寛兵衛（陸奥泉）、岩倉鉄三郎（川越）、前田藤九郎（備後福山）と並んで高弟とされた。特に、師英龍と榮との交流はあつたものがあつた。維新後は薩摩・長州から請われ、明治新政府に陸軍大佐として迎えられた。

066

* 徳川斉昭肖像画〈写真〉

水戸弘道館事務所

第九代水戸藩主斉昭（一八〇〇ー一六〇）の肖像。諡は烈公。藩政改革の一環として天保十二年（一八四一）藩学「弘道館」を設立し人材育成に当たった。館内には大演武場を設けて一段と撃剣に力を注いだ。朱子学的な尊攘行動が幕府にきらわれ謹慎の身となったが、のちに許された。十五代將軍慶喜の父。

参考

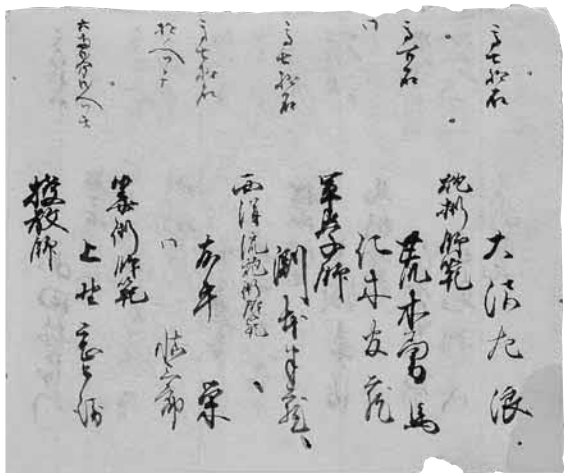
* 二大字「尊攘」

水戸弘道館事務所

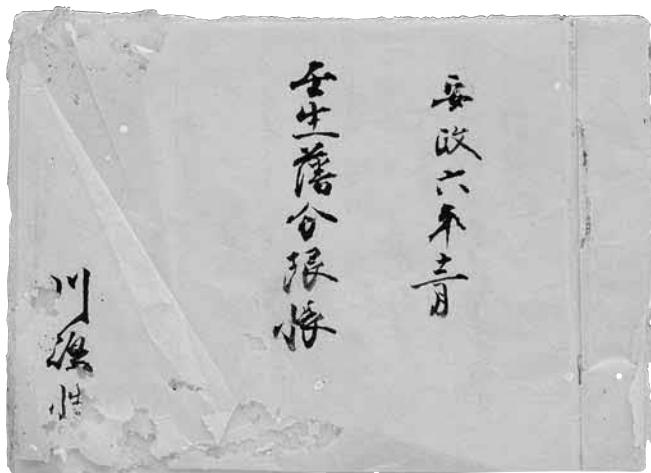
尊王思想の拠点となっていた水戸藩の藩学弘道館に掛けられていたもの。徳川斉昭の命により、藩医 松延年が染筆した。尊王攘夷とは、幕末期に生きた人々の心をとらえて離さなかった時代の価値観であり、ペリー来航に危機感を抱いた多くの若者を魅了し、時には過激な政治運動へと駆り立てる力をもっていた。斎藤弥九郎はじめ、その門下に学ぶ野原正一郎や那須唯一もそんな若者たちのひとりであった。



066



070-2



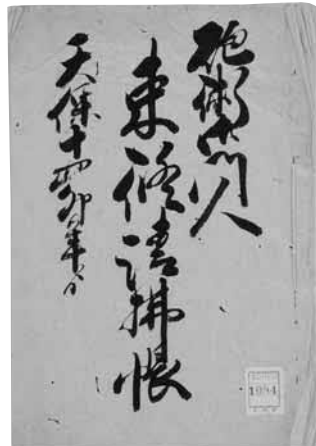
070-1



071-3



071-2



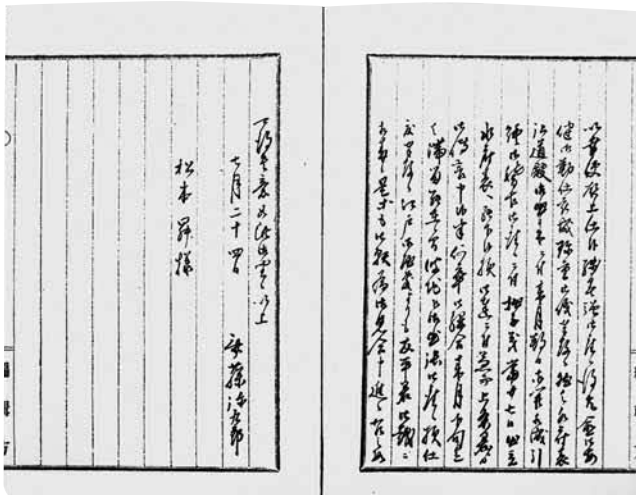
071-1



069



067



068

067 * 水戸藩学弘道館〈写真〉

水戸弘道館事務所

天保十二年（一八四一）八月一日、ようやく仮開館をみた藩学弘道館は、十五・四歳の藩士・子弟を教育する、いわば水戸藩の精神的支柱であった。正庁、文館、武館、調練場などが設けられ、敷地面積五万四千坪に及ぶ。同日予定通り弘道館の仮開館式が行われ、式典にはおよそ三千人が列席する盛儀となった。斎藤弥九郎ら剣客たちも仮開館式に招待された。弥九郎は、弟三九郎のほか同行門人として細田泰一郎、百合元昇蔵、外山小作、友平榮の計五名を伴って参加している。

068 * 書簡（『斎藤篤信斎往復書』）〈写真〉

金沢市立玉川図書館

天保十二年（一八四一）七月二十四日付、斎藤弥九郎から松本昇（五郎兵衛）宛の書簡。この書簡は、弥九郎が弘道館の仮開館式に招待をうけ、門人中の高弟として友平榮を同行させる旨を五郎兵衛（昇）に報告したもの。式典当日は模範試合を行い、約六十日間の滞留中には藩士一同に剣術を指南した。暇乞いの際には、弥九郎に十両、三九郎に五両、友平榮らに二両が下賜された。

069 友平榮肖像

個人蔵

友平榮最晩年の肖像。維新後の明治五年（一八七二）、薩摩・長州から請われ、陸軍大佐として迎えられた。西郷隆盛が大将で、中將のポストがなく、桐野利秋・村田新八が少将であった時であるからその厚遇がわかる。榮は江川英龍の教え「敬慎第一・実用専務」を説き、明治の陸軍の思想基盤をつくった。有名な人物ではない

が、その人格と後世に与えた影響を考えると見過ごすことはできない。榮は明治十五年（一八八二）七月二十七日に歿し東京府赤坂一ツ木町の浄土寺に葬られた。享年六十七歳。粉骨碎身・貞実な生涯であった。

070 安政六年壬生藩分限帳

常楽寺法寶蔵

鳥居家伝来。「西洋流砲術師範高七拾石 友平榮拾人フチ 友平慎三郎」とある。

071 砲術御門人束修請払帳

財団法人江川文庫

天保十三年（一八四二）蕪山代官江川英龍に高島流砲術伝授の許可が下りると、百余名の入門者が集まった。友平榮もその中に加わり高島流砲術を習得することを目指す。この『砲術御門人束修請払帳』によると、天保十四年（一八四三）、鳥居忠挙が榮の入門御礼と鉄砲方就任祝として金五百疋を、榮も束修百疋を英龍に納め、弘化三年（一八四六）一月二十六日免許皆伝を許された。藩主鳥居忠挙が三月二十六日に江川英龍に榮の入門を申し入れた際、英龍ははじめこれを断り、その後五月二十七日に至りようやく許可している。榮の入門を英龍が断ったのは、榮が斎藤弥九郎の練兵館に入門し剣術の素養があつたからであろう。英龍は、当時他の師範についていた経歴の持主については、入門を一樣に断っている。これは無用の摩擦をおこすことを避けたためであると考えられる。



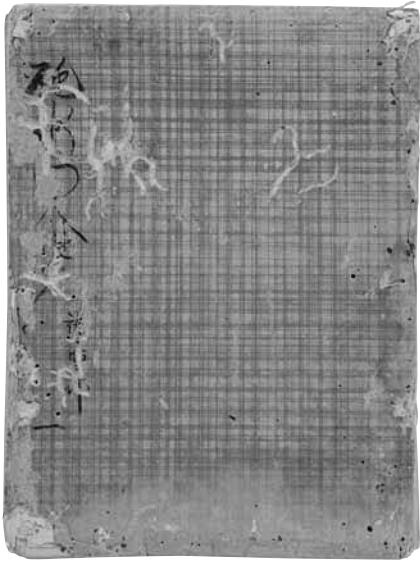
074



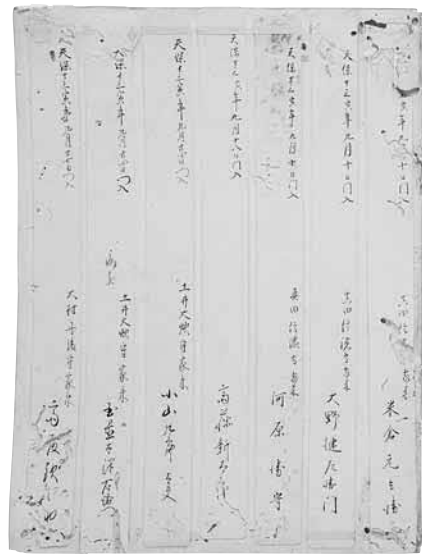
075



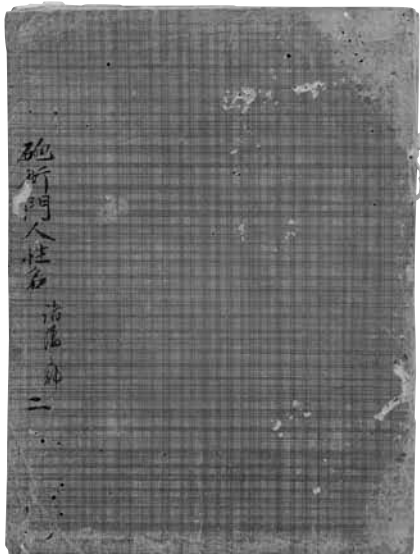
073-2



073-1



073-4



073-3

072 * 江川家母屋（写真）
当館
母屋には江川氏個人の部屋のほかに、塾生の部屋「塾の間」があり、ここは三間余四方十八畳の部屋で、塾生の宿所も兼ねた。塾生は塾頭の指示にしたがい、平常の動作・言動にいたるまで厳しく規定されている。



072

073 砲術門人姓名
財団法人江川文庫
江川家に残る門人姓名短冊帳。この短冊帳は年代順に全四冊からなり、各入門者が自署した短冊を一冊の門人録としたものである。友平榮の短冊には「天保十四年卯五月二十七日門入（弘化三年正月二十六日免許皆伝）鳥居丹波守家来友平榮」とある。また「天保十三寅年九月十八日門入斎藤新太郎」とあるが、皆伝を受けた期日は記されていない。

074 江川家八幡神社の典額
財団法人江川文庫
友平榮は江川英龍に入門すると、今までの刀剣に替わり小銃と大砲の稽古に移行した。小銃の稽古には天保十三・四年頃はゲベル銃、それ以後はドンドル銃（傍装雷管銃）を用い、また用途により銃を換えた。大砲は、ホーイッスル、モルチール、野戦砲のほか、葦山製カノン、モルチール等を使用した。この典額は、弘化二年（一八四五）正月二日に行われた小銃稽古の資料である。塾生および江川家若手家臣によって実施された射撃大会の成果を、江川家八幡神社の典額として奉納したものである。これによって、塾生たちの角（標的）への命中具合がわかって面白い。

075 雷管式ゲベル銃
財団法人江川文庫
雷管式前装滑腔銃。三つバンドの歩兵銃。友平榮たちはこの銃を使い小銃稽古に励んだのであろう。



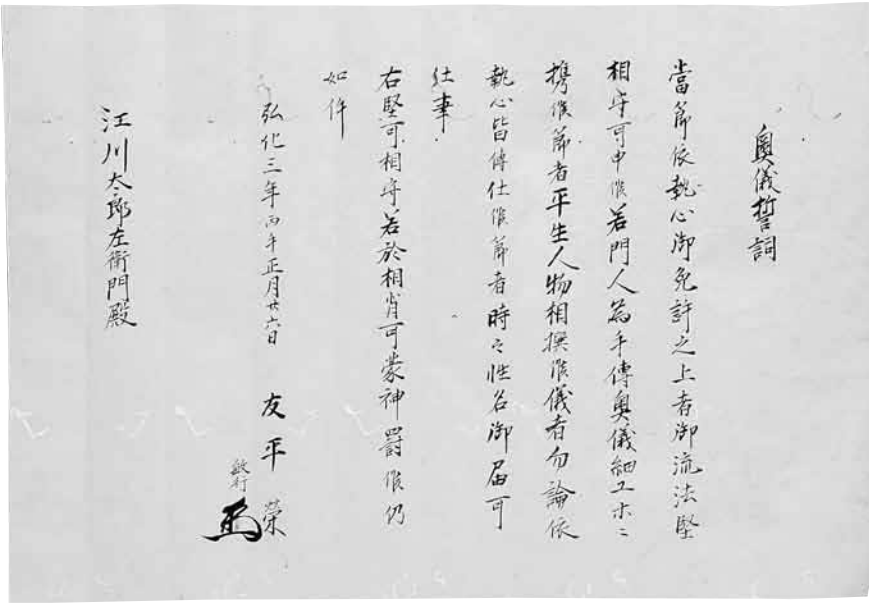
076-1



076-2



077-1



077-2

076

五百目カノン折矢並中り附

財団法人江川文庫

この資料は大砲稽古の資料で、弘化二年（一八四五）五月一日に行われた五百目カノン五丁場稽古打の彈着記録である。塾生金見忠兵衛、関隆蔵、加藤励次郎、友平榮が参加、五百目の彈丸を発射し、傍示五間四方、標的の目当五尺を用いている。

077

友平榮 高島流奥儀誓詞

財団法人江川文庫

江川太郎左衛門（英龍）は入門に際して誓詞を、免許・皆伝等に奥儀誓詞を提出させているが、これは師である高島秋帆のやり方を受け継いだものである。奥儀誓詞を提出し、幕内立入以上の資格を許された者は特別の待遇をうけ、塾生と同居していても修行上滞留する者という一段上の扱いとなる。友平榮も弘化三年（一八四六）一月二十六日、この誓詞を提出したことにより、正式に奥儀伝授の対象者となった。英龍はこれを受けて奥儀伝授を行った。

078

書状

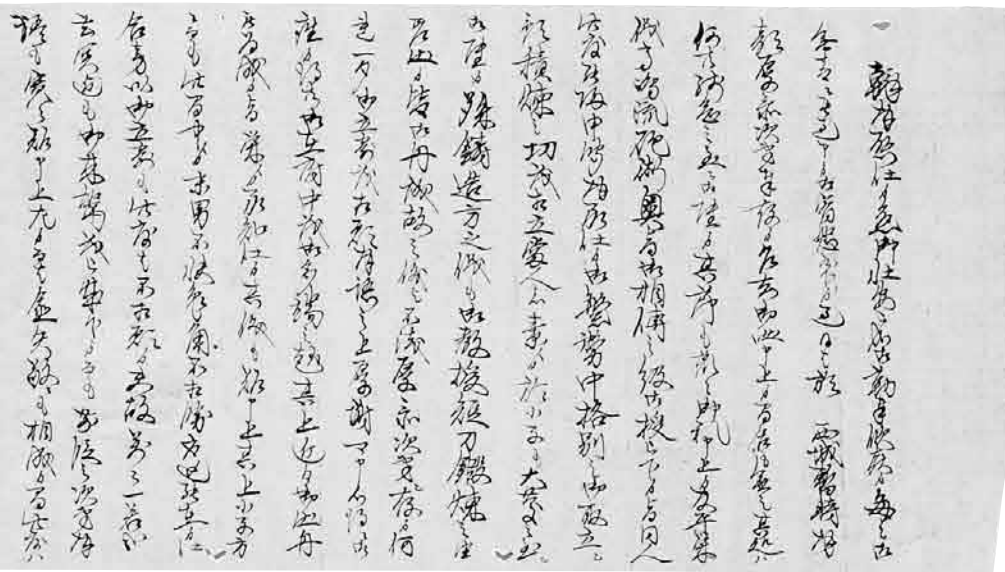
（鳥居忠孝から江川太郎左衛門様宛）

財団法人江川文庫

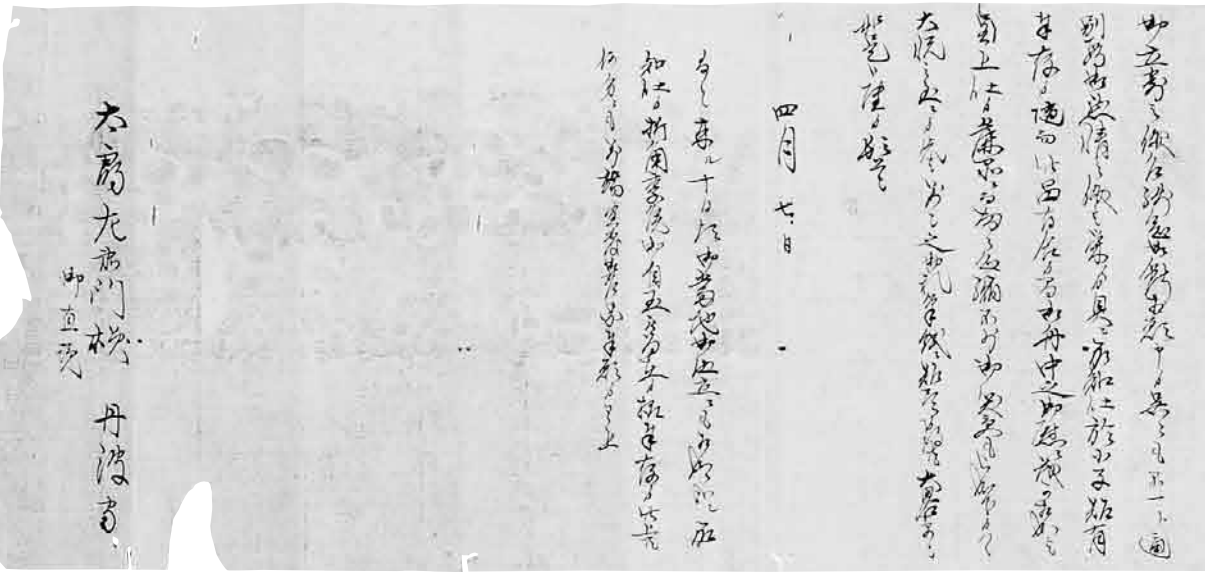
書状の内容は「友平奥旨相伝に付」。友平榮が弘化三年（一八四六）一月二十六日、免許皆伝となり奥儀伝授を許された。その御礼として鳥居忠孝が江川太郎左衛門（英龍）に送った礼状である。



078-1



078-2



078-3

第三章

農民出身の剣客「神新影一円流」の遣い手 糸川政之助



080

080 江川英龍画『富士二たか三なすび図』
個人蔵（当館）
友平家伝来。



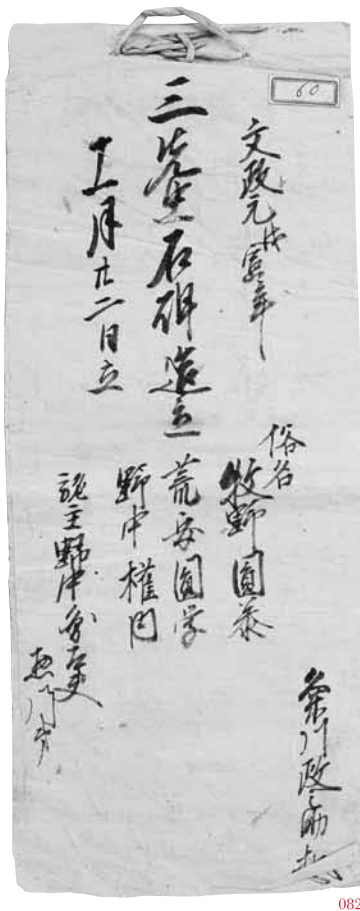
079

079 江川英龍画『波二千鳥図』
個人蔵（当館）
友平家伝来。

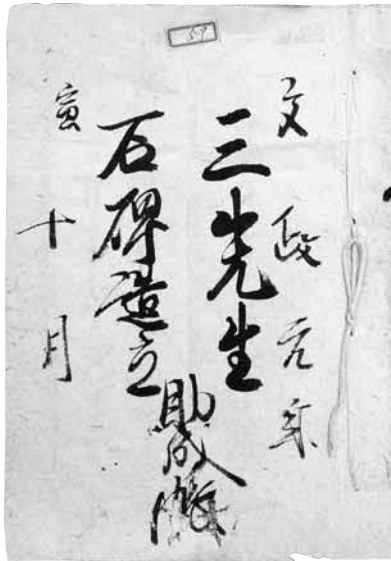
一、一円流の伝承者野中布高と遣い手 糸川政之助

藩士の聖徳太子流、神道無念流と並んで壬生で広く行われた剣術の流派に、一円流（神新影一円流、新神影一円流とも）がある。流祖の牧野新蔵成常（円泰）は越後長岡出身で、神影流を学んで諸国を遊歴した後に自ら神新影流を名乗り、下野総社村（現栃木市）の総社大明神神官である野中家に養子として入った。以後、流派は野中家によって継承され、その三代目に当たる野中権内布高の高弟の一人に、寛政四年（一七九二）に免許を受けた助谷村の農民、糸川政之助（号は当尊）がいた。糸川家は代々村役人を勤める上層の農民であり、政之助も組頭見習役から父の跡を継いで組頭となった。政之助は自宅で私塾「糸川塾」を開いており、庶民教育の一環として、手習とともに教養としての

剣術を教えていた。政之助が書き残した『一円流門人控帳』を見ても、弟子のほとんどが農民で、助谷村や中泉、小林村など近在の村に集中的に分布している。政之助はまた、三十三歳の寛政十一年（一七九九）から八十五歳の嘉永四年（一八五二）に至るまで、五十年余りに亘って日常生活に関する詳細な日記を残したことも知られている。その日記には、農作業や村の遊び日、近在での事件や行事などに混じって、助谷村の糸川家や国谷新田で行われた一円流兵法の稽古、総社の師匠宅訪問、師匠に従っての日光・喜連川方面での上覧稽古など、剣術関係の出来事が記されている。なお、神道無念流の開祖となった福井兵右衛門嘉平は、一円流の二代目野中権内円学に剣術を学んでいる。



082



083



081

081 * 野中権内剣先生之墓（写真）
当館

082 三先生石碑造立寄付帳
個人蔵（栃木県立文書館）

083 三先生石碑造立助成帳
個人蔵（栃木県立文書館）

文政元年（一八一八）、文化十三年（一八一六）の野中権内布高の逝去をきっかけに、一円流初代牧野円泰より第三代野中権内布高までの三代を顕彰するための石碑が建立された。〔082〕はその建立に当たって門弟に広く寄付を求める文書である。小宅村の稲葉三左衛門、助谷村の糸川政之助、小金井宿の増山吉蔵、田村の大森八左衛門、及び村の惣門弟の連名になっている。糸川政之助は寛政四年（一七九二）に二十五歳で免許を受け、師範代を務める高弟の一人であった。〔083〕には寄付を行つた人物とその寄付金額を記してある。

084 糸川政之助奉納刀
個人蔵

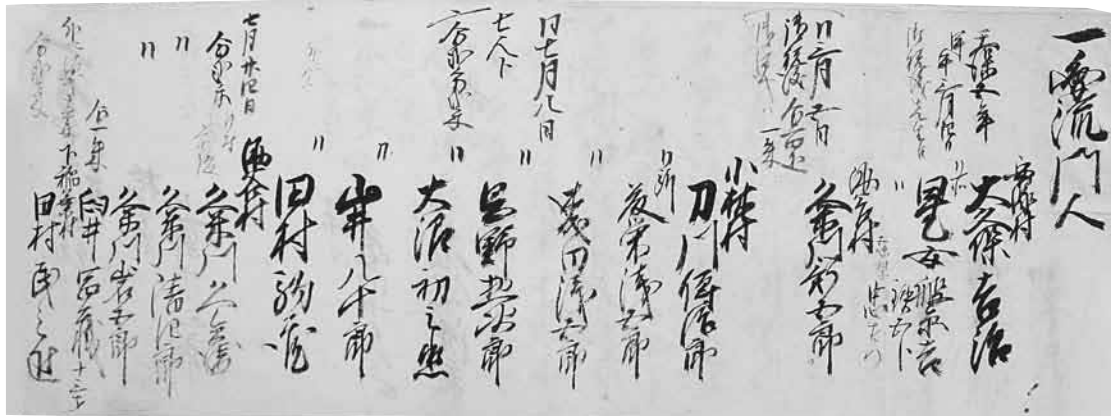
寛政五年（一七九三）一月に糸川政之助が惣社の室八嶋明神に奉納した刀。銘は「野州住源將應作」とある。寛政五年は政之助が一円流（刀の銘では「新神影一円流」）の免許皆伝を受けた年の翌年に当たり、室八嶋明神は一円流の師である野中氏の一族が神官を務める神社であった。



084



086-1



086-2



086-4

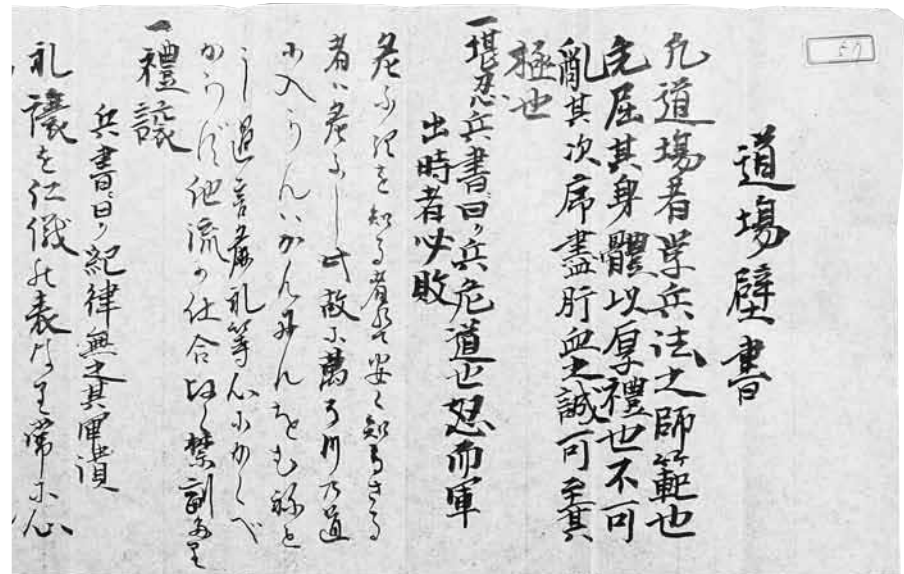


086-3

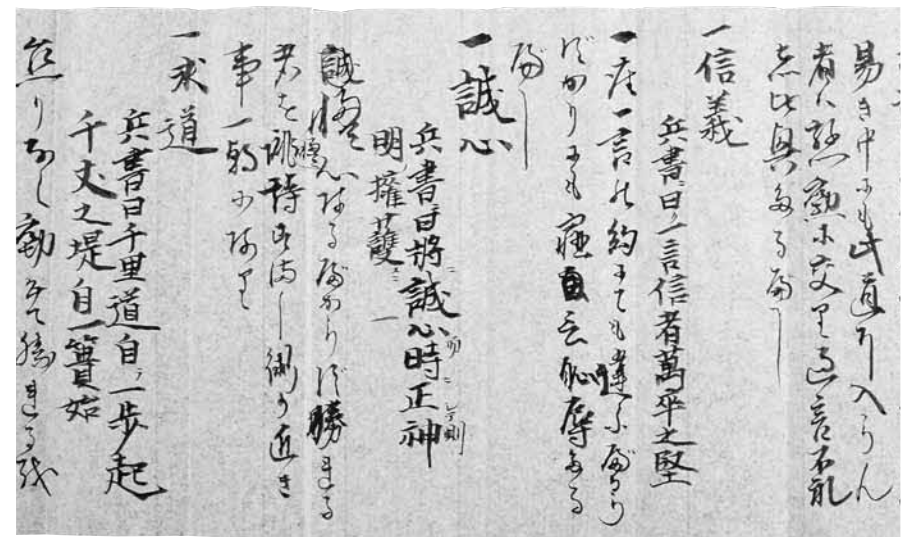
天保五年（一八三四）三月から天保十四年（一八四三）にかけて、一門流門弟として入門した者の名簿。入門の日付、入門者の居住地と名前、入門時に差し出した祝儀の酒代などに混じって、先代の法事の記録、道場に関わる物や金子の遣り取りなども記されている。弟子は裕福な農民の子弟が多く、助谷村、安塚村、小林村、下稲葉村、楡木宿など近在から広く弟子が集まっていること、同じ村から同日に数名がまとまって入門する例が多いことが見て取れる。

086

糸川政之助 一門流門人控帳
個人蔵（栃木県立文書館）



085-1



085-2

085

神新影 一門流道場壁書
個人蔵（栃木県立文書館）

糸川政之助の自宅道場で用いられていたと思われる壁書。修行の際の心構えや決まり事が記される。同内容の壁書が他の一門流道場でも用いられたことが確認されている。政之助の自宅道場は、初めは造作された稽古場を持たず、屋外で稽古を行っていたようであるが、文化元年（一八〇四）四月に「座敷縁」の拵えが行われ、以後は雨の日も稽古ができるようになった。



088-2



088-1



088-4



088-3

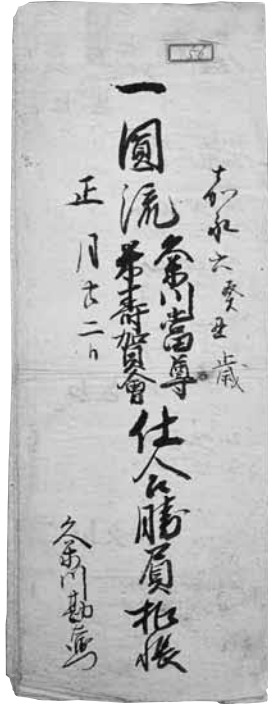


088-5

088

万日記覚帳
個人蔵（栃木県立文書館）

衆川政之助が三十三歳の寛政十一年（一七九九）から八十五歳の嘉永四年（一八五二）にかけて書き残した日記の一部。現在残っている江戸時代の村役人層の日記は農事と公用について記録したものがほとんどであるが、この日記はその他に村の中での冠婚葬祭、祭や遊びなどなどの行事、若者組の寄合、親戚付き合い、村民の出奔や帰村など、私的な出来事を多く記している点で興味深い。日記からはまた、病気の流行、冷害、農作物の価格高騰など当時の世相を読み取ることができ、江戸期の農民生活を再現する上でも貴重な資料である。今回展示の資料は政之助が三十六歳の享和二年（一八〇二）からのもので、剣術関係では自宅や総社の師匠宅での稽古の日付、新規入門者の名前、稽古場にするための増築、師匠に従っての日光・喜連川方面への出稽古が記録されている。これらの記述から、政之助宅での稽古が農閑期の一〜三月に集中していることや、当時「総社先生」（第三代野中権内布高）の他に「若先生」（第四代野中円大夫秀道と思われる）と呼ばれる人物がいたことなどが分かる。



087-4



087-3



087-2



087-1



087-5

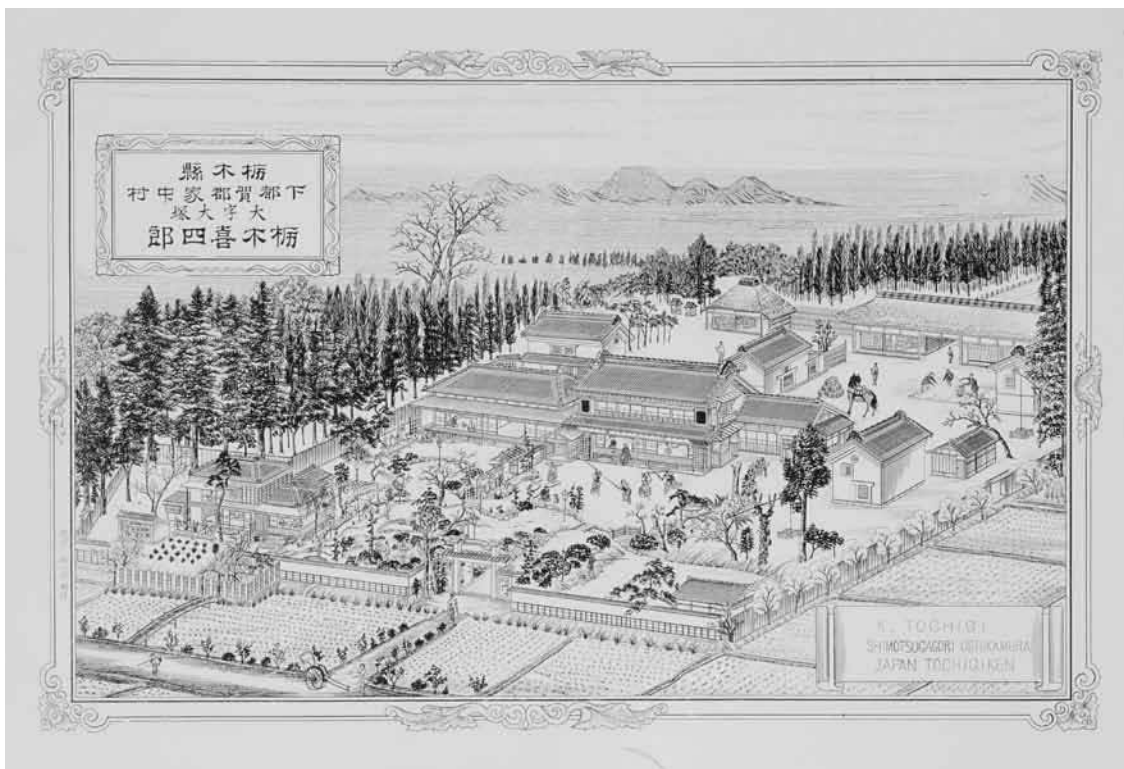


087-6

087

衆川政之助 一円流試合勝負控帳
個人蔵（栃木県立文書館）

文化十一年（一八一四）から嘉永年間にわたって、一円流の稽古・試合の実施状況を記したもの。一日の初めと終わりに実施した型の稽古の参加者、及び試合で各人が取った本数が記されている。



090-1



090-2

089 * 糸川政之助墓碑〈写真〉 当館



089-2



089-1

糸川政之助は文化元年（一八〇四）年に三十七歳で助谷村組頭見習役となり、文化十三年（一八一六）に父が病没すると跡を継いで組頭となった。弘化四年（一八四七）に八十一歳で息子の兵七に跡を譲って隠居し、嘉永六年（一八五三）に死去した。この時、師の第三代野中権内布高は文化十三年（一八一六）に、第四代野中円大夫秀道は文政十三年（一八三〇）に、第五代野中権内秀記は天保十四年（一八四三）に、既に世を去っている。

090 「栃木喜四郎宅」『大日本博覧図』 個人蔵

栃木喜四郎は、明治三十二年（一八九九）に武術の復興を図るために設立された結社「大日本武徳会」栃木支部の会員である。『大日本博覧図』は明治二十年頃の各地の学校や大商店、名士宅を銅版画にしたもので、栃木喜四郎宅の庭で防具をつけて剣術の稽古をする人々が確認できる。「円流は「素面流」と称されたほどで、防具は使用しない流派であったが、糸川政之助宅の庭での稽古もこのような形で行われたと思われる。

第四章

高杉晋作『試撃行』の旅——壬生篇

一、高杉晋作『試撃行』の旅

万延元年（一八六〇）、二十二歳の長州藩士高杉晋作は、剣術修行のため東国から北陸を巡る旅に出発する。この旅について晋作自身が残した記録が『試撃行日譜』である。堂々たる漢文の序文から始まるこの日譜によると、八月二十八日に江戸の長州藩上屋敷を出発し、小塚原の吉田松陰の墓に詣でた晋作は、千住で見送りの桂小五郎、久坂玄瑞らと別れ、水戸街道を通って九月一日に土浦城下を通過、府中（石岡）を経て三日には笠間に到着する。土浦でも笠間でも試合はできなかったが、笠間在住の学者加藤有隣と夜を徹して語り合い、旅のもうひとつの目的である「各地の志士と交流する」という望みを果たすことができた。笠間から真岡を経て五日に宇都宮に入った晋作は、ここでも試合を断られ、憤慨しながら翌六日に日光に向かう。日光で、警衛士の山口為之助が試合を好むと聞き、大喜びして訪ねるがあいにく不在、七日と八日は日光観光にあて、鹿沼を経て九日に壬生に到着する。翌十日に松本五郎兵衛方で念願の初試合を行い、十二日に壬生出発、太平山を経て足利着、

十四日に試合を行って赤城山麓を通過、十五日に碓氷の関所を越え、十七日に信州上田に到着。十八日には上田城下で試合を行い、そのまま滞留して現地の尊王攘夷派の志士と密談する。二十一日に上田を出発して松代に着き、翌日藩学文武学校で試合の後、夜密かに佐久間象山に会う。佐久間象山は刑死した恩師吉田松陰のさらに師に当たり、この旅でぜひ会いたいと思っていた人物の一人であった。松代を出発して善光寺、関川の関所を経由し、二十五日には高田で剣客川合和作に会い、日本海沿岸の「だんがんぜつべき」に出て二十六日に糸魚川着。記述はこのあたりで途切れるが、そのまま海岸沿いに西に向かったようで、福井藩に滞在中の横井小楠に会い、感激してその著書を写すとともに、十月五日には藩内で試合も行ったことが、書簡など他の記録から判明している。次に日付の記述があるのは十月十日、琵琶湖畔を通って大津に着いた日で、その日の深夜に大坂から海路山口を目指したところで『試撃行日譜』の日記部分は終わっている。



091

091 * 高杉晋作肖像画〈写真〉

山口県立山口博物館

高杉晋作は幕末の長州藩士。桂小五郎、久坂玄瑞らとともに吉田松陰の松下村塾で尊王攘夷思想を学び、強固な攘夷論者であったが、師の急進的な行動に対しては反対する立場を取った。文久元年（一八六〇）から翌年にかけての上海遊学を経て、欧米諸国との軍勢力の差を痛感し、藩主に富国強兵策を進言するが容れられず、十年の暇を乞い致仕する。文久三年（一八六三）に藩が外国船砲撃に対する報復攻撃を受けた際

政変で長州藩が京都を追われ、藩政が倒幕と幕府恭順の間で混乱すると、遊撃隊と力士隊を率いて決起し、藩の保守派を一掃して藩政を握る。貿易による国力の充実を図る目的で下関開港を主張したことで、保守・革新両派から命を狙われるようになり、一時四国に亡命するが、藩論が倒幕で統一されたため慶応二年（一八六六）に長州に戻る。この年には薩長同盟が成立。第二次長州征伐では海軍総督として幕府軍を撃退するが、持病の労咳（肺結核）が急速に悪化し、翌慶応三年四月に二十九歳で没した。



094



093



095



092

092 * 高杉晋作生誕跡〈写真〉

当館

高杉晋作は天保十年（一八三九）、長州藩士高杉小忠太の子として生まれた。その生家跡が萩市街の菊屋横丁に残る。

093 高杉晋作の躰刀

萩博物館

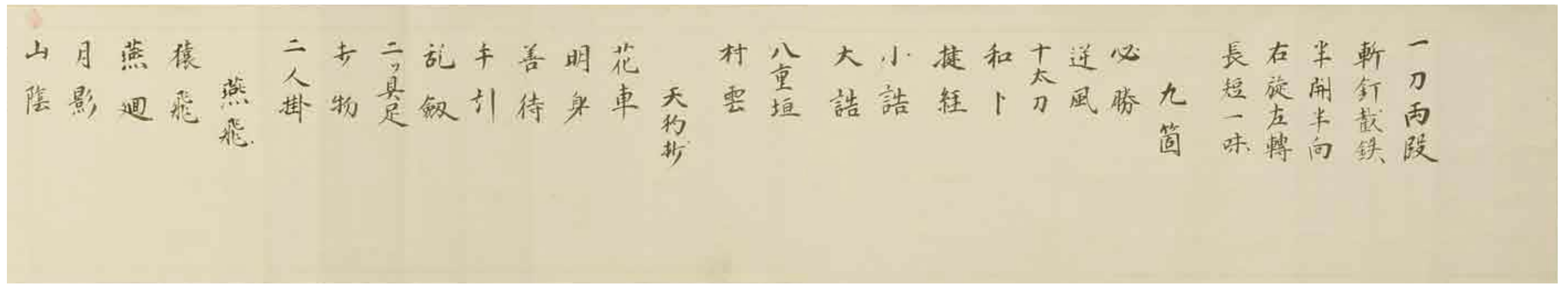
094 高杉晋作の檣古胴

萩博物館

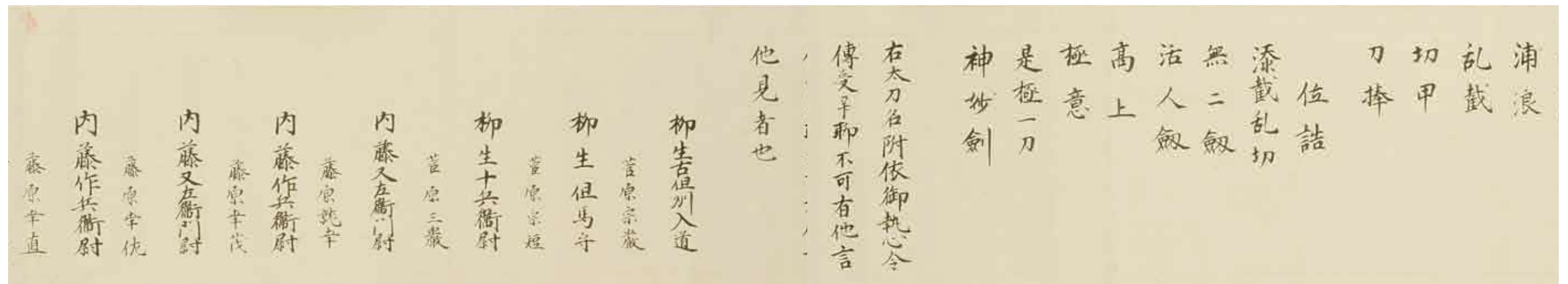
095 高杉晋作の木刀

萩博物館

これらの武道具は、晋作が剣術修行の際に使用していたものである。少年時代の晋作は、藩学明倫館での授業よりも剣術を好んだという。晋作が十一歳の嘉永二年（一八四九）、斎藤弥九郎の息子新太郎が弥九郎の高弟らとともに長州を訪れた。



096-1



096-2



096-3

096

 高杉晋作 柳生新陰流免許
 萩博物館

高杉晋作は、萩の劍客内藤作兵衛から柳生新陰流を学び、
 万延元年（一八六〇）に免許皆伝を授けられた。免許皆
 伝の日付は四月となっているが、この月の五日に、晋作
 は藩命により軍艦内辰丸に乗って江戸に向けて出発して
 いる。



097-4



097-3



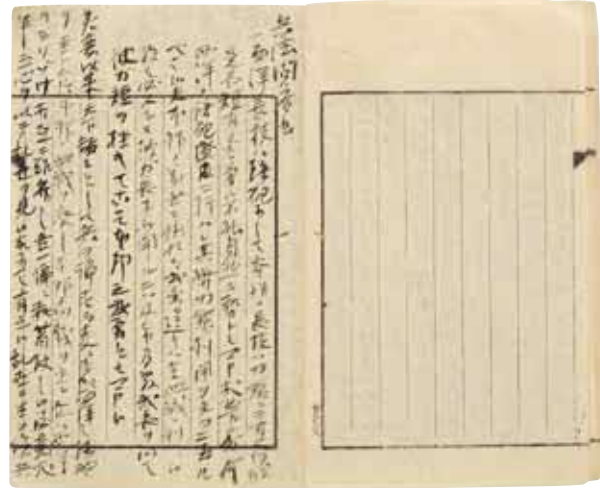
097-6



097-5



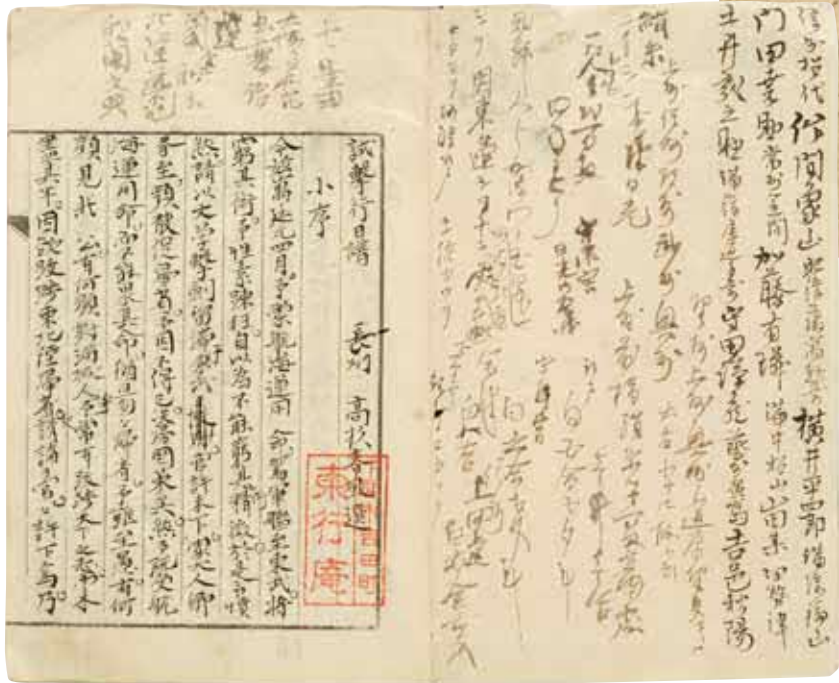
096-8



097-7



097-1



097-2

097 高杉晋作筆『試撃行日譜』

萩博物館

高杉晋作が剣術修行の旅に際して自ら記した日誌。冊子の巻頭に書かれた序文には万延元年（一八六〇）の八月二十八日に江戸を発つまでの経緯が記されている。また、晋作にはかねてより諸国の志士や学者と交流したいとの希望があり、表表紙の裏には佐久間象山、横井小楠、加藤有隣など会うべき人物の名前と所在がメモされている。晋作にはこの日誌をまとめたものとして完成させる意思があつたようで、序文に続く日記部分は、時折仮名が混じるものの概ね漢文で記され、所々に修正や追記の跡も見られる。しかし、九月九日、壬生に到着して松本五郎兵衛門下と試合の約束をしたことを記したページの終わりで日誌は途切れ、その後は横井小楠の著書の写し、日付と地名や簡単な記述の羅列、漢詩の下書き、旅の途中で見聞きした諸国の志士の動向や各地の経済状況などのメモが混在している。記述箇所によって日付が前後したり、重複したり、通過地名との関係が食い違ったりする例が多く見られることから、旅行終了後に思い出しながら書いた部分が含まれているものと考えられる。なお、この日誌には九月三・四日に笠間で加藤有隣に、九月二十二日に松代で佐久間象山に会ったことが記されており、この年十一月の久坂玄瑞宛書簡から福井で横井小楠に会ったことも確認できる。

二、「柳生新陰流」高杉晋作 vs 「聖徳太子流」松本五郎兵衛

高杉晋作は、藩士としては柳生新陰流の内藤作兵衛の弟子であるが、藩の方針により実戦的な神道無念流が導入されることとなり、また練兵館の塾頭を務めた先輩桂小五郎を通じて、斎藤弥九郎の薫陶を受けたと考えられる。そのため、この試撃行の旅に斎藤弥九郎の添書（紹介状）を持参している。にもかかわらず、さまざまな理由から、土浦、笠間、宇都宮、日光とずっと試合の機会を得られなかった。晋作は壬生に到着するとすぐ神道無念流の剣客松本五郎兵衛方に使いを送り、添書を渡して試合の申し込みをしている。松本五郎兵衛（昇）は、藩士としては聖徳太子流の剣士であったが、斎藤弥九郎から神道無念流の免許を受けており、晋作は弥九郎を通じて五郎兵衛の名前を知っていたのではないかと思われる。まもなく、使いとして五郎兵衛の門弟が訪れ、明朝試合を受ける

との返事とともに、同時に試合を行うもう一人の剣客がいることを知らせる。夜半に訪ねてきたその剣客は、晋作が少年のころ、同じ内藤作兵衛に一時師事していた年長の剣士であり、晋作は再会の喜びを日記に記している。翌十日には約束どおり試合が行われ、『他流試合士名帖』のはじめに「野州壬生藩聖徳太子流松本五郎兵衛門人」として、五郎兵衛とほか十一人の名前が記されている。しかし、試合の前日九日の記述を最後に、日譜は系統だった記述をやめ、雑多なメモや日記の断片などの寄せ集めになってしまう。『他流試合士名帖』にも試合結果までは記されておらず、なぜ日記がこの日で途切れたのかを示す確かな資料は現在のところ、見つからない。ただ、松本五郎兵衛の子孫に伝わる話では、晋作は松本五郎兵衛と立ち会って一勝もできなかったということである。



098

098 * 高杉晋作肖像〈写真〉 個人蔵

099 高杉晋作他流試合士名帖 萩博物館

『試撃行』の旅に際して高杉晋作が出会った剣客の名を記した名簿。実際に試合をした相手は「手合」あるいは「試合」、会っただけで試合をしていない相手は「面会」と書き分けられている。巻頭の付記および序文によると、晋作の署名部分は自筆である。相手の名を記した部分は試合場所ごとに筆跡が異なるため、それぞれの道場の担当者を書いたものと考えられる。『試撃行日譜』にあるものでは九月十日の壬生藩（ただし『日譜』当日分には「淹留」とのみ記載）、十八日の上田藩、二十二日の松代藩での試合がないものは十月五日の越前福井藩での試合が確認できる。逆に『日譜』にあつてこの『士名帖』に記載がないのは、足利で行われたと思われる九月十四日の試合である。

其其議論法
出于人慮表真
益友也今將
出試擊名簿宗
序目題之卷言
其首且以代送
云
藏又端

長州藩
極生
新佐流
田島飛騨
口人

099-1

高松晉作

野州
一土生藩
名德太子流
松平公家
内人

上野言
海山歌

099-2

中井善尾
其急仙先
早川也
井野流
垣田勝
田井也
吉田全藏
柳瑞徳
鎌田才助
千代弟延康中
九月十日
西肥佐嘉藩
直心流
中島強衛
口生

099-3

田中龍元
右弟延元年申九月
十日世可壬生城下
御面會仕度

上田藩
新當院
尾子親藏
虎七三喜
栗山顯光
今觀古
五二制院



099-4



100

100 松本五郎兵衛肖像
個人蔵

松本五郎兵衛（昇、号は撼山、明治になって兎角と改名）は壬生藩聖徳太子流剣術師範であり、藩士に藩学として聖徳太子流を伝授する立場にあった。また、斎藤弥九郎から天保六年（一八三五）に免許を受けた神道無念流の剣客でもあり、弥九郎と書簡を遣り取りするなどの私的な交流があった。このことから、高杉晋作は斎藤弥九郎を通じて以前より松本五郎兵衛の名を知っており、そのため壬生に来てすぐに試合の申し込みをしたものと考えられる。元治元年（一八六四）の水戸天狗党の乱に際しては軍師として山川陣屋に出陣し、慶応四年（一八六八）に藩主忠宝の弟忠文が兄の名代として上京した際にも付き随っている。明治三年（一八七〇）に息子の政人（通称尚之丞、尚一）に家督を譲り、明治八年（一八七五）七十一歳で死去。

101 * 松本家表札
個人蔵

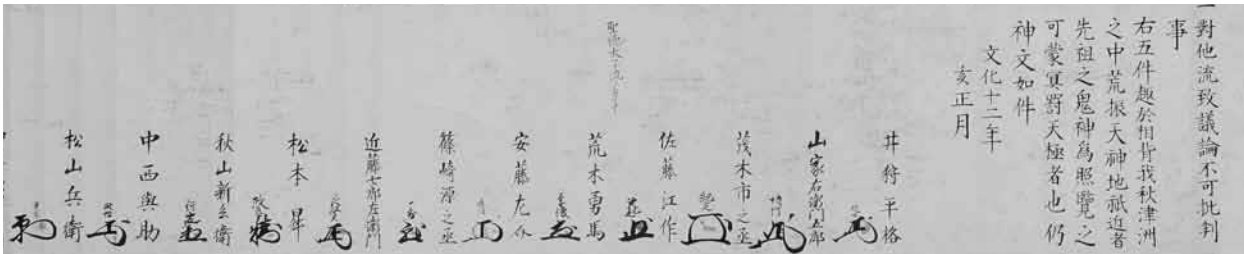
表札には、「松本兎角（五郎兵衛）、同尚一、同菴」、裏には「武運長久」とある。松本五郎兵衛の屋敷は壬生城本丸の北側、侍屋敷が立ち並ぶ一角にあった。現在の城址公園の北に当たる。一方、高杉晋作が壬生に着いてすぐにそこから松本五郎兵衛宛に使いを送ったという「壬生駅亭」は、「駅吏」が詰めていることからみて、おそらくは通町にあった問屋場を指すものと思われる。



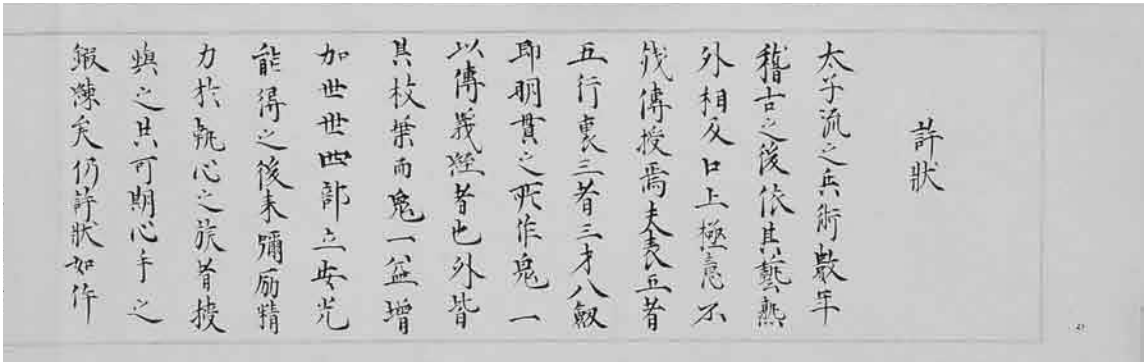
101-1



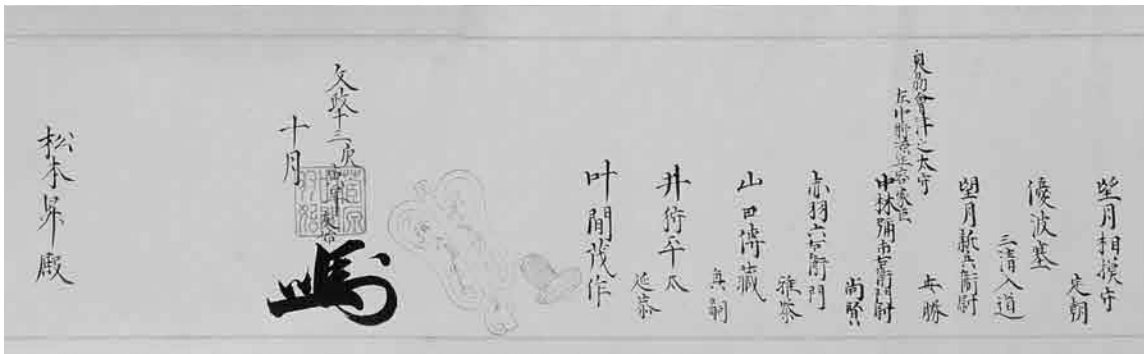
101-2



102



103-1



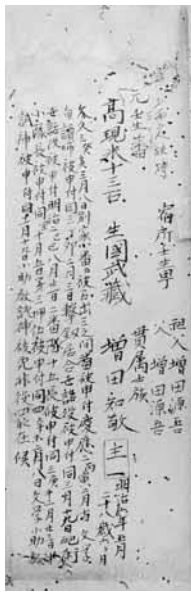
103-2

102 聖徳太子流起請文
個人蔵

この起請文は、松本五郎兵衛（昇）が文化十二年（一八一五）に聖徳太子流剣術に入門時のものである。昇は、この時十歳。起請文とは、流派剣術を伝授するに当たつての誓詞。太子流門下の連名のもと、流派の定めを厳守すべきこと、また違背した場合は神仏の罰を受けることを神仏にかけて誓約したものである。

103 松本五郎兵衛 聖徳太子流免許
個人蔵

文政十三年（一八三〇）十月、師の叶間茂作より松本五郎兵衛（昇）にあてたもの。



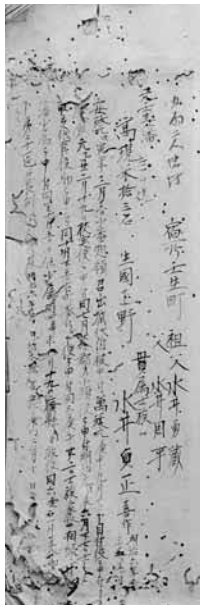
107-2



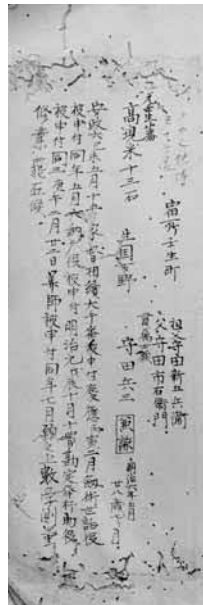
107-1



107-5



107-4



107-3



106



105



104

104 * 松本五郎兵衛門人 増田鏑太郎肖像〈写真〉

横浜開港資料館

増田知（通称鏑太郎）は『他流試合士名帖』に記載された松本五郎兵衛門下の一人である。試合当時は十八歳。元治元年（一八六四）の水戸天狗党の乱の際、尊王攘夷派として天狗党との交渉に当たったため揚屋入りを命じられるが後に許され、後継者に家督を譲って隠居。明治三年に壬生藩少参事を辞して諸県に奉職後、横浜区区長を経て明治二十二年（一八八九）六月に初代横浜市長となったが、市政の混乱により同年十二月に辞職。その後は富山県参事官、南多摩郡長などを歴任し、明治四十四年（一九一一）に没した。

105 * 松本五郎兵衛門人 守田兵蔵肖像〈写真〉

当館

守田兵蔵（兵三、兼諒）は『他流試合士名帖』に記載された松本五郎兵衛門下の一人である。弘化元年（一八四四）生まれで、試合当時は十七歳。この前後に藩の剣術世話役助を拝命している。元治元年（一八六四）の水戸天狗党の乱の際に陣中で銃創を負ったが回復、明治元年に勘定奉行助役に任命されると閥流算術と測量術を修める。明治六年（一八七三）に技師として官界に入り、鉾山関係の調査に従事した後、明治二十年には古河家に払い下げられた足尾銅山に入山、運搬用の鉄索路の建設など多大な功績を残し、引退後は日光町会議員を務め、郷土産業の振興に尽力した。

106 * 松本五郎兵衛門人 水井喜作肖像〈写真〉

個人蔵

水井喜作（貞正）は『他流試合士名帖』に記載された松本五郎兵衛門下の一人である。試合当時は二十二歳か。文久三年（一八六三）藩主の大坂加番の際には下目付を務めている。明治維新後は壬生藩少属として勤めた。

107 旧壬生藩士族明細短冊帳

当館

明治六年（一八七三）調べ。明治新政府の秩禄改革に当たり、旧壬生知事烏居忠文の命により、旧藩士が自らの家系、家格、職歴などを記して提出した短冊を一冊にまとめている。短冊の順序は明治三年の官員録の席次表に基づく。同時期の他の史料と比較すると若干の抜けはあるものの、幕末から明治初期にかけての旧壬生藩士族の状況を記す貴重な史料である。『他流試合士名帖』に記載された中では、増田鏑太郎、水井喜作、守田兵蔵の他に、上野金次郎、北原仙吉（作家北原武夫の大伯父）、酒井惣吉の名が確認できる。なお、短冊は家ごとに一枚提出されているため、松本五郎兵衛（明治三年に隠居）、及び門人の鎌田寸四郎（元治元年に天狗党の乱に連座し自決）は家長の父の名として登場している。

下野における剣術の展開と壬生の剣術

植田俊夫（財団法人栃木県体育協会）

現在の剣道は、名称を「撃刀」^{たちかき}「兵法」^{ひょうほう、へいほう}「剣術」^{けんじゆつ}「撃剣」^{げつけん}「撓競技」^{なげんぎ}「剣道」等と変えてきた。ここでは後に大きな影響を与えることになる近世「剣術」の下野、壬生における展開をみる。

一、剣術の概史

武士の興起とともに刀剣操作の技術が工夫され、室町から戦国の戦乱期に「陰流」、「神道流」、「中条流」など剣術の源流となる流派が創始された。これまで剣・長刀・槍・棒・捕縄・柔など実践本意の武技を包括し兼修されていた「兵法」は、江戸時代になると剣術、柔術、槍術等へと分化し、相伝体系も整備された。泰平な世に入ると「剣術」は実践的な剣法から形式的になり華法化した。また、各藩では御流儀として独自の剣術流派を採用するなど封鎖的・排他的になり他流試合も禁止された。

江戸後期、各藩の藩校設置とともに稽古場・演武館が併設され、分散していた師家道場が統合され他流の修行が可能となった。一方、武士以外の農民等も私塾や市中道場で稽古するなど幕末の流派は数百にも及んだ。嘉永のペリー来航を契機に、幕府は武術振興の必要性を痛感し「講武所」を設置した。そこでは洋式砲術の訓練とともに剣術、槍術も教授している。

明治維新、武士階級の解体など大きく社会変化する中、「剣術」は道場などで脈々と継承されていた。明治二十八年（一八九五）、武道を統括する「大日本武徳会」が創設され、武術は全国規模で流派を超え統一された。やがて学校教育にも「剣道」が採用されるようになったが、第二次世界大戦の敗戦により武徳会は余儀なく解散し剣道は禁止され衰退した。昭和二十九年（一九五四）、新たに「全日本剣道連盟」が発足し現在に至っている。

二、下野の剣術

江戸前期、下野において藩校以外で史料的に確認できる剣術は、大田原・湯津上の「正

三、壬生の剣術と剣客

ここで壬生における剣術を見る、下野の中でも壬生藩の藩学「学習館」は正徳三年（二七一二）の早い時期に設置され、剣術は「聖徳太子流」（「太子流」とも称した）を教授科目に定め藩士を対象に指導した。その中で、壬生藩士「聖徳太子流 剣術師範」の松本昇（五郎兵衛）は、江戸の斎藤弥九郎善道に「神道無念流」を学び、天保六年（一八三五）に『免許』を受けている。また、万延元年（一八六〇）、高杉晋作が廻国修行の途中、壬生を訪れ「聖徳太子流 松本五郎兵衛」に試合を申し込んでいる記録（『試撃行日譜』）が残されている。このように同一人物が藩校と市中道場で別の流派を稽古している。一方、「一円流」をみると、壬生助谷の条川政之助は、寛政の頃から自宅に道場を設け多くの門人（『一円流門人控帳』）を集めるとともに近隣にも出かけ農民層を中心に指導していた。このように壬生藩領内では、藩校の「聖徳太子流」、藩士の「神道無念流」、農民の「一円流」の剣術が幅広い層に普及していた。ここ壬生の地は、福井兵右衛門嘉平のような流祖となりうる才能を備えた人物を輩出する土地柄であるとともに、藩主による平素からの文武に対する意識の高さがこのような剣術がの展開を繰り広げられたのかも知れない。

これら「聖徳太子流」「一円流」「神道無念流」の壬生の剣客を見る。

聖徳太子流（太子流）

流祖の中林尚堅は会津の人で、元禄の頃に「太子流」剣術を興した。名の由来は聖徳太子の兵法（軍法）よりでたもので「聖徳太子流」あるいは「太子流」とも称され、会津藩で継承されていた。下段の構えを特徴としていた。流祖、中林尚堅が元禄期に野州天明（現佐野市）を訪れた記録（『会津剣道誌』）があり、他伝書からみても壬生への伝承は会津からと思われる。

主な剣客は、文化ゝ天保期の『許状』『印可状』によると井関五郎右衛門、松本五郎兵衛、井狩平太延恭、松本央、文化・明治期の入門帳『起請文』（役職は『鳥居家野州壬生分限帳』等）には、茂木市之丞（御用人客 御留守居兼）、井狩平格延世（大手御門番）、荒木勇馬（御目附）、中西興助（郡奉行）、長島多門（御物頭）、三村金十郎（学館助教師）、松本昇政名（剣術指範・大手御門番）、叶間茂作友始（大手御門番）と、いずれも藩士である。

田新陰流」「浅山一伝流」、黒羽の「無外流」「心陰流」などであり武士必修のものとて修行されている。やがて藩校が設置されると、「聖徳太子流」（壬生藩）、「小野派一刀流」（烏山藩）、「示現流」（茂木藩）、「直心影流」「信心流」（宇都宮藩）、「一刀流」（大田原藩）、「神道無念流」（黒羽藩）、「直心影流」（佐野藩）など藩士を対象に指導されていた。また、同じ幕藩体制下、形式的には武士以外に禁止されていた「剣術」は、すでに享保年間（一七一六―一三六）、鹿沼、宇都宮古賀志では上層農民を中心に「当流」が稽古され、また、栃木惣社の神官、野中家の道場や、壬生助谷の農民条川家の道場では「一円流」（「神新影一円流」とも称した）が修行されていた。このように下野において、藩士は武士の教養として、農民は自衛手段、武士への回帰願望あるいは由緒ある家柄への修飾を求める一面も持つて剣術は行われていた。

幕末、幕藩体制が揺るぎ倒幕等の動きがみられるこの時期、江戸の「北辰一刀流」千葉周作や「神道無念流」斎藤弥九郎などの道場へ多くの入門があつたが、そこには思想と剣客のかかわりも見られた。下野でも「神道無念流」斎藤弥九郎善道門人の野原正一郎（壬生藩士）、那須唯一（壬生藩士）、「直心影流」の内藤民部（永野村）、「北辰一刀流」千葉周作門人の早乙女万弥（栗宮）、「心明当流」の福田誠好斎（鹿沼引田）、「真心武蔵流」の鳥居岩男（宇都宮藩士）などがいる。

明治維新、廃藩にともない禄をなくした武士の中には道場を設け剣術を指導する者もいた。宇都宮藩の「直心影流」師範であつた渡辺量平重綱は、明治十二年（一八七九）に「尊武館」道場を設置、その門人、阿久津辰吉は明治二十四年（一八九一）に「振武館」を開設しているように、宇都宮市内では昭和期まで「直心影流」剣術が継承されていた。一方、明治二十年代には自由民権運動が活発化し、栃木地区を中心に政治結社的な剣術道場も現れ、人の交流の「場」ともなっている。

明治三十二年（一八九九）、「大日本武徳会栃木支部」が設立され宇都宮旧城址に武徳殿を構えた。以後、流派剣術は統合され、「形」による継承へと移行するなど、名は残るが流派色は薄れていった。現在、県内に継承されている流派剣術は見当たらない。

一円流（神新影一円流）

流祖は越後の長岡出身の牧野新蔵成常（円泰）で、はじめ「新影流」を学び諸国修歴の後、下野惣社（現栃木市）の神官、野中家に入り「一円流」を興した。二代目野中権内玄慶暉里（円学）、三代目野中権内布高、その後、野中秀道暉方（円太夫）、野中権内秀記、荒川九内、そして七代目野中権作へと明治期まで惣社、壬生を中心に伝承された。素面素小手で中段の構えを得意としていた。なお、「一円流」は幕末の江戸で隆盛を誇つた「神道無念流」の源流である。

壬生助谷の条川政之助は、寛政四年（一七九二）、三代目野中権内布高から「一円流」免許を受け、自宅の道場で近隣の農民を対象に指導している。寛政十一年（一七九九）から五十三年間の日常生活とともに剣術修業の状況を書き留めた日記『万日記覧帳』を残している。また、師匠の権内布高のお伴で剣術上覧のため喜連川藩に出向くとともに、日光、今市方面への剣術指南にも出かけている。

神道無念流

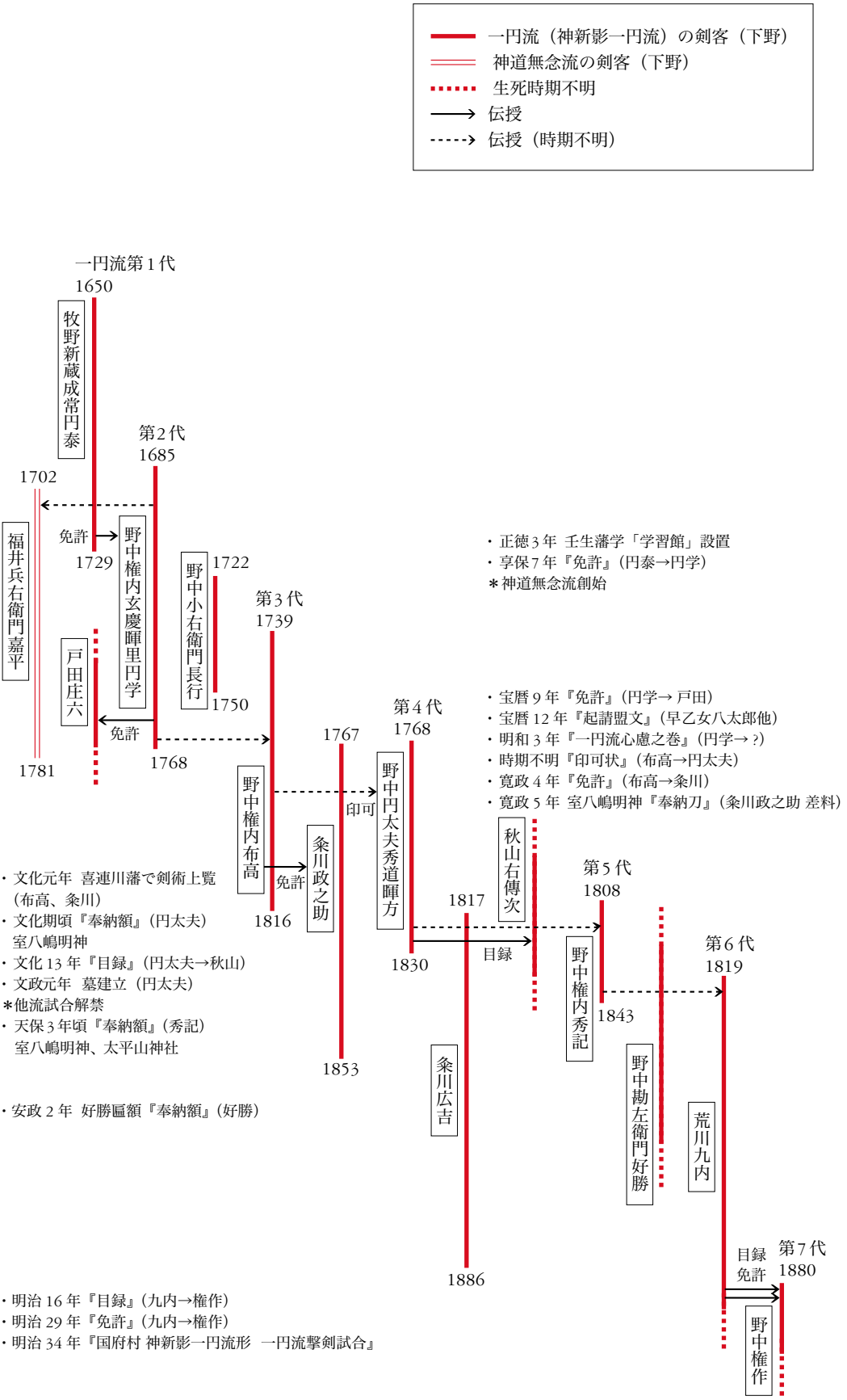
流祖の福井兵右衛門嘉平は、はじめ川上善太夫といい元禄十五年（一七〇二）頃、都賀郡藤葉村（現壬生町）に生まれた。栃木惣社の二代目野中権内（円学）に「一円流」を学び、諸国修行の後、自ら「神道無念流」を興し、享保期には江戸に道場を構えた。その高弟、埼玉清久村出身の戸賀崎熊太郎暉芳、岡田十松吉利へと継承され、その門人、斉藤弥九郎善道は文政九年（一八二六）に「練兵館」を開いた。その門人の中には攘夷、勤王派など活動家が多く見られる。下野では栃木、小山、佐野など県南を中心に栄えた。壬生の剣客を見る。

松本五郎兵衛昇は、壬生藩士（聖徳太子流 剣術師範）で、斎藤弥九郎より天保六（一八三五）神道無念流「免許」を受け、多くの門人（『起請盟文』）を指導した。

野原正一郎正道は、壬生藩士（卒正）で、斎藤弥九郎の門人で四天王といわれ諸道場で試合をしている。また、長州へ「勇士組」の一員として参加した。慶応三年（一八六七）には太平山神社に門人名のある奉納額がある。維新後は警視庁に入った。その他、松本昇の門人で壬生藩士である野中庄左衛門信義（長島多門組）、西沢衆蔵義治（御持筒）、人見熊治治友（郡方小頭）らがいる。

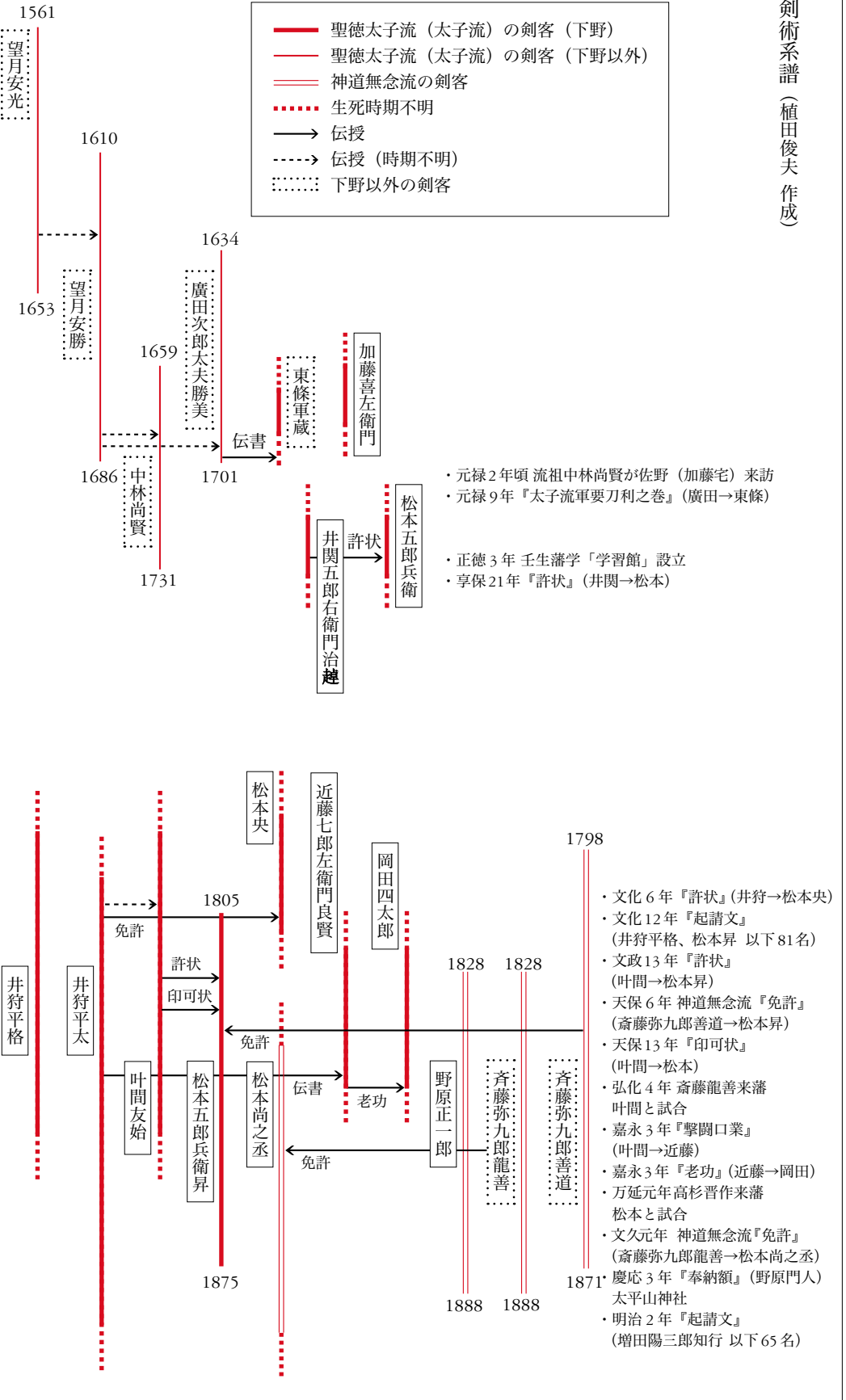
一円流（神新影一円流）剣客

安土桃山時代	
1573 — 1592	天正
1592 — 1596	文禄
江戸時代	
1596 — 1615	慶長
1615 — 1624	元和
1624 — 1644	寛永
1644 — 1648	正保
1648 — 1652	慶安
1652 — 1655	承応
1655 — 1658	明暦
1658 — 1661	万治
1661 — 1673	寛文
1673 — 1681	延宝
1681 — 1684	天和
1684 — 1688	貞享
1688 — 1704	元禄
1704 — 1711	宝永
1711 — 1716	正徳
1716 — 1736	享保
1736 — 1741	元文
1741 — 1744	寛保
1744 — 1748	延享
1748 — 1751	寛延
1751 — 1764	宝暦
1764 — 1772	明和
1772 — 1781	安永
1781 — 1789	天明
1789 — 1801	寛政
1801 — 1804	享和
1804 — 1818	文化
1818 — 1830	文政
1830 — 1844	天保
1844 — 1848	弘化
1848 — 1854	嘉永
1854 — 1860	安政
1860 — 1861	万延
1861 — 1864	文久
1864 — 1865	元治
1865 — 1868	慶応
明治以降	
1868 — 1912	明治
1912 — 1926	大正
1926 — 1989	昭和



聖徳太子流（太子流）・神道無念流剣客

安土桃山時代	
1573 — 1592	天正
1592 — 1596	文禄
江戸時代	
1596 — 1615	慶長
1615 — 1624	元和
1624 — 1644	寛永
1644 — 1648	正保
1648 — 1652	慶安
1652 — 1655	承応
1655 — 1658	明暦
1658 — 1661	万治
1661 — 1673	寛文
1673 — 1681	延宝
1681 — 1684	天和
1684 — 1688	貞享
1688 — 1704	元禄
1704 — 1711	宝永
1711 — 1716	正徳
1716 — 1736	享保
1736 — 1741	元文
1741 — 1744	寛保
1744 — 1748	延享
1748 — 1751	寛延
1751 — 1764	宝暦
1764 — 1772	明和
1772 — 1781	安永
1781 — 1789	天明
1789 — 1801	寛政
1801 — 1804	享和
1804 — 1818	文化
1818 — 1830	文政
1830 — 1844	天保
1844 — 1848	弘化
1848 — 1854	嘉永
1854 — 1860	安政
1860 — 1861	万延
1861 — 1864	文久
1864 — 1865	元治
1865 — 1868	慶応
明治以降	
1868 — 1912	明治
1912 — 1926	大正
1926 — 1989	昭和



万延元年・高杉晋作 野州路の旅

柴田宜久（栃木県歴史文化研究会員）

旅立ち

最終的に倒幕を実践した高杉晋作は、万延元年（一八六〇）の秋、江戸から長州の萩へ帰るまでの旅の途中に宇都宮、日光、壬生を訪れている。晋作がまだ一慷慨家にすぎなかった二十二歳のときである。晋作はこの旅を「試撃行」と名づけて、旅日記「試撃行日譜」を遺している。

晋作は、なぜこの旅を企画したのか。それは、晋作がなぜ江戸へきたのかということから説明しないと分りにくい。二年前に遊学のために江戸へ来たとき晋作は、大橋訥庵の塾に入門したが、まもなく大橋塾を退塾し、幕府の昌平黌へ入学したがたいして得るものもなく帰国している。この間、幕府は大老井伊直弼が大老に就任して、反幕府的活动家の多くを弾圧した安政の大獄があり、師の吉田松陰も犠牲者となっている。帰国した晋作は、両親のすすめで、萩城下で美人の誉れが高い町奉行井上平右衛門の娘雅子と結婚し、一応、平穏な新婚生活をおくるやにみえた。しかし、晋作が萩に帰ってまもなく吉田松陰も刑死した。また、この万延元年（一八六〇）春、井伊大老も水戸浪士らに暗殺される（桜田門外の変）。晋作は、海軍修行を志して藩船丙辰丸に乗り込んで江戸まできたが、途中、船酔いに悩まされ、「僕、疎にして狂」との性格から海軍修行には不向きであることを自覚して、あつさりと断念してしまう。そして晋作は、文学と剣術修行のために江戸への残留を希望した。しかし、長州藩の実直な藩吏であつた父小忠太は、息子の晋作が松陰門下の「過激派」との交友を危惧して、ひそかに江戸藩邸の要路に、晋作の帰国を働きかけたのであつた。

晋作の短い生涯を通じていえることは、幕府を倒すエネルギーをもちながら、なぜか「毛利恩顧の臣」であることを誇りとし、また、親には頭があがらないことである。晋作は、どうせ帰国するのであれば、加藤有隣、佐久間象山、横井小楠など諸国の有識の士を訪ねることに剣術修行をかねて、遠回りをして長州の萩まで帰ろうと考えたのである。

83

82

と記述していることから、有隣がこのころの時勢を憂いた過激な内容の詩文であつたのであろう。

翌四日朝、晋作は、詩文稿を返却するため十三山書楼に再訪した。有隣は、晋作にさらに滞留することを勧めたが、先をいそぐ晋作は、後ろ髪引かれる思いで十三山書楼を辞した。晋作は、途中、大泉（現岩瀬町大泉）で一泊、真岡をへて宇都宮へ向かった。このあたり風景は、晋作の生まれ育った長門、周防地方とは異なつて、広大な関東平野の北部の平地が広がっている。晋作は、「皆、茫々たる原野なり」と表現している。

宇都宮にて

五日夕刻、宇都宮へ着いた。宇都宮は、宇都宮藩（戸田家・七万八千石）の城下町である。宇都宮に着いた晋作は、城下で剣術の試合の相手を求めたようである。しかし、宇都宮では他国人との試合に応じる者はいなかった。晋作は、この理由を、「予、おもえらく、この辺り東武（筆者注…江戸）はなほだ近し、故に或いは浪人狂民を□ため遊歴するものあり、この議によつて起こるところか」と分析している。

晋作は、宇都宮城下の印象を「宇都宮城下、雑踏、人家周密といえども、多くこれ都下悪臭民人公藩、士風軽薄、想うべく笑うべし」と書き留めている。晋作の旅日記「試撃行日譜」に書き留められた宇都宮の記事はこれだけである。

晋作は、宇都宮にあまりよい印象をもっていない。先述したように、晋作は、最初の江戸遊学のときに、宇都宮と縁が深い大橋訥庵の塾に入門している。晋作にとって宇都宮は無縁の地ではないはずである。

大橋訥庵は、兵学者として名高い清水赤城の四男として生まれ、儒家佐藤一斎に学び、日本橋橋町に思誠塾を開いていた。訥庵は西洋を批判した「闢邪小言」を著し、攘夷論者として名高く、門人は全国から集まつていた。また、宇都宮出身で、一代で江戸の豪商にのしあがった菊地淡雅は、訥庵のスポンサーであり、その娘巻子は訥庵の妻であつたことから、宇都宮とは縁が深かった。後年、宇都宮藩でいわゆる「志士」的な活動をした人たちは訥庵の門人たちであつた。

しかし、大橋塾に入門した晋作は、大橋訥庵には失望した。そのころ萩の友人に「私も先達てより大橋塾に入込み候処、愚に堪えかね云々」と書き送っている（『東行先生遺文』所収）。

笠間にて

八月二十八日、桂小五郎、久坂玄瑞らに見送られて江戸を旅立つた晋作は、一路、千住から松戸、牛久、土浦、府中（石岡）をへて笠間へ向かった。加藤有隣を訪ねるためである。加藤有隣は、水戸藩士の家に生まれ、幼少のときに笠間藩士である縁類の加藤家に養子に入った。水戸藩の会沢正志斎の門に入り水戸学を学び、その後、江戸に出て幕府の昌平黌に入学。さらに佐藤一斎に儒学、清水赤城に兵法・砲術、（平田国学も）を学んだ人物である。帰藩してからは笠間藩に重用されたが、藩の旧党派と対立し、嘉永四年（一八五〇）藩政から身を退いて「十三山書楼」と名づけた塾を開いていた。この書屋の名は、書楼から筑波山など付近の十三の山々が展望できることから命名されたという（『笠間市史上巻』）。

加藤有隣の名声をきいて「十三山書楼」を訪れる文人墨客や諸国の有志藩士が多かつた。かつて吉田松陰の勧めによつて、長州藩士赤川直次郎（淡水）が有隣に師事しており、有隣の学識を喧伝していたことから長州藩士にも知られていた。晋作も安政五年（一八五八）の久坂玄瑞への書状の中で、加藤有隣を訪ねたい希望を述べていることから、有隣を訪ねることは数年来の宿願であつたようである（『高杉晋作全集』所収）。

二日、笠間に着いた。笠間は、笠間藩（牧野家）の城下である。翌三日、晋作は、有隣を十三山書楼に訪ねた。有隣（五十才）は、晋作（二十二才）とは親子ほどの差があつたが、有隣は晋作を歓待した。夜更けまで国事を論じたという。その状況を晋作は、「予、忽卒七古を賦して志を言う。先生大いに悦ぶ、静座細語天下のことを論ず。予、亦、力を得ること少なしとなす。興に乗じて談尽きるところなし」とあるから年令の差を越えて大いに意気投合して天下のことを論じ合つたのであろう。有隣は最近作の「詩文稿」を晋作に貸与した。宿にもどつた晋作は眠る暇もなく詩文稿を読みふけて、朝を迎えた。「詩文稿」の内容について、晋作は「先生の詩文稿、もとより浮文空詩と異なる。或いは慷慨激烈、これを読めば皆その人となりを知るべし、天下當時の形勢をしるべし」

晋作は、まもなく大橋塾を退塾し、幕府の昌平黌へ入学し直した経緯があつた。吉田松陰の薫陶をうけた晋作からすれば、このころの大橋訥庵は空理空論を得意とする観念論者と思えたのであろう。

宇都宮には大橋訥庵の門人が多く、晋作と面識がある者もいたはずである。しかし、晋作はそれらを訪ねた形跡もない。晋作が宇都宮の印象を「士風軽薄、想うべく笑うべし」と述べているのは、たぶんに最初の江戸遊学のときの大橋塾の失望の念がよみがえつた感想でもあつたのであろうか。

日光にて

六日早朝、晋作は日光へ向かった。日光街道を進む途中、「日光山、突出す」とある。おそらく視界が急に急にひらかれて、日光の男体山や赤薙・女峰の連峰が視界に突然出現する徳次郎宿を過ぎたあたりからの眺めであろう。平坦のようにみえる日光路（杉並木街道）も意外に勾配がある。晋作は、「すこぶる勞働を覚える」とある。

六日、日が暮れて日光についた晋作は、地元の人から「日光警備士山口為之助」は、他国の剣術修行者が訪れると逗留させて試合をすると聞く。山口は日光奉行支配吟味役山口忠兵衛のことであり、神道無念流の使い手であつた。自宅の一角に道場を設け、日光奉行所の同心などにも剣術教授をしていた。また、江戸へ出府したときには、斎藤弥九郎（神道無念流・練兵館）、千葉周作（北辰一刀流・玄武館）、桃井春蔵（鏡心明智流・士学館）の道場の門を叩いたと伝えられている（柴田豊久論考「幕末の日光の剣術」）。晋作は、旅の疲れも忘れて、早速、山口宅を訪ねた。しかし、山口はあいにく留守であつた。応接にでた家僕に、「今、日光奉行が出府中で、主人は何かと忙しい。試合はとも無理だろう」といわれた。晋作は、この家僕の応接がよほど気に入らなかつたらしく「その言語と応接、不遜極まれり、これ幕府の悪臭、怒るに足らず」と憤慨している。

内藤作兵衛門人として柳生新陰流の免許皆伝の腕前であつた晋作と試合をしたらどちらに軍配が上がつたであろうか。二人の試合がすれ違いによつて実現しなかつたのは残念でならない。

ともあれ、やむなく宿に投じた。宿に投じた晋作は、東照宮の見物に先立って、奥日光中禅寺へ景勝探訪を企画して、宿の亭主に案内人の手配を依頼した。その夜は、中禅寺の地理を極めようと地図を眺めては終夜眠らなかつたという。なにが晋作をしてその

ように精神をたかぶらせたのであろうか。

翌日（七日）、晋作は案内人とともに、途中、寂光瀧、裏見瀧を見物しながら中禅寺へ至った。旧暦九月七日といえは新暦では十月初旬のことであり、奥日光の紅葉が色づきはじまったころであろう。日光は、天平神護（奈良時代）の昔から修験の霊場としての伝統を持つだけに、瀧の名前にも「華嚴」、「般若」、「方等」、「寂光」など、仏教にちなんだものが多い。晋作が、探勝した「裏見瀧」は、その名前のとおり、裏側から見物できる瀧である。

翌八日、晋作は、東照宮など日光の社寺を見物した。師の吉田松陰も八年前の嘉永五年（一八五二）、宮部鼎蔵（肥後藩士・後に池田事件で新撰組に斬殺される）との奥州の旅の帰途に、会津西街道を経て日光を訪れた。松陰も、その時、東照宮を「見物」しており、「社は造築宏壮、――（中略）――爛々として目を眩ます、鳴、美なるかな」とすなおに賞賛している（吉田松陰『東北遊日記』）。

しかし、晋作は、「東照宮を謁す。その他神社仏閣、勝けて数えつくすべからず。さいせんを取り浮造の俗民をなやます。かくの如くそれははなはだしきか。すこぶる慨嘆にたえざるなり」と批判し、さらに「東照宮神祠、広大無辺、○金銀かなぐ、唐木のほり物、その外石燈、諸大名へつらいのために奉る物、数うべからざるなり」とさめた見方をしている。

前年、幕府によって師の吉田松陰を屠られた若き長州藩士とすれば当然のことであつたろう。晋作が日光を訪れたのは、松陰の折にふれた話にでも接していたのかもしれない。それにしても晋作が東照宮「見物」に優先して、滝めぐりをしながら奥日光を探勝するコースを選択していることは興味深い。

壬生にて

午後、日光を後にした晋作は、今市宿から例幣使街道に入り、鹿沼宿に一泊。翌九日、壬生に着いた。壬生は壬生藩（鳥居家・三万石）の城下である。

壬生藩の藩祖鳥居元忠は、徳川家康の武将であつた。関が原の合戦（慶長五年・一六〇〇）の前夜には、家康が奥州の上杉景勝を討伐のため東下したとき、伏見城の留守居として残されたが、豊臣方の石田三成の軍勢に襲撃され、孤軍奮闘のうえ全員が討ち死にした。家康は、伏見城の血染めの暈を江戸城の大手門につるして鳥居元忠の忠勤

ら、若き壬生藩士らと時勢を語り合うところがあつたのかもしれない。晋作は、十二日、壬生を立ち、太平山、足利を経て上州路へ向かった。

旅を終えて

壬生を後にした晋作は、上州路をへて信州路に入り、上田をへて、松蔭の密航に関与して、国許で謹慎中であつた佐久間象山を松代に訪ねた。さらに、善光寺に詣でて、北国街道を高田にいたり、日本海沿いに糸魚川、加賀、福井藩に招聘されていた横井小楠（熊本藩士・実学者）を福井へ訪ねている。そして、大津、伏見、大坂をへて十月下旬、長州の萩に帰る。

この「試撃行」の旅での加藤有隣、佐久間象山、横井小楠ら有識者との交流は、晋作をして「僕、この節三年、戸を閉めて、読書の志」を起こさせたほど強いインパクトを与えた旅であつた。しかし、風雲急を告げる時代は晋作にそのような余裕を与えなかった。以後の高杉晋作の年譜をみると、二年後の文久二年（一八六二）五月、幕府の使節に随行して上海へ行く。そして、上海が英仏の半植民地と化している現状をつぶさに見聞して欧米諸国の領土侵略の危機感をいだいた。

晋作は、一慷慨家から攘夷論者、さらには割拠論者へと成長していく。割拠論とは、長州藩の軍備を強固にして、あてにならない幕府支配から離脱しようという考え方である。帰国した晋作は、文久二年（一八六二）九月、再び笠間に加藤有隣を訪問。横浜で外国公使を暗殺する計画を打ち明ける。しかし、有隣は賛同しなかったという。晋作は方針を変更して品川御殿山に幕府が建築中だった英国大使館を伊藤俊輔（博文）らと焼き討ちをした（十二月）。

この間、政治の重心は京都へ移る。文久三年（一八六三）三月、十四代将軍家茂は徳川将軍として二百三十年ぶりに上京した。そして、朝廷に破約攘夷を約束させられた。そして、その決行日を五月十日とした。実現不可能な攘夷の実行は幕府の苦渋の決定であつた。

長州藩は、額面どおり、文久三年五月中旬から下旬にかけて下関を航行する外国艦船を砲撃して「攘夷」を決行した。しかし、六月には英仏米蘭の四カ国に報復され、下関砲台を占領される（馬関戦争）。晋作は、身分にとられない奇兵隊を結成（六月）して藩の軍制強化を図る。

ぶりを喧伝したという。

また、この地方は、享保年間に、神道無念流を興した福井兵右衛門嘉平を輩出したことから剣術はさかんであつたという。神道無念流は、その後、戸賀崎熊太郎、岡田十松と受け継がれて、幕末時には斎藤弥九郎（練兵館）が正統を継いでいた。壬生藩士野原正一郎は、練兵館の塾頭を務めた。ちなみに長州藩の桂小五郎（木戸孝允）は、野原の後に塾頭となっている。壬生藩の指南役松本五郎兵衛も天保六年（一八三五）、三十歳のときに斎藤弥九郎から免許皆伝を得ている。

壬生城下に入った晋作は、早速、城の近くに剣術道場を構える松本五郎兵衛に書を認めて来意をつげた。まもなく松本の門弟が晋作のもとを訪れて明日、試合に応じること約束した。夜になって松本道場に逗留していた佐賀藩士田中龍之助なる者が晋作を訪ねてきた。田中は旧姓を佐良雄蔵といい、晋作が幼少のころ、長州を訪れて晋作の剣術の師匠である内藤作兵衛に剣術を学んだという。異郷の地での同門の士との出会いが余程うれしかったのか、予、その語を聞き、手を撃つて曰く、佐良殿か。足下我藩に至る。予もとより少年」と親愛を表明している。

松本五郎兵衛は、門人たちが建てた墓碑（常楽寺）によれば、明治八年七月十日に七十一歳で卒したというから、晋作が訪れたのは五郎兵衛が五十六歳のときであつた。

五郎兵衛の子孫は、いまも壬生町に健在である。松本家には斎藤弥九郎（二代目）や大村藩士渡辺昇からの書簡も遺されており、五郎兵衛との剣術を通じた諸国士との交流を偲ばせている。特に斎藤弥九郎道場（練兵館）を中心に水戸藩士や、長州藩士との交流が深かったに違いない。

翌十日と十一日、晋作は、松本道場で、松本五郎兵衛を始め壬生藩の藩士たちと試合をした。晋作の試合帖には、松本五郎兵衛やその門人である壬生藩士である上野金次郎、秋山鉞太郎、水井喜作、北原仙吉、早川惣治、井狩播太郎、増田鏑太郎、酒井惣吉、守田兵蔵、柳橋徳蔵、鎌田寸四郎ら十三名と試合をしたことが書き留められている。

筆者は、かつて松本五郎兵衛の曾孫にあたる松本万里氏から「高杉晋作は、五郎兵衛に一本もとれなかった」との松本家のいい伝えをうかがったことがある。

晋作のこの旅日記である「試撃行日譜」の記事は急に、壬生から簡略になっていることが注目される。晋作の日記は、なぜか挫折すると、それ以降の記述が簡略になることがみられる。まだ一慷慨家にすぎなかった晋作ではあつたが、鎌田寸四郎、増田鏑太郎

一方では、長州藩は、（文久三年八月）会津藩・薩摩藩によって京都から追放される（八・一八の政変。これに追い討ちをかけたように幕府は長州征伐（第一次）を敢行する。

長州藩は、幕府に妥協するいわゆる「俗論派」が藩の実権を掌握した。晋作は、一時九州へ亡命（元治元年（一八六四））。しかし、元治元年（一八六四）十二月、晋作は長州にもどり、単騎拳兵（功山寺拳兵）して藩の正規軍を破り、藩の実権を掌握した。この頃、晋作は海外行きを希望して武器商人グラバーらと接近、下関開港に尽力した。このような行動により、攘夷派から命を狙われて愛人おうのと四国地方へ逃避行。幕府は、慶応元年（一八六五）、再び長州征伐（第二次）を敢行。しかし、長州藩は、奇兵隊を中心に各地で幕府軍を撃破する（四境戦争）。そして、これまで犬猿の仲であつた薩摩藩・長州藩の盟約（薩長同盟・慶応二年（一八六六）一月）がなつた。晋作の動きはまさに「動けば雷電の如く、発すれば風雨の如し」（高杉晋作顕彰碑文）と形容するにふさわしい活躍である。しかし、晋作は、慶応二年七月、幕府側である小倉城を攻撃中に結核を発病。戦略を指揮して小倉城は炎上して落城（八月）する。しかし、晋作は、十五代将軍徳川慶喜が大政奉還のする半年前の慶応三年（一八六七）四月、妻雅子、愛人おうの、晋作のよき理解者である野村望東尼、そして奇兵隊の隊士に見守られながら短い生涯を閉じた。

晋作の辞世の句は「面白きこともなき世を面白く・・・」である。晋作を見舞つていた野村望東尼が「すみなすものは心なりけり」と平凡な下句をつけた。晋作の短い生涯をみると、自分の目で確かめて実践する。だから時には同志からも距離を置き、時には単独でも行動を起こす（功山寺拳兵）。まさに吉田松陰が最後に到達した「草莽崛起」に徹したといえる。

万延元年（一八六〇）、まだ一慷慨家に過ぎなかった晋作が、秋の野州路をさわやかに、そして、ひょうひょうと過ぎていった姿が目につかぶようである。

関係者のその後

ところで、試撃行の旅で高杉晋作と出会った人物や出会うべき人物などのその後の消息についても触れておこう。

まず笠間の加藤有隣である。晋作は、上海行ののち、文久二年（一八六二）九月、「攘夷実行」の相談のため、笠間に再び加藤有隣を訪れている。英国人襲撃の相談に、有

隣は賛意を示さなかったという。この直後、有隣は、長州藩に江戸の長州藩邸で、經書を講じた。翌年には長州に赴いて長州藩の藩校である明倫館の教授に就任。水戸学の講義を行い、明治維新を長州で迎え、その後新政府から軍務官御用掛を命ぜられた。東京に出てからは桜翁と号し、教育に尽力する。

宇都宮では、文久二年（一八六二）正月、大橋訥庵と宇都宮の門人達が中心となって、江戸城へ登城する老中安藤対馬守（陸奥平藩主）を坂下門外で襲撃した（坂下門外の変）。坂下門外の変は、安藤対馬守に軽症を負わせたに終わったが、この事件は、井伊大老暗殺につづく幕府首脳の襲撃事件であり、時代の潮流を公武合体から倒幕へと展開させる契機ともなった事件でもあった。

蛇足ながら訥庵の妻卷子は、坂下門の変の発端から結末までを歌物語にした「夢路の日記」を著した。これは公刊されて多くの「志士」にもてはやされた。晋作の良き理解者であった野村望東尼も共鳴して「たまと云うたまは砕けて光なきざざれかはらの輝くはなど」と詠んだという。

また、文久三年（一八六三）三月には、訥庵門下の宇都宮藩士広田執中、岸上安臣（変名：野田四郎）は、脱藩して長州へ赴き、晋作や久坂玄瑞の知偶を得て、馬関戦争にも参加した。その後、二人は、会津藩と公武合体派の薩摩藩に長州藩が京都政界から追い落とされた禁門の変（元治元年（一八六四）・蛤御門の変ともいう）に参加した。その後敗れて、天王山で真木和泉ら十六人の同志とともに自決した。その際、晋作に後時を託す手紙を遺したという逸話がある（『下野勤皇列伝』）。

高杉晋作が試合をしようとした日光奉行支配吟味役の山口忠兵衛は、慶応二年今市宿でおこった打ちこわしの首謀者を惨殺して武力鎮圧すると、硬派の吟味役として知られる。戊辰戦争の際には、日光奉行所が新政府軍に恭順の姿勢をとった中で、山口は、新政府軍に抗するため、家族ともども、ひそかに日光を脱出した。その後、足尾村で農兵を組織して、新政府軍への抗戦活動をしていたという。そして、明治二年（一八七〇）、維新政府の要人暗殺を企てたといわれている米沢藩士雲井龍雄事件に連座して、新政府の厳しい取調べを受けて、三十七歳で獄死するという悲壮な運命をたどった。

そして、剣術試合をした壬生藩では、その後、元治元年（一八六四）、水戸天狗党の挙兵に際しては、壬生藩士のなかからも参加者がでた。五郎兵衛は、壬生藩の軍師として藩兵を指揮し、これら門弟らが参加した天狗党を追討に向かうという皮肉なめぐ

り合わせとなった。

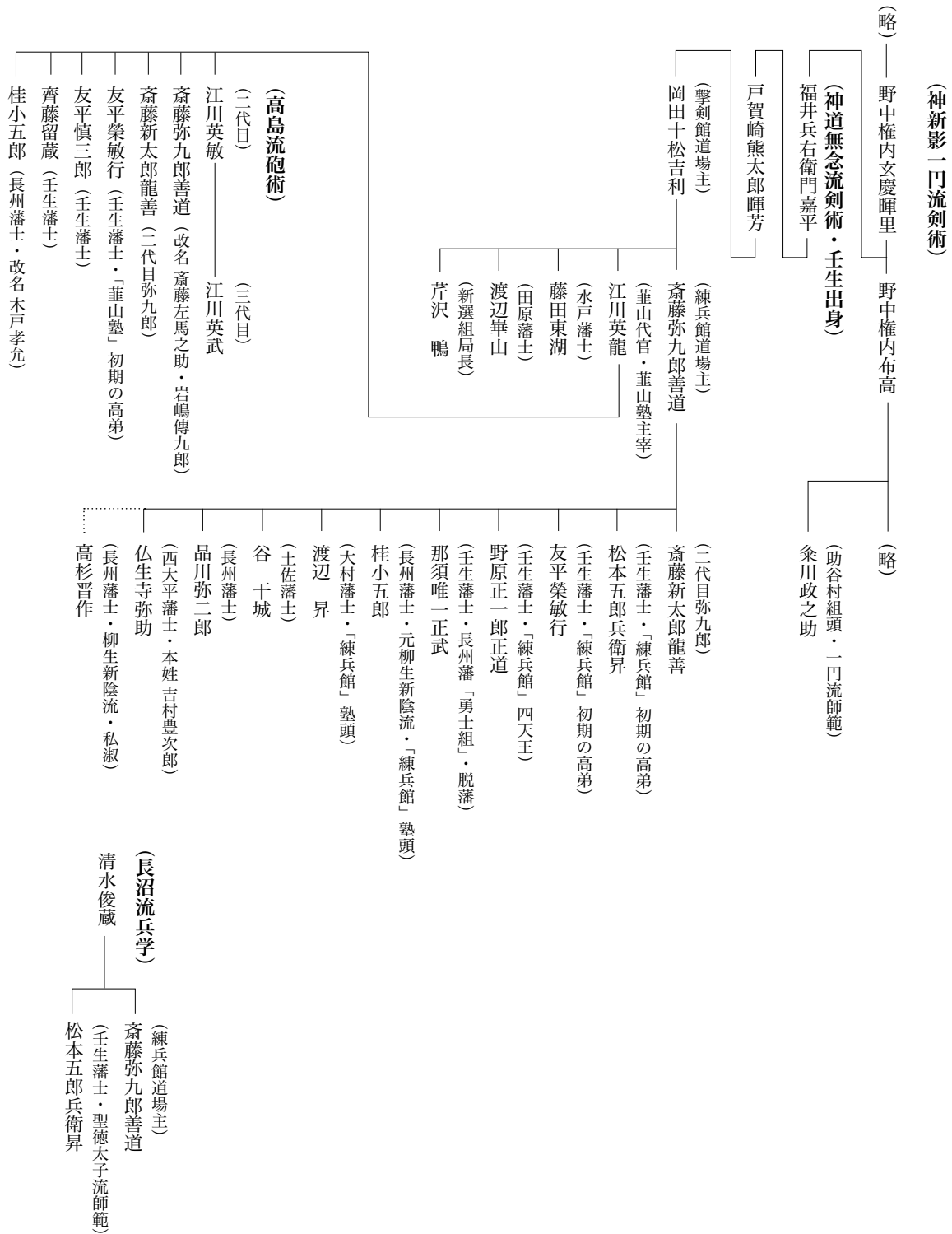
鎌田寸四郎は、水戸天狗党に参加し、未決中に自決した。増田鏑太郎は、明治維新後、壬生藩の大参事に就任。廃藩置県後には名古屋県、神奈川県など各県の県官を歴任し、明治二十二年（一八八九）、横浜の初代市長に就任した。守田兵蔵は、明治初年、測量学を修め、一時期、新政府の鉱山寮局に出仕したが、古河市兵衛に見込まれて足尾銅山の経営に携わり、晩年には、日光の西沢金山の廃土を利用して日光焼を手がけるなど日光の名望家として生涯を閉じた。北原仙吉は、作家北原武夫の大伯父である。

このように、エネルギーをもった人々は、立場は異なっても学問塾の同門や剣の流派をつうじて、互いに影響しあつて、さらに昇華させていることがわかるのである。

＊本稿は、かつて筆者が、高杉晋作のゆかりの東行庵（下関市）の「東行庵だより」に寄稿した「高杉晋作と日光」、「高杉晋作と壬生」、「高杉晋作と宇都宮」に加筆してまとめたものである。

【参考文献】…『高杉晋作全集』（新人物往来社・一九七四）・一坂太郎著『改訂版 高杉晋作を歩く』（山と溪谷社・二〇〇六）・『笠間市史上巻』（笠間市・一九九三）・『下野勤皇列伝』（栃木県教育会・一九四〇）・柴田豊久論述「幕末日光の剣術」（『柴田豊久著作集』所収・下野新聞社刊・一九八三）・植田俊夫著『野州流派剣術の研究』（一九九二）・拙著『明治維新と日光』（随想舎・二〇〇五）・壬生町史・通史編Ⅱ（壬生町・一九八九）

神道無念流剣術の系譜



壬生の武芸 年表

西暦	和暦	関係事項
一七〇二	元禄十五	福井兵右衛門嘉平、都賀郡藤葉村（現壬生町大字壬生乙字藤葉）に生まれる。幼名は川上善太夫（生年については元禄十一年説有り）。
一七二二	正徳二	水口藩主鳥居忠英、一万石を加増され三万石の壬生藩主となる。
一七二三	正徳三	藩主鳥居忠英、藩学「学習館」を設立し兵書を講じる。
一七二三	享保元	藩主鳥居忠英、逝去（五十二歳）。
一七四〇	元文五	福井兵右衛門嘉平、神道無念流剣術を創始し、江戸四ツ谷に道場を開き、弟子をとる。
一七四四	延享元	戸賀崎熊太郎暉芳、埼玉郡上清久村に生まれる。名を暉芳、知道軒と号す。
一七五九	宝暦九	戸賀崎熊太郎暉芳、福井兵右衛門嘉平に入門し、神道無念流を学ぶ。
一七六三	宝暦十三	戸賀崎熊太郎暉芳、免許皆伝の印可をうける。
一七六五	明和二	岡田十松吉利、埼玉郡砂山村に生まれる。名を吉利。
一七六七	明和四	糸川政之助、都賀郡助谷村に生まれる。
一七七八	安永七	戸賀崎熊太郎暉芳、江戸裏二番町に神道無念流の道場を開き、弟子をとる。
一七八〇	安永九頃	岡田十松吉利、戸賀崎熊太郎暉芳に入門し、神道無念流を学ぶ。
一七八一	天明元	福井兵右衛門嘉平、逝去（八十三歳）。
一七八八	天明八	戸賀崎熊太郎暉芳、「福翁府君神道碑」を建立する。
一七九〇	寛政二	岡田十松吉利、免許皆伝の印可をうける。
一七九二	寛政四	糸川政之助、野中権内布高より神新影一円流の免許を受ける。

一八二八	文政十一	野原正一郎正道、壬生城下に生まれる。▽斎藤新太郎、斎藤弥九郎善道の嫡男として生まれる。
一八三〇	文政十三	松本五郎兵衛昇、叶間茂作より聖徳太子流剣術の免許を受ける。
一八三四	天保五	松本五郎兵衛昇、清水俊蔵より長沼流兵学の免許を受ける。
一八三五	天保六	松本五郎兵衛昇、斎藤弥九郎善道より神道無念流の免許を受ける。
一八三七	天保八	モリソン号事件、大塩平八郎の乱
一八三八	天保九	斎藤弥九郎善道が主宰する「練兵館」が類焼し、三番町に再建される。
一八三九	天保十	高杉晋作、萩城下で生まれる。
一八四一	天保十二	高島秋帆の徳丸原大演習 那須唯一正武、壬生城下に生まれる。▽友平榮敏行、師斎藤弥九郎と水戸「弘道館」の仮開館式に招かれ剣術上覧。▽江川太郎左衛門英龍、高島秋帆に入門し、高島流砲術を学ぶ。
一八四二	天保十三	斎藤弥九郎善道・新太郎父子、江川太郎左衛門英龍に入門する。
一八四三	天保十四	友平榮敏行、江川太郎左衛門英龍「葦山塾」に入門し、高島流砲術を学ぶ。
一八四六	弘化三	友平榮敏行、奥儀伝授をうける。
一八四七	弘化四	千葉・桃井・斎藤・男谷等十一の道場主が集まり他流試合を開始。野原正一郎正道は「練兵館」四天王の一人として対戦（都下諸流試合）。▽斎藤新太郎、諸国修行にでる。同行した門人は、野原正一郎正道・細田泰一郎・山田惣二郎・清水牧太の四人である（「練兵館」四天王）。▽藩主鳥居忠挙、藩学「学習館」を拡充改組し、藩学綱領に〈文武両道〉を掲げる。▽松本五郎兵衛昇、藩聖徳太子流剣術師範となる。
一八四九	嘉永二	野原正一郎正道他、斎藤新太郎の諸国修行の途、長州藩士桂小五郎と試合（「柳生新陰流」内藤作兵衛門人）。
一八五〇	嘉永三	友平榮敏行、藩高島流砲術師範となる。
一八五一	嘉永四	野原正一郎正道、他流試合のため斎藤新太郎と佐倉藩に出向く。

一七九五	寛政七	岡田十松吉利、戸賀崎熊太郎暉芳の道場を受け継ぎ、その後神田猿楽町に「撃剣館」を主宰する。
一七九八	寛政十	斎藤弥九郎善道、射水郡仏生寺村に生まれる。名を善道、晩年は篤信斎と号す。
一八〇一	享和元	江川太郎左衛門英龍、伊豆国田方郡の葦山屋敷に生まれる。幼名を邦次郎、名を英龍、坦庵と号す。
一八〇四	享和四	糸川政之助、野中権内布高と日光方面に赴き剣術指南。▽糸川政之助、野中権内布高と喜連川公に剣術上覧のため喜連川方面に出かける。
一八〇五	文化二	松本五郎兵衛昇、壬生城下に生まれる。
一八〇八	文化五	フエートン号事件
一八〇九	文化六	戸賀崎熊太郎暉芳、逝去（六十六歳）。
一八一五	文化十二頃	斎藤弥九郎善道、岡田十松吉利「撃剣館」に入門し、神道無念流を学ぶ。
一八一六	文化十三	友平榮敏行、宇都宮城下に生まれる。
一八一八	文政元	江川太郎左衛門英龍、岡田十松吉利「撃剣館」に入門し、神道無念流を学ぶ。
一八二〇	文政三	江川太郎左衛門英龍、免許皆伝の印可をうける。▽岡田十松吉利、逝去（五十六歳）。
一八二五	文政八	異国船打払令 斎藤弥九郎善道、師岡田十松吉利「撃剣館」を継ぐ。
一八二六	文政九	斎藤弥九郎善道、組板橋付近に「練兵館」を開く。▽鳥居忠挙、家督を相続し壬生藩主となる。

一八五三	嘉永六	ペリー来航 藩主鳥居忠挙、幕府の要職若年寄になる。▽松本五郎兵衛昇、藩軍事奉行となる。▽友平榮敏行、江川太郎左衛門英龍の命により品川台場築造に従事する。▽糸川政之助、逝去（八十七歳）。
一八五五	安政二	江川太郎左衛門英龍、逝去（五十五歳）。 この頃、藩主鳥居忠挙、桂小五郎の剣技をみるため江戸藩邸に招く。
一八五七	安政四	藩主鳥居忠挙、逝去（四十三歳）。
一八六〇	万延元	桜田門外の変、咸臨丸渡米 高杉晋作、内藤作兵衛より柳生新陰流の免許を受ける。▽松本五郎兵衛昇、「試撃行」の途中壬生を訪れた高杉晋作と試合をする（四日間逗留）。
一八六三	文久三	野原正一郎正道・那須唯一正武、長州藩主の命により「練兵館」から京都に「勇士組」を派遣する際に選ばれる。野原は年内帰藩。
一八六四	元治元	那須唯一正武、禁門の変（蛤御門の変）に「力士隊」隊長として陣頭に立ち、幕軍と乱闘の末戦死（二十四歳）。▽松本五郎兵衛昇、水戸天狗党が筑波山で拳兵したため、幕府から討伐の命をうけ藩軍師として采配を振るう（水戸天狗党事件）。
一八六七	慶応三	野原正一郎正道門人二百三十三名、太平山神社に額を奉納する。 ▽高杉晋作、逝去（二十九歳）。
一八六八	明治元	鳥羽伏見の戦い（戊辰戦争） 松本五郎兵衛昇・野原正一郎正道、藩主が病気のため、弟鳥居忠文が名代として上京する際の護衛団となる。▽野原正二郎正道、藩剣術師範となる。
一八六九	明治二	帯刀禁止令（廃刀令）
一八七一	明治四	斎藤弥九郎善道、逝去（七十四歳）。
一八七二	明治五	友平榮敏行、陸軍省陸軍大佐となる。
一八七五	明治八	松本五郎兵衛昇、逝去（七十一歳）。
一八八二	明治十五	友平榮敏行、逝去（六十七歳）。
一八八八	明治二十一	野原正一郎正道、逝去（六十一歳）。▽斎藤新太郎、逝去（六十一歳）。
一九〇三	明治三十六	那須唯一正武に従五位が贈られる。

041 付 都下諸流試合

弘化四年二月八日（練兵館十二名の参加）	田宮流指南
久保田助太郎道場において試合	三十八試合
弘化四年二月二十六日（練兵館十六名の参加）	鏡心明智流三世指南
桃井春蔵道場において試合	四十九試合
弘化四年三月一日（練兵館十五名の参加）	伊庭軍兵衛道場において試合
四十九試合	弘化四年三月二日（練兵館十四名の参加）
千葉周作道場において試合	二十七試合
弘化四年三月八日（練兵館十五名の参加）	男谷精一郎道場において試合
三十七試合	弘化四年三月十八日（練兵館十三名の参加）
団野源之進道場において試合	四十三試合
弘化四年三月二十日	岡田十内道場において試合
四十試合	弘化四年三月二十二日
一刀流指南	大久保九郎兵衛道場
三十六試合	弘化四年三月二十七日（練兵館十三名の参加）
一刀流指南	近藤弥之助道場において試合
四十二試合	弘化四年三月二十八日
直心影流	横川七郎道場において試合
五十試合	

042 043 付 諸国修行

○斎藤新太郎と門下	野原正二郎・細田泰一郎・清水牧太・山田惣二郎の同行
弘化四年（一八四七）	四月四日
	四月十三日
	四月十五日
	四月十六日
	四月二十三日
	四月二十四日
	五月一日―四日
	五月十一日
	五月十二日
	五月十三日
	五月二十四日
	五月二十八日
	六月二十七日―九月十日
	八月二十七日―二十九日
	九月二十六日―二十八日
	九月二十九日
	十月一日
	十月十一日
	十月十五日
	十月三十一日
	十一月七日
	十一月十一日
	十一月二十日
嘉永元年（一八四八）	三月二十日
	七月
	七月十七日
	七月二十四日
	八月五日―二十日
	蝦夷松前藩（神道無念流）
	蝦夷松前藩江差住（神道無念流）
	陸奥津軽弘前藩（小野派一刀流）
	出羽久保田藩（直心影流）
	出羽庄内鶴岡藩（直心影流）
	出羽久保田藩湯沢住（心極流）
	出羽最上天童藩（直心影流）
	出羽最上山形藩（鈴木派無念流・浅山一伝流）
	越後村上藩（直心影流）
	越後新発田藩（直心影流）
	越後中村浜住（直心影流・時中流）
	越後水原住（神道無念流）
	下野県邑住（神道無念流）
	上野館林藩（直心影流）
	伊豆蕪山藩（神道無念流）
	駿河田中藩（直心影流）
	三河吉田藩（山下無敵流）
	三河田原藩（神道無念流）

八月二十三日	三河西尾藩（克己流・養勇流）
九月三日―五日	伊勢津藩（神妙流・卜伝流・直心影流・神力一刀流・目華流）
九月二十二日	摂津大坂住御鉄砲方同心（直心影流）
九月二十六日	大坂浪士（鈴木派無念流）
	大坂玉造与力（天羽流）
十月一日	大坂玉造口同心（直旨流）
十月二日	米津越中守藩（直心影流）
	玉造口御蔵番
十月	播磨三日月藩（直心影流）
十月十二日	美作津山藩（理方一流・自勝帰真流）
十月十六日	美作勝山藩（一刀流）
十月十九日	備中松山藩（直心影流）
	伊予今治藩（無三自現流）
十月二十七日―二十九日	伊予今治藩（以心流・真貫流・以心得宗流）
十月三十日	伊予松山藩（新当流）
十一月五日	伊予新谷藩（直心影流）
十一月八日	伊予宇和島藩（田宮流）
十一月十八日―十九日	伊予西條藩（柳生新陰流・田宮神剣流）
十一月二十八日	阿波藩関邑住（真貫流）
十一月二十九日	阿波徳島藩（神道無念流）
十二月三日	讃岐藩入野山住（関口流）
十二月五日	讃岐高松藩（一刀流）
十二月七日	讃岐高松藩林田住（無相流）
十二月十八日―一月十日	備中岡田藩（神道無念流）
嘉永二年（一八四九）	一月十日―十四日
	一月十五日―二十日
	一月二十三日―二十六日
	一月二十八日
	二月五日―五日
	二月二十四日
	二月二十七日
	三月一日
	三月四日

三月六日	周防石田居住毛利筑前内（神道無念流）
三月十日	長門府中藩（田宮流）
三月十四日	豊前中津藩（一刀流・外他一刀流・新当流）
三月十九日	豊後日出藩（直心影流・東軍流）
三月二十一日―二十二日	豊後府内藩（直指流・直心影流）
	豊後岡藩（抜討流・直指流）
	豊後臼杵藩（直心影流）
	日向高岡（直心影流）
三月二十五日	肥後人吉藩（新影流・一刀流・家川念流）
四月十八日	筑後柳河藩（家川念流）
四月二十九日	肥後宇土藩（新陰流）
	肥後熊本藩（新陰流・四天流）
	筑後柳河藩（大石神陰流・家川念流・電撃抜討流・疋田豊五郎流・新陰流）
	筑後久留米藩（浅山一伝流・神陰流・直心影流）
	対馬府中藩（無双神陰流・愛洲神陰流）
	肥前蓮池藩（心形刀流）
閏四月二十三日	肥前佐嘉藩（タイ捨流剣術・直心影流剣術・鉄人流剣術）
閏四月二十五日	肥前小城藩（新陰流・戸田流・大石神陰流）
閏四月二十七日―二十八日	肥前鹿島藩（大石神陰流）
五月一日	肥前大村藩（神道無念流・片山流）
五月四日	肥前唐津藩（四天流）
五月六日	長崎（神陰一刀流）
五月十日	長崎奉行支配（武信流・真陰流）
五月十四日	肥前大村藩（神道無念流・片山流）
五月二十四日―二十七日	肥前平戸藩（心形刀流・一円明流・直心影流・一刀流）
六月二日	肥前唐津藩（四天流兵法）
六月五日	筑前秋月藩（以心流・丹石流）
六月九日	筑前長州藩（片山流・新陰流）
六月十六日―十九日	石見津和野藩（江流）
八月十七日	因幡因州藩（神刀兎山流）
八月二十八日	京都二条所司代組与力（是心流・直心影流）
九月十四日	京都住（直心影流）
九月十六日	近江膳所藩（直心影流）
九月二十日	

第一章「神道無念流剣術」の流祖 福井兵右衛門嘉平

一、流祖 福井兵右衛門嘉平と壬生

No	資料名	頁数	時代	所蔵先
001	* 福翁生誕地・藤葉村の祠〈写真〉	一枚		当館
002	野中権内玄慶暉里 神新影一円流免許	一卷	享保七	個人蔵
003	* 福翁府君神道碑〈写真〉	一枚	天明八	当館
004	戸賀崎熊太郎 神道無念流目録	一卷	宝暦十	個人蔵（久喜市公文書館）
005	戸賀崎熊太郎 神道無念流免許皆伝書	一卷	宝暦十三	個人蔵（久喜市公文書館）

二、継承 戸賀崎熊太郎から岡田十松〈撃剣館道場〉

006	戸賀崎熊太郎肖像画	一幅		個人蔵（久喜市公文書館）
007	* 戸賀崎氏練武遺跡〈写真〉	一枚		当館
008	神道無念流演武場壁書	一卷		個人蔵（久喜市公文書館）
009	岡田十松 神道無念流免許状	一卷	寛政二	埼玉県立文書館
010	岡田十松書『梅樹図』	一卷		水見市教育委員会
011	* 岡田十松書『五言律詩書』〈複製〉	一卷		財団法人江川文庫
012	斎藤弥九郎 神道無念流免許	一卷	文政十三	水見市教育委員会
013	江川英龍 神道無念流兵法口伝書	一卷	文政二	財団法人江川文庫

三、隆盛 江戸三大道場 斎藤弥九郎〈練兵館〉

014	斎藤弥九郎肖像画	一幅	六十二歳	水見市教育委員会
015	* 神道無念流練兵館跡〈写真〉	一枚		当館
016	神道無念流演剣場壁書	一卷		水見市教育委員会
017	練兵館入塾心得方	一幅		水見市教育委員会
018	斎藤弥九郎書『一行書』	一幅	七十二歳	水見市教育委員会
019	斎藤弥九郎書『一行書』	一振	弘化四	個人蔵
020	伝斎藤弥九郎所用 短刀	一振		水見市立博物館
021	斎藤家所用 竹刀	一振		水見市教育委員会
022	斎藤家所用 木刀	一振		水見市教育委員会
023	大國土豊画 江川英龍肖像画	一幅		財団法人江川文庫
024	◎ 江川英龍画『甲州微行図』	一幅		財団法人江川文庫
025	御用留	一冊	天保九	財団法人江川文庫

050	野原正一郎正道門人「奉納額」	一面	慶応三	太平山神社
051	鯉沼貫一郎 神道無念流免許	一卷	明治五	個人蔵
052	書簡（野原正一郎から田村治兵衛宛）	一通		個人蔵（栃木県立文書館）

三、那須唯一――長州藩〈有志組〉で勇名を轟かせた斎藤弥九郎門人――

053	* 毛利元徳肖像〈写真〉	一枚	明治三	山口県立山口博物館
054	* 剣客 斎藤弥九郎門人付立〈写真〉	一冊	明治初	山口県立山口博物館
055	* 那須唯一戦没碑〈写真〉	一枚		当館

四、松本五郎兵衛――斎藤弥九郎〈練兵館道場〉の高弟――

056	斎藤弥九郎肖像画 讃「報国」	一幅		水見市教育委員会
057	松本五郎兵衛肖像	一枚	明治初	個人蔵
058	壬生藩分限帳	一冊	安政六	常楽寺法寶蔵
059	松本五郎兵衛 長沼流兵法伝授書	一卷	天保五	個人蔵
060	松本五郎兵衛 神道無念流免許	一卷	天保六	個人蔵
061	書簡（斎藤弥九郎から松本五郎兵衛宛）	一通		個人蔵
062	書簡（渡辺昇から松本家宛）	一通		個人蔵
063	松本尚之丞肖像	一枚		個人蔵
064	憾山先生墓碑銘（草稿）	一綴		個人蔵
065	古河藩士千賀牧太英銘録	二冊	安政六	古河歴史博物館

五、友平 榮――斎藤弥九郎の高弟から、江川英龍の高弟へ――

066	* 徳川斉昭肖像画〈写真〉	一枚		水戸弘道館事務所
067	* 水戸藩学弘道館〈写真〉	一枚		水戸弘道館事務所
068	* 書簡（『斎藤篤信斎往復書』〈写真〉）	一冊	天保十二	金沢市玉川図書館
069	友平榮肖像	一枚	明治初	個人蔵
070	壬生藩分限帳	一冊	安政六	常楽寺法寶蔵
071	砲術御門人束修請払帳	一冊	天保十四	財団法人江川文庫
072	* 江川家母屋〈写真〉	一枚		当館
073	砲術門人姓名	二冊		財団法人江川文庫
074	江川家八幡神社の典額	一面	弘化二	財団法人江川文庫
075	雷管式ゲベル銃	一挺	弘化二	財団法人江川文庫
076	五百目カノン 打矢並中り附	一冊	弘化二	財団法人江川文庫
077	友平榮 高島流奥儀誓詞	一紙	弘化三	財団法人江川文庫
078	書状（鳥居忠孝から江川太郎左衛門様宛）	一通	弘化三	財団法人江川文庫
079	江川英龍画『波二千鳥図』	一幅		個人蔵（当館）

026 江川英龍 剣技寒稽古記録

027 江川英龍画 練兵館旧蔵『雲龍之図』

028 江川英龍画 練兵館旧蔵『鷹之図』

第二章 壬生藩の剣客列伝
一、壬生藩学習館の教育

029	鳥居忠孝肖像画	一幅		常楽寺法寶蔵
030	旧壬生藩学制沿革取調要目	一冊	明治十六	常楽寺法寶蔵
031	学習館平面図	一枚	明治十六	常楽寺法寶蔵
032	「壬生尋常小学校」『大日本博覧図』	一枚	明治二十三	個人蔵
033	学習館学規	一卷	弘化三	常楽寺法寶蔵
034	学習館出版書『師善録』	全三冊	天保九	史跡足利学校事務所
035	学習館出版書『永嘉先生八面鋒』	全四冊	天保十四	当館
036	壬生藩庁官員並文武兵隊役員	一冊	明治三	常楽寺法寶蔵
037	聖徳太子流軍要剣術撃闘口業及び「老功」状	一冊	嘉永三	個人蔵

二、野原正一郎――斎藤弥九郎〈練兵館道場〉の四天王――

038	* 斎藤新太郎肖像（弥九郎の子ともたち）〈写真〉	一枚		水見市教育委員会
039	野原正一郎肖像	一枚	明治十九	個人蔵
040	壬生藩分限帳	一冊	安政六	常楽寺法寶蔵
041	都下諸流試合姓名帳	一冊	弘化四	財団法人江川文庫
042	諸州修行英名録	一冊	弘化四	水見市教育委員会
043	修行中諸藩芳名録	一冊	嘉永二	水見市教育委員会
044	* 桂小五郎肖像〈写真〉	一枚	明治二	山口県立山口博物館
045	* 忠正公伝〈写真〉	一冊		山口県文書館
046	* 毛利敬親及び元徳肖像画〈写真〉	一枚		山口県文書館
047	練兵館門人様	一紙	嘉永五	個人蔵
048	古河藩士千賀牧太英銘録	一冊	嘉永四	古河歴史博物館
049	練兵館塾席順	一紙	安政元	個人蔵

080 江川英龍画『一富士二たか三なすび図』

第三章 農民出身の剣客「神新影一円流」の遣い手 糸川政之助

一、一円流の伝承者 野中布高と遣い手 糸川政之助

081	* 野中権内剣先生之墓〈写真〉	一枚		当館
082	三先生石碑造立寄付帳	一冊	文政元	個人蔵（栃木県立文書館）
083	三先生石碑造立助成帳	一冊	文政元	個人蔵（栃木県立文書館）
084	糸川政之助 奉納刀	一振	寛政五	個人蔵
085	神新影一円流道場壁書	一卷		個人蔵（栃木県立文書館）
086	糸川政之助 一円流門人控帳	二冊	天保五	個人蔵（栃木県立文書館）
087	糸川政之助 一円流試合勝負控帳	四冊	文化十一	個人蔵（栃木県立文書館）
088	万日記覚帳	四冊	享和二	個人蔵（栃木県立文書館）
089	* 糸川政之助墓碑〈写真〉	一枚	嘉永七	当館
090	「栃木喜四郎宅」『大日本博覧図』	一枚	明治二十三	個人蔵

第四章 高杉晋作『試撃行』の旅――壬生篇

一、高杉晋作『試撃行』の旅

091	* 高杉晋作肖像画〈写真〉	一枚		山口県立山口博物館
092	* 高杉晋作生誕跡〈写真〉	一枚		当館
093	高杉晋作の駄刀	一振		萩博物館
094	高杉晋作の稽古胴	一領		萩博物館
095	高杉晋作の木刀	一振		萩博物館
096	高杉晋作 柳生新陰流免許	一卷	万延元	萩博物館
097	高杉晋作筆『試撃行日譜』	一冊	万延元	萩博物館

二、「柳生新陰流」高杉晋作 vs 「聖徳太子流」松本五郎兵衛

098	* 高杉晋作肖像〈写真〉	一枚	慶応二	個人蔵
099	高杉晋作 他流試合士名帖	一冊	万延元	萩博物館
100	松本五郎兵衛肖像	一枚	明治初	個人蔵
101	松本家表札	一枚		個人蔵
102	聖徳太子流起請文	一卷	文化十二	個人蔵
103	松本五郎兵衛 聖徳太子流免許	一卷	文政十三	個人蔵
104	* 松本五郎兵衛門人 増田鐸太郎肖像〈写真〉	一枚		横浜開港資料館
105	* 松本五郎兵衛門人 守田兵蔵肖像〈写真〉	一枚		当館
106	* 松本五郎兵衛門人 水井喜作肖像〈写真〉	一枚		個人蔵
107	旧壬生藩士族明細短冊帳	一冊	明治六	当館

〔写真撮影〕

阿美智篤

〔写真提供者〕

会津若松市役所

金沢市立玉川図書館

水戸弘道館事務所

港区立港郷土資料館

横浜開港資料館

山口県立山口博物館

壬生 剣客伝

幕末の風雲児、
高杉晋作が挑む

編集・執筆——壬生町立歴史民俗資料館

中野正人

掛川まどか

デザイン——笹川アツコ

制作・印刷——株式会社井上総合印刷

発行——栃木県 壬生町立歴史民俗資料館

© 2010

表紙写真——高杉晋作肖像（部分） 港区立港郷土資料館